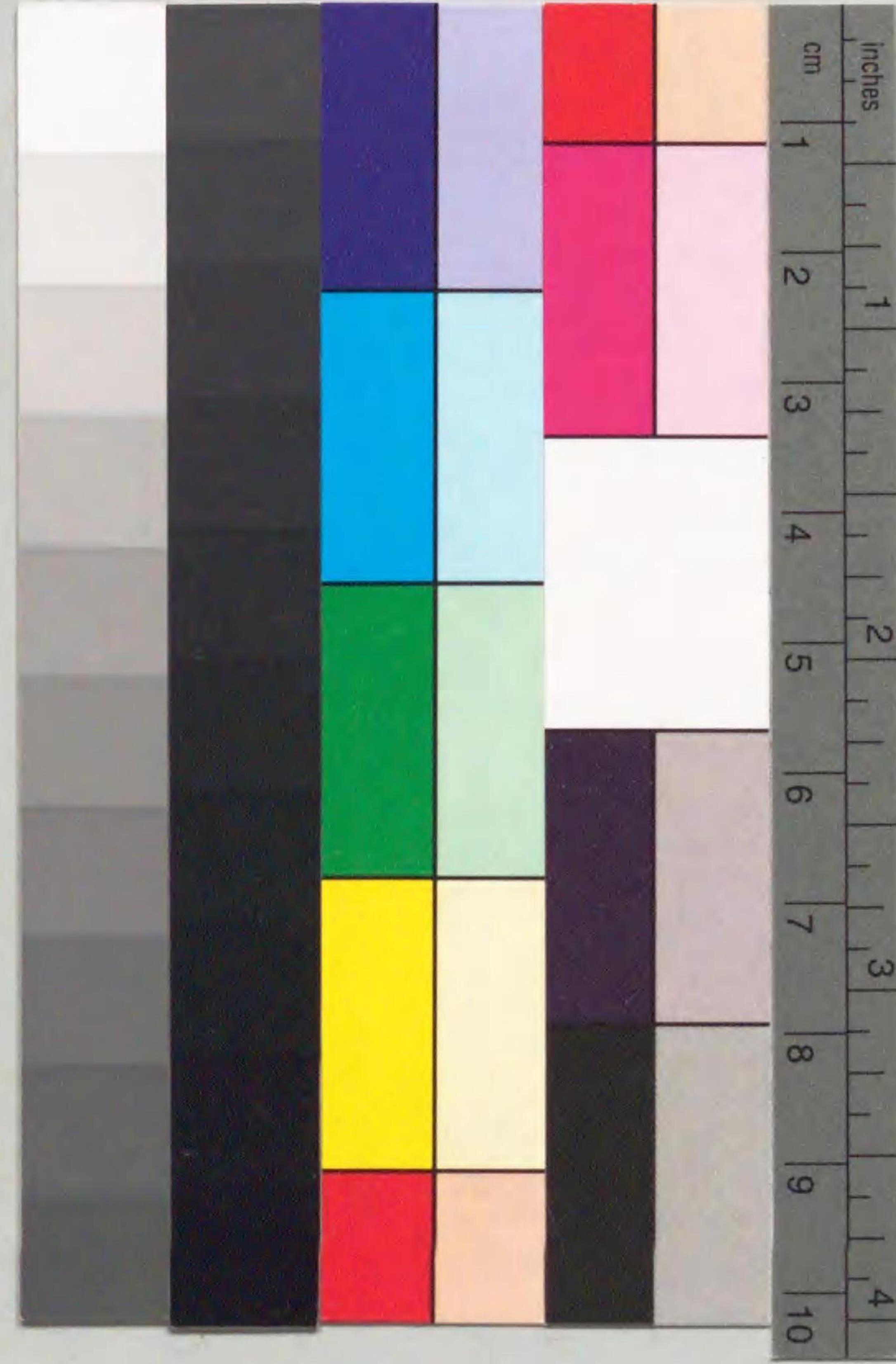


188.8
Ko548
K



口
複
写





國譯禪學大成

第十九卷



289608

國譯禪學大成第十九卷凡例

一、本大成第十九卷には聖一國師東福寺語錄一卷、一山國師妙慈弘濟大師語錄二卷及び狂雲集二卷の三五巻を收載せり。

一、就中、聖一國師東福寺語錄は、略して『聖一國師語錄』ともいひ、京都東福寺の開山勅諭聖一國師圓爾和尚の遺錄にして、國師の滅後、五十一年目の元徳三年、師の法孫たる虎關師鍊の纂輯に係り、本邦入宋禪僧の語録中、最古のものに屬す。本書は片々たる一小冊子にして、之を國師一代の垂示に比すれば、太倉の稗米に過ぎずと雖も、本朝に禪宗の渡來後、初期の集録なれば、先づ以て日本臨濟派祖の語録としては之を以て其の權輿となすべし。而して本書は初め北條氏の末期、元徳三年に刊行せられ、徳川時代に入りては元和六年、東福寺の集雲守藤が之を再刊し、尋で文政十二年に至り、令材和尚等、元和の刻本を増修して、之を東福寺内の常樂庵に印行せり。今次、國譯するについては、専ら元和版に據ると雖も、文政の刻本を以て之を校し、尙ほ其の闕を補へり。

一、一山國師妙慈弘濟大師語錄は、一に『一山寧和尚語錄』、又は『一山國師語錄』とも

稱し、鎌倉時代に我が國に來朝したる一山一寧禪師一代の遺録にして、其の來朝前及び來朝後の語要は總て網羅せり。本書は鎌倉時代の末期、文保元年に既に刊行せられて叢林の間に行はれしが、其の舊版は足利時代、明德元年の火に燬け失せたり。依つて應永十四年に至り、彦裁和尚等重ねて京師の大雲精舎に之を印行し、徳川時代に至りては、元祿四年また京都に於て刊行せられたり。今次の國譯本は専ら此の元祿の刻本に據るも、猶ほ大日本佛教全書中の一山國師語録を以て之を校合し、一々其の異同を訂せり。

一、狂雲集二卷は、京都紫野大徳寺第四十七世一休宗純和尚一代の偈頌を蒐録せるものなり。由來、本書に既刊本數種あり、其の一は寛永十九年、京都の河南四郎兵衛等刊行のもの、其の二は續群書類從文筆部に收むる所のもの、其の三は東京光融館發行の一休和尚全集中のもの、第四は東京民友社發行のもの、是れなり。以上各書は何れも多少の異同あり。今次、國譯に際しては、寛永の刻本を底本となし、之に民友社本を以て校合せり。

一、以上の中、聖一國師語録は國師一代の全録に非ずと雖も、我が邦無準派下の語録中、最古のものにして、其の宗風と機鋒の萬一とを窺ふには唯一のものなり。また一山録は我が禪宗二十四流中、一山派の代表的語録たると共に、當時に於ける日支の外交關係を明かにする史料としても實に缺くべからざるものなり。狂雲集に至りては、誠に禪門偈頌の白眉とも言ふべく、一休の名と共に我が國臨濟派下の一名著として、廣く人口に膾炙せらるるものなり。

昭和五年七月

編者 黃楊道人識す

國譯禪學大成 第十九卷

目次

國譯聖一國師語錄解題	一
國譯聖一國師語錄序	一
國譯聖一國師語錄	一三
聖一國師語錄原文	一三
國譯一山國師語錄解題	一三

國譯一山國師語錄序……………一

國譯一山國師語錄……………一一二五

一山國師語錄原文……………一一七三

國譯狂雲集解題……………一一四四

國譯狂雲集……………一一二二

狂雲集原文……………一一六五

國譯聖一國師語錄

解題

京都東福寺開山聖一國師は在世七十有九年、其の間、東西に說法し南北に垂示して、其の語要積んで汗牛充棟も啻ならざるべからんも、惜しいかな大部分は散佚したると見え、現今世に傳はる所のものは纔かに本書聖一國師語錄と聖一國師法語との二部のみなり。而も本書語錄は片々たる一小冊子にして、國師一代の說法に比すれば、太山の一毫芒に過ぎずと雖も、其の質に於ても、將又我が入宋禪僧の語錄中の先驅をなす點に於ても、實に貴重なるものと謂ふべし。錄中收むる所は、住東福寺語錄、法語、偈頌、佛祖贊、自贊及び無準師範、了惠和尚等の書牘にして、何れも皆精金美玉の言句たり。

此の書、元和六年開板の識語に、「右語錄以三國師年譜再刊助緣之餘資、重刻者也、云々」とあれど、未だ其の舊版の世に存するものを見ず。而も現時、世に流布する元和版と文政版とは、其の内容に於ては敢て異ならざれども、前者には自贊の中、「三林長老請」以下の數首の贊なし。故に今次、國譯するに際しては之を補ひて収録せり。

傳を案するに、國師諱は辯圓、字は圓爾、族姓は平氏、駿州安部郡藁科の人なり。土御門天皇の建仁

二年十月望日を以て生る。此の年、榮西建仁寺を建てて禪宗を弘む。五歳にして久能山に登り、堯辯法師に投じ、八歳にして台教を學んで略々大義に通ず。十五歳にして止觀の講席に列る。講師「故四諦外別立三法性」と云ふ文に至りて辯析に難む。師乃ち解釋して詞義渙然たり。十八歳の時、近江の園城寺に入りて薙髮し、十月、南都の東大寺の戒壇に登り、翌年、洛陽に入りて孔老の教を聴く。二十二歳、園城寺に歸り、一日自ら以爲らく、「我れ比年大小乘を學び、權實の教を究むるも但だ知解を増すのみ、生死大事に於て何の益かあらん」と。乃ち教外の宗を慕うて、上野の長樂寺に往き、榮朝（圓房）禪師に禮して教外別傳の道を聴き、衣を替へて參究す。翌年久能山に歸り、見西阿闍梨より密宗の祕印を受く。二十五歳、相州の壽福寺に到り、住持行勇禪師に謁す。嘉禎元年、師年三十四、四月、船を平戸津より出し、僅かに十日を以て明州の界に著す。時に南宋の理宗皇帝端平二年なり。直に天童山に入りて癡絶沖に謁し、又、堪笑翁に淨慈に見え、薰石田に靈隱に謁す。寧退耕、北山の賓を典り、師と友として善し。一日、師に語つて曰く、「輩下の諸名宿、子既に遍參す。然れども天下第一の宗師は唯だ徑山の無準師範和尚なり。子何ぞ顧眄を承けざるや」と。是に於て、師、徑山に登つて無準に見ゆ。準一見して器許す。未だ一旬ならざるに、師をして巾瓶に侍せしめ、痛く箴箠を加ふ。師、朝參暮請、遂に開悟す。又、倫斷橋、智別山、一環溪、敬簡翁、源靈叟、圻方庵、寧兀庵、曇希叟等の名衲に接して切瑛琢磨す。一日準、師に告げて曰く、「爾、學海浩渺、我が竹篋下に一時に乾枯す。他日木國に歸らば、必ま

涓滴なき所に於て、横に波瀾を起し、無勝幢を豎て、吾が道を發揮し、須らく從上乃祖の遺芳を踵いで永く未來際を利すべし」と。かくて師は支那に在ること七年、精根を盡して修行す。淳祐元年三月一日夜、準、師を室に召し、香を焼いて語つて曰く、「爾、化導時至れり、早く本土に歸りて祖道を提唱せよ」と。自筆の宗派圖と密庵師祖の法衣と自贊の頂相と竹杖とを與へて法信となす。四月二十日、師、佛鑑（無準の賜號）を辭す。佛鑑、楊岐の法衣と大明錄とを出して以て之に附す。同門の諸友、頌を作りて以て送るもの二十餘人。湘絕岸、欽雪巖の二人、泪を揮つて別を惜む。五月朔日、船を明州定海縣に發して歸途に就く。洋中、大風波に遭ひて高麗國に漂着し、七月漸く博多に達す。是れ本朝の仁治二年師年四十歳の時なり。

太宰府の湛慧（隨乘房）、曾て宋に入り、無準に參じて法を受け、師に謂つて曰く、「我れ横嶽山に於て一伽藍を創せんとす、師若し風帆恙なく歸朝しなば、來り住せよ」と約す。是に於て師の歸還を待つて即日來り請す。師即ち崇福の額を掲げて開堂演法す。又肥前の水上山の榮尊（覺禪房、神子と號す）、教寺を革めて禪刹となし、師を請じて開山初祖となし、自ら板首に居す。此の秋、宋人謝國明、博多の東偏に承天寺を創め、師を請じて第一世となす。時に宰府、有智山の僧徒、師の禪化を嫉み、朝に聞して承天寺を毀たんと欲す。朝廷許さず、寛元元年、勅して承天・崇福の二刹を陞せて官寺となす。師、勅賜の二字を掲げ、四來の雲衲を接得して大いに宗乘を振ふ。横嶽の湛慧、事ありて京師に上り、相國

一、二條良實に訴ふ。良實もと慧の名を聞き、驩んで之を延いて宗門の事を問ふ。慧、酬酢響の如し、良實大いに喜んで父大相國九條道家に啓す。道家問うて曰く、「上人、誰を師として此の智辯を得たるや」と。慧答へて曰く、「我が師圓爾、近ごろ宋に入つて親しく徑山の無準和尚の心印を得たり。今崇福・承天の兩刹に於て佛心宗を唱ふ」と。道家使を發して師を京師に招き、之を月輪の別墅に延いて終日道を問ふ。師、酬對流るゝが如し。乃ち就いて禪門の大戒兼ねて祕密灌頂を受く。因つて三子(教實・良實・實經)をして弟子の禮を執らしむ。道家、即ち師をして僧正に任せしめんと欲す、師辭して受けず、復た日本國の總講師に補せんと欲す、師又受けず。因つて親ら聖一和尚の四字を書して授く。唐の代宗、法欽に國一と賜ふの例に擬したりといふ。

是れより先、道家、洛の東南に就いて大伽藍を構へ、名づけて東福寺と曰ふ。將に八宗の衆園として國家の安寧を祈らんと欲す。是に於て革めて禪刹となし、師を請じて開山始祖となす。然れども東福寺未だ成らざるを以て、先づ普門寺を建て、師をして假に焉に居らしむ。建長六年冬、相模に下り、壽福寺に館す。執權北條時頼大いに喜び、師を府内に請じて菩薩戒を受け、就いて玄旨を問ふ。同七年六月東福寺落慶す、因つて師、京に歸りて入寺開堂す。正嘉元年、後嵯峨上皇、師を龜山離宮に召して大乗戒を受け、法要を敷宣せしむ。上皇、歡感に勝へず、躬ら黄金の扇を賜ふ。斯の年、平元帥時頼、師を招いて壽福寺を董さしむ、鐘鼓魚版、一時に響を改む。二年五月、京の建仁寺に遷りしも、佛殿、雲堂、

回祿の後とて壞圯蕭然たり。師皆之等を鼎新し、又東福佛殿の北廊三十七間をも造る。文應元年宋僧寧兀庵來朝す、師其の至るを喜び、待遇甚だ渥し、即ち東福の方丈に於て普說せしむ。弘長元年、師年六十、相陽に往いて、兀庵の建長寺に住するを賀し、明年、備中に赴いて朝原塔を創す。師嘗て室中、理致、機關、向上の三種を擧して學者を接待す。特に諸禪刹を董すのみならず、又教寺を管するもの甚だ多し。大和の東大寺、尊勝寺、攝津の天王寺、京の法成寺の如き皆勅を奉じて之が幹事をなす。文永九年二月、後嵯峨上皇不豫、師を召して内に入れ、法要を説かしめ、未だ幾ならずして崩す。明年冬、龜山天皇、師を請じて大戒を受く。

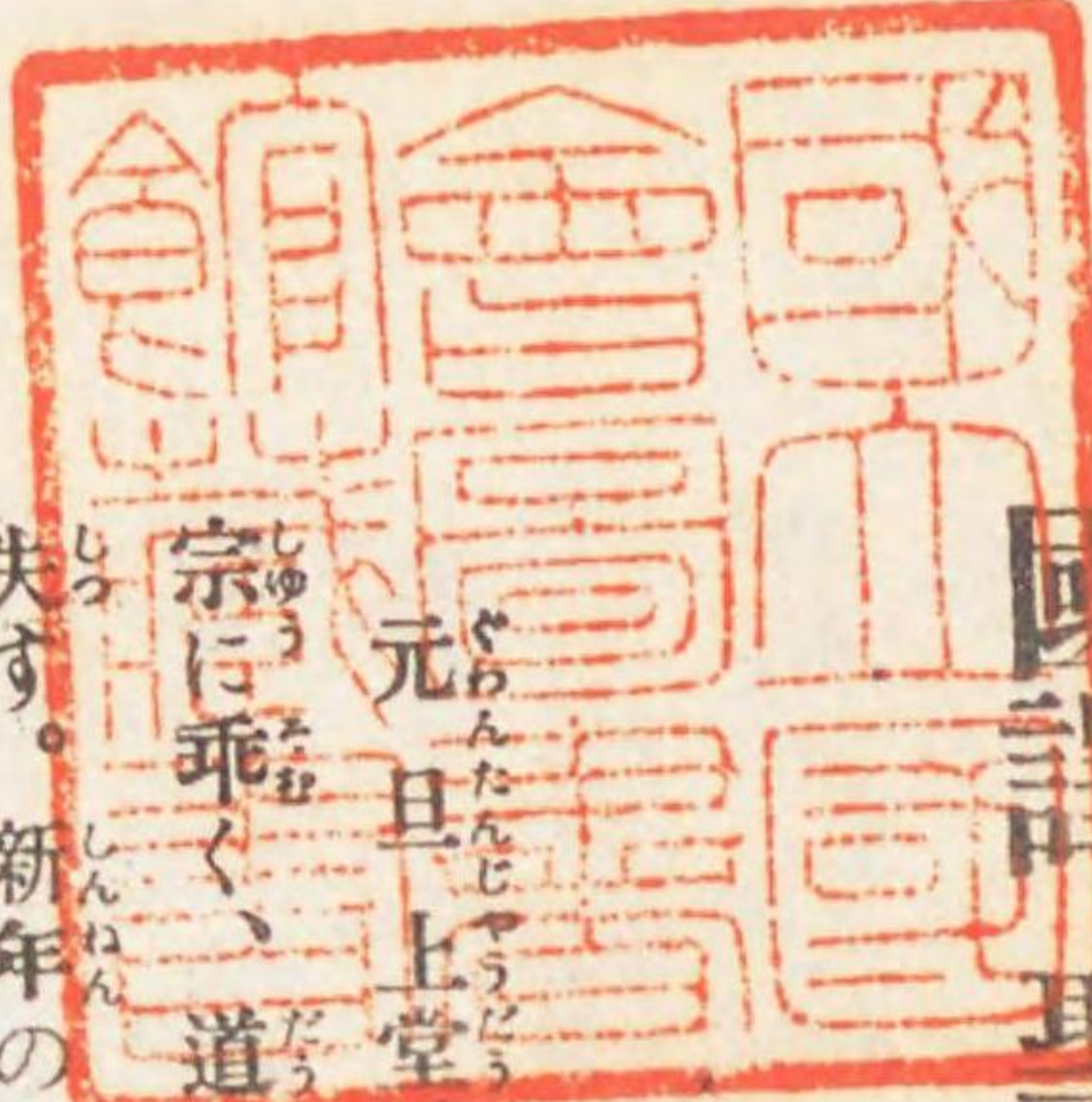
弘安三年二月初、師微疾を示し、飲食美からず、然れども行道怠ることなし。六月一日、東福寺規範十條を製し、尋で常樂庵(東福寺内にあり)に移る。丞相藤原實經、山に入りて疾を問ふ、又文應上皇、官醫を遣はして病を肺せしむ。六日、師自ら三教典籍目錄を造りて普門寺の書庫に置く。秋に至りて病稍々癒ゆ。十月朔日、鼓を鳴らして衆を庵所に集め、祝聖罷んで説法し、衆に謂つて曰く、「卻後十五日當に本寺に還りて、寶華王座に末後の句を唱へて、大涅槃に入るべし」と。十四日の晩、侍僧に命じて昇いて寺に歸らしむ。十五日晨、兩班の諸耆舊、疾を問ふ。師語りて曰く、「今朝、登座説法せん。汝等をして末後奇特の事あることを信ぜしめんと欲す」と。十六日、行者に命じて曰く、「晩間、客あり、房宇を灑掃せよ」と。黄昏に及んで果して無傳(名は聖禪、入宋より歸りて後、越後の花報寺に住す)、越

後より来る。師、安陀會を披して坐し、無傳、香を焼いて作禮す。師曰く、「最後の相見、須らく九拜すべし」と。傳、將に退かんとす、師之を留めて、理致、機關、向上の三種を示す。夜已に三更を過ぐる頃、使を一條實經に馳せて辭を告げ、乃ち椅に登りて端坐す。諸徒、遺物を乞ふ、便ち書して曰く、「利生方便、七十九年。欲知三端的、佛祖不傳。弘安三年十月十七日、東福老珍重」と。筆を投じて化す。龜を留むること三日、身體生けるが如し。遂に全身を常樂庵に瘞む。緇素哀慟し、聲、山谷を動かし、壙に入るの後、竹林自ら白に變じ、桐樹自ら枯る。師、門弟子を度すること無慮千萬人、其の法を嗣ぐものは東山湛照、無關普門、白雲慧曉、山庵慧雲、其他三十餘人あり。正和元年、勅して聖一國師と諡す。本朝國師號の始めなり。昭和五年、其の六百五十年の遠忌に際し、特に勅して神光の諡號を加賜せらる。

國譯聖一國師住東福禪寺語錄序

佛は唯説く而已、結集せず、結集は諸子の事なり。我が慧日祖の説法、海藏に盈つ可し焉。諸子の多きこと、宛も耆岷の如し。然も皆早く化を四方に敷いて、結集に違あらず。忠首坐と云ふ者有り、子に謂つて曰く、「吾祖の貫花、綴緝する者無し、歳已に半百なり、更に數年を加へば、恐らくは微言の絶えん乎。師、意有らん哉。予曰く、「兄と予とは共に貽厥なり、我、結集と言ふ者は諸子の事なり、予豈に敢てせん乎。」曰く、「結集する者は誰ぞ。」曰く、「妙徳と大龜と及び慶喜なり。」曰く、「慶喜は阿誰にか嗣ぐ。」曰く、「大龜に嗣ぐ。」曰く、「寧ろ孫謀に非ず乎。」曰く、「似たる事は則ち似たり、是なる事は則ち未だ是ならざるなり。」曰く、「若し似たる者有らば、亦庶幾からん。」予、得て拒まず、纂集し竟りて、告げて曰く、「今の得る所の者は、蠶簡殘編なり、豈に能く共に收めて並べ畜へん乎。所謂、仙官、六丁に勅して、雷電して下り取り將る、人間に流落する者は、太山の一毫芒なる耳、方に今天下、惠日の手澤を緇衣十襲する者多し、兄は遍參の人なり、或は江、或は湖、剽聞切問して此の冊に採へよ。元徳三年二月初五日、三聖孽孫師鍊敬序。

國譯聖一國師住東福禪寺語錄



元且上堂、禪は意に非ず、意を立すれば
宗に乖く、道は功勳を絶す、功を建つれば旨を
失す。新年の消息、鐵塵を動せず、節に應じて
祐を納る、慶宜しからずと云ふことなし。若し
佛法の商量を作さば、鐘を喚んで響と作す。
若し世諦流布と作さば平地に喫交す。大衆還つ
て委悉するや。孟春猶ほ寒し、堂に歸つて茶を
喫せよ。

① 無準忌拈香、我れ昔行脚し、海に航し山
に梯して拖泥帶水、南方を徧歴す。當時五髻峯
頭、覺えず這の老師に撞著して儂の毒手に遭ふ、

國譯聖一國師住東福禪寺語錄

三聖嗣孫

師鍊

校纂

○本書は師鍊の序、東福寺集靈
藤外二師の後跋あり、元和六
年(二二八〇)臘月上梓す、但
し東福寺藏版なり、上堂、拈
香、小參、結夏、示衆、偈頌
自贊より成る、一卷の紙數纒
廿一枚の小冊子なるも、滅
後逸散の聲あり、本朝禪宗渡
來の初期なるを以て、最も古
き語錄なり。

○國師。高麗の國にては國尊と
稱せしことあり、君臣共に歸
依し、以て此の號を賜ふ、本
朝にては夢窓國師生前に賜
ひ、滅後には辨圓に賜ふ、即
ち國師の最初なり。
○東福寺。慧日山と號し、京都
伏見にあり、建長七年(一九一
五)九條道家公の創立にか
り、舊天台宗なりしを、聖一
國師に歸依し改宗せらる、臨
濟京五山の中に數へらる、紅

回避する處なし。眼上に眉を安ず、生涯を蕩盡して直に如今に至つて言の説く可きなく、理の伸ぶべきなし。而今衆に對して底を盡して掲翻す、香を擧して云く、「劫石は消する日あるも、此の恨幾時か休せん。」

浴佛上堂、悉達太子、法身示現して、今日淨飯王宮に誕生す、九龍水を吐て金甌を沐浴し、地に金蓮を涌して其の足を捧げ承く、普天匝地自ら矜伐し、端なく口を開いて獨り尊と稱す、大人の相莊嚴を具足して、微妙の大佛事を施作す、且つ作廢生か是れ大佛事、良久して曰く、「下座普く露柱燈籠を請じて、同じく如來の香水海に入れ、這の老子を助けて大法輪を轉せん。」

結夏小參、靈山の密付、少林の單傳、機

相投じ、言言相契ふ、大圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心安居、平等性智、九旬禁足、三月護生、蠟人の氷を守り、鵝護の雪を憐む。大精進を起し大勇猛を發し、智慧の劍を乗りて一往に直前し、有學無學、一切皆殺す。一切を殺し已つて、山を見れば是れ山、水を見れば是れ水、全體恁麼にし來り、全體恁麼にし去らば、摠に許多路布の葛藤なし。正恁麼の時呼んで衲僧本分の事と作し得んや。萬仞懸崖須らく手を撒すべし、大千沙界に全身を現す。

復た擧す、徳山、衆に示して曰く、「老漢が見處、佛も也た無く祖も也た無し、達磨大師は是れ老臊胡、十地の菩薩は是れ擔屎の漢、等妙の二覺は是れ破戒の凡夫、菩提涅槃は是れ紫驢概、十二分教は是れ鬼神の簿、瘡疣

本の名所通天橋は寺中にあり。

- ① 語錄。禪宗に傳はる語録は、生前滅後に拘らず、師の常談を以て宗旨を直説せらるゝを侍者や小師共が書寫したるまゝを筆録せしものなり、故に華藻を離る、禪門寶訓の序の注に「密に眞機を顯はすを語と云ひ、總て衆事を集むるを録と云ふ」とあり。
- ② 三聖。寺號にして、東福寺の北側にあり。
- ③ 師鍊。聖一國師の上足にして、東山湛照禪師の法嗣にして、虎關と稱せしは師鍊のことなり。
- ④ 校纂。詳校篇に「校は點檢なり、纂は廣句に集なり」とあり。
- ⑤ 商量。他と應酬對機すること。
- ⑥ 無準。諱は師範、破庵祖先にふ、曰く、聖道を修學するも尙ほ斷すべき煩惱の殘餘を有するの義なり。
- ⑦ 無學。梵に羅漢と云ふ、見思の惑を斷盡して、修行位第四果に到りし人を云ふ。
- ⑧ 徳山。宣鑿と號し、又執金剛と字す、律藏を精究し、性相の諸經に通達す、天皇道悟の資、龍潭和尚に嗣法す、壽八十六にして遷化せらる、教して見性大師と證す。
- ⑨ 示衆。大衆に教誡を示訓することなり、六祖壇經が古き典據なり。
- ⑩ 老臊胡。唐宋時代の俗語にて、「たびすのおやち」と云ふ程の義、字彙に「胡人は血肉を好む、故に身に豚犬の臭を帯ぶ」と見えたり。
- ⑪ 十地の菩薩。歡喜地、離苦地、發光地、焰慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧

法を嗣ぐ、聖一國師の師なり、理宗帝より佛覺禪師の號を賜ふ。

⑫ 浴佛。灌佛に同じ、龔阿利頂經に曰く、「四月八日は是れ佛生日なり、人民佛を念じ佛の形像を浴す、即ち釋尊降誕會の式にして又灌沐とも云ふ、浴佛に用ふる香湯は、沈香(一兩)、白檀(一兩)、熏陸(半兩)、苧藨(半兩)、鬱金(一錢三分)、丁香(半兩)、甘松(半兩)、此の七種を淨布裏に盛りて罇内に投じ、淨水三揆を用て煎じて二揆に減じ、罇に移し、之を冷し、然る後用ふ云云」とあり。

⑬ 結夏。一夏九十日の間、護生禁足して純一無雜に修行する掟あり、一名雨安居と云ふ。

⑭ 有學。四果の聖者の中、阿羅漢果の人を除くの外、即ち預流果、一來果、不還の人を云

ふ、曰く、聖道を修學するも尙ほ斷すべき煩惱の殘餘を有するの義なり。

⑦ 無學。梵に羅漢と云ふ、見思の惑を斷盡して、修行位第四果に到りし人を云ふ。

⑧ 徳山。宣鑿と號し、又執金剛と字す、律藏を精究し、性相の諸經に通達す、天皇道悟の資、龍潭和尚に嗣法す、壽八十六にして遷化せらる、教して見性大師と證す。

⑨ 示衆。大衆に教誡を示訓することなり、六祖壇經が古き典據なり。

⑩ 老臊胡。唐宋時代の俗語にて、「たびすのおやち」と云ふ程の義、字彙に「胡人は血肉を好む、故に身に豚犬の臭を帯ぶ」と見えたり。

⑪ 十地の菩薩。歡喜地、離苦地、發光地、焰慧地、難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧

地、法雲地の十地なり、十地とは菩薩所證の地位なり、一切の佛法之に依つて發生す、然して地位に淺深あるが故に、始め歡喜地より法雲地に終る、分ちて十と爲す、楞嚴經に出づ。

⑫ 等覺。天台所立の修行位、五十二階中第五十一位にして、菩薩の極意とす。

⑬ 妙覺。等覺の上位にありて、極果極聖の位にして、無明を破し盡し、佛果を證得したる無上佛智なり。

⑭ 十二分教。舊譯には十二部經とあり、佛說法の十二様なるを云ふ、即ち長行説、重頌説、授記説、孤起説、無問自説、因緣説、譬喻説、本事説、本生説、方廣説、未曾有説、論議説。

⑮ 四果。須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果。

を拭ふの紙、^①四果^②三賢初心十地は是れ古塚を守るの鬼、自救不了。拈じて云く、「徳山逸群の用を得て古今を明辨す、綱宗を提振し、後進を誘掖す。」拄杖を拈じて曰く、「然も是の如くなりと雖も、老僧が拄杖子に鼻孔を穿却せられて、直に得たり氣を出す處なきことを。衆中氣を出す底あること莫しや。」卓一下して曰く、「具眼の者は辨取せよ。」

結夏上堂、高く十地を超えて、僧祇を歴す、物我一如、身心平等、萬法と侶たらず、千聖と途を同じうせず。佛祖の大機を全提し、人天の正眼を獨露す、直に孤峰頂上に居して禁足し、卻つて十字街頭に向つて手を垂る。殺活自在、檢縦縦横、且く道へ還つて聖制に應ずる分ありや也た無しや。良久して曰く、「日用回互なく當機卷舒あり。」

解夏^①小參、大機大用自在縦横、千聖の機關を帯びず、諸祖の窠窟に墮せず、淨裸裸滲漏を絶し、赤洒洒覆藏なし、本地の風光、本來の面目、言發聲に非ず、言に和して擊碎す、色前物にあらず、物と俱に融す、布袋口を打開して、鐵門關を擊碎し、吹毛の劍を掲げ、南來北往、田地穩密、步步踏實、且く道へ、如何なるか是れ實地を踏む底の一句、^②懶人の水を

①三賢。十住、十行、十回向、位の修行人を謂ふ、此の諸位の菩薩を賢と稱するは別教につき論するなり。

②阿僧祇と云ふ、今無數と譯す、無限の長時間を呼び表す語なり、智度論に阿、秦には無と云ひ、僧祇は秦には數と云ふ、問ふ、「幾時を阿僧祇と名くる、」答ふ、「天人中能く算數を知る者、數を極めて知ること能はざる、是を一阿僧祇と云ふ。」

③獨露。豁開の謂。

④孤峰頂上。佛祖も窺ふこと能はざる底の所。

⑤解夏。解夏、又は解制と云ふ、夏安居の制を解きて出遊期に入る、之れ七月十五日後なり、敕修清規に曰く、「解夏に曰く、七月十四日の晩念誦、湯を煎じ、來日陸堂、人事巡察、煎點正に結夏の儀に同じ」と

⑥白槌。乘白の義なり、白は事を告ぐるなり、謹んで大衆に白すと云ふ、如し、即ち世尊の律義、佛事を辨せんとするとき、必ず先づ乘白す、衆を穩むるの法となす。

⑦老凍膿。膿は腫血なり、虛堂錄鈔に、「蓋し老人の面に淨垢あり、而して凍膿の色に似たり。」

⑧圓陀陀地。自在圓轉の義、今は軌制に拘はらむと云ふ。

⑨曲彎彎地。弓を引いて曲ぐるが如きを云ふ、灣と類似の謂にして灣は水曲なり。

⑩黑漆漆地。黒うして正邪を辨じ難し。

⑪雲門初め睦州に參じ、門扉を閉却せられて脚を折り、省悟して後、雪峰に參じて嗣法す、雲門宗を唱ふ。惜哉、日本に傳らず、而れども大師の語録、今に傳はる、師は特に言句三昧を得て、妙唱絶なり。

喜ばず、何ぞ^①鵝護の雪を憐れまん。

復た擧す、文殊三處に夏を度る、^②自恣の日に至りて迦葉^③白槌して擯出せんと欲す、纜に槌を擧ぐるに、便ち百千の文珠を見る、世尊迦葉に問ふ、汝那箇の文殊を擯せんと欲す、迦葉茫然たり、拈じて曰く、「三箇の老凍膿、一人は圓陀陀地、一人は曲彎彎地、一人は黑漆漆地、子細に點檢し將ち來らば、一得一失。」

解夏上堂、擧す、僧雲門に問ふ、「初秋夏末、前程若し人ありて問はば、未審し佗に對して什麼とか道はん。」門云く、「大衆退後。」僧云く、「過什麼の處にか在る。」門云く、「我れに九十日の飯錢を還し來れ」と。拈じて曰く、「這の僧、劔及上の事を用ふ。雲門は殺活の手段を具す、諸人還つて會すや。」良久して曰く、「如かじ無事にし

出づ。^①小參。祖底事苑に、「非時の說法之を小參と云ふ」と出づ、舊說に曰く、小參不時に之を講す、鼓を鳴らすこと一通、其の規、大參より約す、故に小參と云ふ、大參は上堂なり、參は交參の義、勸修清規に曰く、「凡そ衆を集め開示する皆之を參と云ふ。」

②鵝護の雪。法苑珠林に昔日一の比丘あり鵝の命を護して身を惜ます我をして此の非法の事を造さしむと。雪は戒の潔白に喩ふる也。

③自恣の日。梵には鉢利婆刺拳(ハリメラド)と譯す、隨意の謂なり、結夏了りたる日、衆僧各自が其の罪過を説き、惡を改め善事を勤むるの日なり。

て好からんには。便ち下座。

開爐上堂、今朝時節に應じて東福園爐を開く、三世の諸佛、四聖六凡、情と無情と盡く火燭裏に向つて、共に大法輪を轉ず、耳ある者は聞き、眼ある者は見る、灰頭土面、衲被蒙頭、眉毛を照顧して炭裏に歸して坐す、且く道へ、人の爲めにする處ありや也た無しや、若し又會せずんば丹霞和尚に問取せよ。

冬夜 小參、朕兆未だ分れず、虚空背面なし、一氣已に動いて萬象自ら輝燦たり、晷運推移り、日南長至、本分の田地に向つて向上の機を撥轉すれば、一段の家風、古今を輝騰す、釋迦彌勒退身するに路なく、臨濟德山目瞪し口呿す。千里萬里片雲なし、擬議不來ならば、三十棒、正恁麼の時、諸人還つて委悉するや、群陰消刹し盡す、來日は書雲。

復た擧す、僧、疎山に問ふ、「如何なるか是れ冬來の事。」山云く、「京師に大黃を出す。」拈じて曰く、「疎山明かに信旗を立て、密に陣敵を排す、鋒銚を犯さず收放自在、然も是の如くなり」と雖も、東福に若し冬來の事を問ふこと有らば、劈脊に便ち棒せん、何が故ぞ。殺人刀活人劍、具眼底は辨取せよ。

冬至上堂、寒暑變遷して一陽來復す、百昌萌動して劫外花を開く、拄杖を豎起して曰く、「老僧が拄杖手長きこと多少ぞ。」良久して曰く、「一冬二冬叉手當胸。」

臘八上堂、黃面老子、正覺山前、謾に明星を視て眼睛を打失す、古より今に至つて虚を承け響を接し、眼裏に沙を撒す、漏逗少からず、畢竟作麼生、各々請ふ殿に上りて炷香禮拜せよ、宜しく眼を著し看るべし、黃面老子面皮厚きこと多少ぞ、下座。

除夜小參、一機未だ露れず、盧元是れ凡夫、萬法摧然たり、普賢其の境界を得、徧界會て隱さず、故を改め新を換ふ、東村王老竹を爆して錢を焼く、神を驅り鬼を逐ふ、千聖も手を拱し、天魔も蹤を潛む、全體恁麼にし來り、全體恁麼にし去る、步步實地を踏み、句句根源を透り、箇の安排を通じ、箇の時節に應ず、幕に拄杖を拈じ卓一下して曰く、「還つて委悉すや、一聲雷發動すれば、蟄戸一時に開く。」

開爐。十月一日に爐開きの式を、禪門には行ふときに上堂す、故に各あり。

四聖。聲聞、緣覺、菩薩、佛。六凡。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

丹霞。木佛を燒く話にて名あり、芙蓉楷祖に嗣法す、曹洞門下の傑出なり。

冬夜。冬至の前夜也、此の夜慈明和尚は引錐せし因縁あり、幻住清規に「冬夜には土地堂念誦を爲す云々」と出づ。

日南長至。書言故事中に曰く「秋分より日南陸に行き、冬至に至りて日南に極まる。」

臨濟。諱は義支と云ふ、黃檗の法を嗣ぐ、臨濟宗の祖なり、機鋒嚴俊、智見卓越、恰も將軍の機あり、臨濟錄廣く世に提唱せらる、七代目にして楊岐出で、的々傳來して妙心の開山を出し、後又白隱を出して今日の隆盛を見、同じく楊岐と兄弟なりし黃龍は、的傳して建仁榮西に至り、天台に其の法を傳ふ。

三十棒。古來より道ひ得るも三十棒とあり、棒にて亂打されるの義なり、此の棒に罰棒と勵棒とあり。

疎山。撫州の人、匡仁禪師と云ふ、法を青原下五世洞山良价禪師に嗣ぐ、五燈會元十三卷に出づ。

殺人刀活人劍。無門關州勸庵主の話の無門和尚頌に曰く、「眼は流星、機は掣電、殺人刀、活人劍」とあり。

臘八。十二月八日のこと、佛の目大聖世尊は一見明星して大悟せられ、有情非情同時成道と一人獅子吼せらる、故に今日に至る、禪門は世尊の菩提樹下の踰躡を慕ひて一七日

月の火山を焼く。」拈じて曰く、「香林闍提を撥轉し、路頭を踏翻す、這の僧古に耀き今に騰る、歸家穩坐、且く道へ、如何か是れ歸家の一句、觀面若し宗正の眼なくんば、頭を回らして只だ見る翠山巖。」

上堂、十方佛土の中唯だ一乘の法のみあり、更に喚んで禪道佛法と作し得るや。若し作し得と言はゞ一雙の眼睛を打失す、若し作し得ずと言はば、千古の下の笑端と作らん、本色行脚の人は須らく行脚の眼を具して始めて得べし、且く道へ如何なるか是れ行脚の眼、行いては到る水の窮る處、坐して看る雲の起る時。

上堂、棒頭に取證するも、壘に落ち、坑に墮つ。喝下に承當するも虚を承け響を接す、向上向下轉た更に瞞預、妙と説き玄と説く和泥合水、正恁麼の時、行いて塵を動さず、語りて唇を動さず、直に須らく大休大歇大安樂の場に到るべし、若し也た會せずんば、當來の彌勒慈尊に問取せよ。

上堂、萬機不到、千聖不携、要津を把斷して凡聖を通せず、然も是の如くなりとも雖も、免れず一線道を放ち、第二義門に向つて無言の處に言を演べ、無相の中に相を現す、始終一貫前後差なし、恁麼の告報、諸人還つ

の接心を修し、以て法乳の慈恩に報ゆるものとす。

① 作麼生。恁麼生、做麼生、似麼生、とも書く、支那の俗語にして眞の音は「つあ(作)、も(麼)、すめん(生)を發音の訛りにてそもさんと讀む、さーどうじや直に言へとの詰問詞なり。

② 普賢。圓覺の疏に、圭峰曰く、體性周遍を普と云ひ、縁に隨つて能く成するを賢と云ふ。

③ 香林。青原下七世雲門宗の祖雲門の法嗣なり。

④ 十方佛土中唯有一乘法。法華經方便品に出づ、一乘法の下に無二亦無三とあり、要は方便説を採らざるの謂。

⑤ 壘。壘と同じ、壘は城を遠るの水。

⑥ 坑。坑なり、又壘なり。

⑦ 喝。此の字は叱咤の意にも用ひられ、又は言語思量の及ばざる事を示す爲に用ひらるる

て甘ふや、三生六十劫。

上堂、本色の衲僧家は須らく行脚の眼を具すべし。若し未だ行脚の眼を具せずんば、二に落ち三に落ち了れり。且く道へ、作麼生か是れ行脚の眼。良久して曰く、「朝には東南を看、暮には西北を觀る。」

上堂、擧す古徳の云く、「一丈を説得せんよ、如かず一尺を行取せんには、一尺を説得せんより、如かず一寸を行取せんには。然も是の如くなりとも雖も東福は然らず、説も又説き得ず、行も又行じ得ず、何が故ぞ、意を得言を忘るも、猶ほ家醜を揚ぐ、寧ろ舌を截る可くとも、國諱を犯さじ。

上堂、靈山獨り、飲光に付し、少室可祖に單傳し、黃梅半夜に衣を授く、臨濟行に臨ん

る國諱を犯さず云々。」

⑧ 飲光。西天第一祖摩訶迦葉尊者を云ふ、姓は波羅門、梵には迦葉波、此處に飲光勝尊と云ふ、生るるとき、金光室に充つ、光り盡く尊者の口に入る、因りて飲光と名く世尊より正法眼藏を傳授せられ、弟子阿難に法を傳へて慈氏の下生を待つと云ひて鷄足山に入る。

⑨ 黃梅半夜。震旦五祖(達磨より五傳の祖)大滿弘忍禪師、黃梅に住せらる、故に名あり、盧行者に夜半衣鉢を傳へたる因縁あり。

⑩ 臨濟行に臨んで付屬す。臨濟録に曰く、「師遷化に臨む時、坐に據つて云く、吾が滅後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。三聖出でて曰く、争てか敢て和尚の正法眼藏を滅却せん。師云く、已後に人有り、汝に問はん、他に向

で付屬す、東福門下密傳付屬底の事なし、今日普く諸人の爲めに這箇の事を直示す、且く道へ古人と優劣ありや、各々宜しく眼を着けて著るべし。

上堂、靈鷲峰前白雲靄靄、少室巖畔白雪皚皚、慕に拄杖を拈じ卓一下して云く、「瞿曇說不盡の處、祖師提不起底、山僧衆に對して八字に打開し了れり。諸人還つて見るや、」又卓一下して下座。

上堂、擧す 乾峰、衆に示して曰く、「一を擧して二を擧することを得ざれ、一著を放過すれば第二に落在す。」雲門、衆に示して曰く、「昨日人あり天台より來りて、卻つて徑山に往き去る、^①峰維那を喚んで云く、「來日普請することを得ざれ」と。拈じて曰く、「乾峰無陰陽の地に箇の消息を露はす、雲門袖裏に金鎚を藏す、高く祖印を持して頭正しく尾正し、始末相符す、敢て大衆に問ふ、這般底ありや、若し無くんば歸堂喫茶せよ。」

上堂、擧す、僧、^②九峰に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」峰云く、「東生の明月、西落の金烏。」僧云く、「師に非ざれば委せず。」峰云く、「理當りて即ち行せん。」僧、禮拜す、峰便ち打す。僧云く、「仁義道中禮拜何の咎かあらん、」峰曰く、「來處明かならざれば須らく嚴令を行すべし、」拈じて曰く、

「九峰的を以て機を奪ふ、嚴令當に行すべし、這の僧劍刃上に向つて能く曲直を辨す、互に肝膽を傾けて各々毫芒を出す、古に騰り今出で、聲に騎り色を蓋ふ、大衆還つて委悉すや、試に請ふ辨別して看よ。」

上堂、第一句下に薦得すれば、佛祖も命を乞ふ、第二句下に薦得すれば人天膽落つ、第三句下に薦得すれば虎口に身を横ふ、毗盧頂を坐斷して釋迦文に稟けず、聲色を帯びず、見聞に落ちず、東福敢て囊藏被蓋せず、八字に打開し了れり、遂に^③拂子を擧して云く、「還つて見るや、」擲下して曰く、「分明に記取せよ。」

上堂、絃を動すれば曲を別ち、葉落ちて秋を知る、向上の鉗鎚を提げ、作家の爐鑪を開く、徳山の棒、手を下すに處なく、臨濟の喝口を啓くことを得ず、正恁麼の時、如何か信を通じ去らん。良久して云く、^④「吃噉の舌頭三千里、壺中の日月自ら分明。」

上堂、月一を生ず、乾坤廓落として大方外なし、月二を生ず、^⑤師子奮迅、^⑥象王回旋す、月三を生ず、蟪蛄眼裏大鵬身を翻す、所以に道ふ、向上の一路千聖不傳、學者形を勞すること猿の影を捉ふるが如し、拄杖を拈

つて什麼とか道はん。三聖便ち喝す、師云く、誰か知る吾が正法眼藏道の瞎驢邊に向つて滅却することを。言ひ訖つて端然として示寂す。
^①乾峰。洞山禪師の法嗣。
^②維那。次第と譯し、悅衆と譯す、次第とは次第秩序あるなり、悅衆とは事を辨じ衆を悦ばしむるなり、寄歸傳に曰く、「梵には羯摩陀那、唐には綱維と云ふ、而も禪規には維那と云ふは悅衆と云ふは義に於て未だ盡きず」とあり。

^③九峰。瑞州の人、普滿禪師と云ふ、青原下五世、洞山良价禪師に嗣ぐ、五燈會元十三卷に出づ。
^④禮拜。梵語には那膜悉羯羅、此に禮拜、又は和南と譯す、是に三等あり、一に頭至地、二に屈膝頭不至地、三に口禮となり。

^⑤師子奮迅。釋尊在世に諸の比丘、蚊虫の爲めに食はれて身體痒を發す、故に衆寶を柄となし犁牛の尾を拂となす云々、毘奈耶雜事に記す。
^⑥作家。「さつけ」と讀む、作者の家の意にして、禪門にては斯道に老熟せし人を呼ぶ、臨濟錄に作家戰將とあり。

^⑦吃噉。祖庭事苑に曰く、「言只繳繳として好戻するなり、其の舌を繳ふとは猶ほ舌頭を縮却するが爲めなり」と在り。
^⑧師子奮迅。大般若經五十二卷に曰く、「獅子奮迅三昧とは諸の垢穢に於て縱に住し、又棄捨すること師子王の自在に奮迅なるが如し。」

^⑨象王回旋。華嚴經四十六卷に曰く、「爾のとき文殊師利、顯現の菩薩の爲に象王の廻るが如く、諸の比丘を顯視す。」
^⑩漏逗。檢束なき場合と、物の

じ卓一下して云く、「意氣ある時意氣を添ふ、風流ならざる處也た風流。」

上堂、妙性圓明にして諸の名相を離る、本來世界衆生あることなし、衆生妄に因つて生あり、生に因つて滅あり、生滅を妄と名く、滅妄を眞と名く、喝一喝して曰く、「黃面老漢、當時若し遮の一喝を下し得ば、許多の漏逗を免れ得ん、何が故ぞ、既に是れ圓明にして相を離る、妄何れより起り眞何れよりか生せん、若し恁麼に見得徹し去らば、山河大地、萬象森羅、四聖六凡、情と無情と一捏を消せず、敢て大衆に問ふ、即今是れ什麼の時節ぞ。」拂子を擧して云く、「盧舍の本身全體現す、當機直下に纖毫なし。」

上堂、擧す 金峰、衆に示して曰く、「老僧二十年前老婆婆心あり、二十年後老婆婆心なし。」時に僧あり、出でて問ふ、「如何なるか是れ二十年前老婆婆心ある。」峰云く、「凡を問へば凡を答へ、聖を問へば聖を答ふ。」僧云く、「如何なるか是れ二十年後老婆婆心なき。」峰云く、「凡を問ふに凡を答へず、聖を問ふに聖を答へず。」拈じて曰く、「金峰大機を顯し大用を發す、這の僧、玉轉じ珠回つて正眼を流通す、然も是の如くなり」と雖も、東福は然らず、當時恁麼に問ふものあれば、劈脊に一棒を與へん、何が故ぞ、達者先づ知り、賢明早く悟る、久立 珍重。」

111
取り亂れたる場合とに用ふ。
① 金峰。撫州の金峰に居す、名を玄明、號を從志と云ふ、洞山の嗣、曹山本寂禪師の法嗣なり。
② 東福。聖一國師自らを呼ぶに東福寺に住せしに因る、例せば希運禪師は黃檗山に住す、故に黃檗と呼ぶが如し、本朝にあつては山號を喚はすして多くは寺號を呼ぶ慣例なり。
③ 珍重。猶ほ能く保重を加へよと云ふが如し、或は請ふ自愛を加へよ、能く消息せよ保惜すべしと同じ語ひなり。

上堂、是れ目前の法にあらず、亦心外の機に非ず、直下に承當を絶し

當陽向背なし、祖印を提持し宗 乘を荷負す、觀面相呈して更に餘事なし、正恁麼の時作麼生、向上の一竅を撥開して、千聖齊しく下風に立つ。

上堂、孤峰頂上雲に眠り、十字街頭に手を垂る、全機大用觸處見成、溢目の清光今古を貫通す、一塵法界を含み、一念十方に遍し、淨裸裸遺すことなく、赤洒洒全く露はる、出沒自在纖塵を隔てず、然も是の如くなりと雖も、更に須らく 金剛王寶劍を揮つて、直に根源を截つて當陽に顯露すべし、不らざれば也た 周由、正恁麼の時、一物に依倚せず、一句如何か道はん、萬象の中獨露身、百草頭邊著著親し。

① 當陽。即今を見よの義なり。
② 金剛王寶劍。臨濟錄に曰く、「或るときの一喝は金剛王寶劍の如く云々」とあり。
③ 直截根源。證道歌に曰く、「直に根源を截るは佛印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我れ能くせず云々」と出づ。
④ 不者。「しからざれば」と讀む。
⑤ 周由。週遮の義、今は遠くして遠しの義。

法語

空明 上人に示す

祖師の直示、殊方便なし、諸縁を放下し萬事を休息して、晝三夜三鼻端を守看し、纔に境界の差別に渉るの時、只だ話頭を擧せよ、佛法の想を作さず、破除の想を作さず、心を存して解の等しきことを用ひず、情疑殆を生ずることを用ひざれ、理路なく滋味なく鐵餒頭の如く、單刀直入、異想に渉らず、悠久歲月、自然に恰も睡夢の惺むるが如く、蓮華の開くが如くならん、正當恁麼の時、從前の話頭、只だ是れ門を扣く瓦子、那邊に抛下して卻つて祖佛の機關語句を看よ、皆是れ小兒の啼を止むるのみ、向上の一路、更に一線を通せず、凡聖の要津を截斷す、學者形を勞することは猿の月を捉ふるが如し、謂つ可し、自身を忘卻して外に向つて馳求すと、何の日か求め得べけんや、蒲團上に安坐して晝夜成佛を求め、生死を厭卻し菩提を證せんと欲す、皆月を捉ふる猿の如し、若し眞實相爲にする

①法語。前輩有道の士、佛祖不傳の妙を提持し、學者を敬語するなり」と疑絶録に出づ。
②上人。摩訶般若經に「佛言はく、若し菩薩一心の阿耨菩提を行ひ、心散亂せず、是を上人と名く。」然れば上人とは内に智ありて外に勝行あり、人の上に在るが故に云ふ。
③話頭。古則公案のこと、太明錄七に曰く「話頭之れ道に非ず、門を敲くの瓦子のみ。」
④小兒止啼。涅槃經第二十嬰兒品に曰く「彼の嬰兒の啼哭するときは如き、父母即ち湯樹の黄葉を以て之に語つて曰く、啼くこと勿れ、啼くこと

處を欲せば、只だ是れ無心是れ道なり、亦木石の如きに非ず、靈靈として常に知り、了了として分明なり、視聽尋常にして更に委曲なし、空明上座晝夜 面壁、語を求めて 警策とせんとなす、家風を惜まず、筆に信せて之を書す。文永四年月日。

智禪上人に示す

祖師門下、直指人心、言說方便、特地に乖張す、見聞に墮せず、聲色に従はず、百草頭上に縱横、萬象堆裏に坐臥す、出息塵縁を假らず、入息陰界に繋かれず、盡大地解脱門、搥利海眞實法なり、通方の作者は擧著すれば歸を知る、初心晩學は云何が湊泊せん、若し未だ薦得せざるに、且第二義門に向つて一線道を放ち、無言の處言を演べ、無相の中に相を現せん、如何なるか是れ無言の處に言を演ぶ、磨盤空裏に走る、如何なるか是れ無相の中に相を現す、西河に師子を弄す、日用縁に差別の境界に應ずる時、破除の想を用ひず、玄妙の會を作さざれ、理路なく滋味なく、晝夜寢食を忘れて此の話を看よ、若し亦未だ薦得せずんば、更に第三頭を説かん、心と説き性と説き、玄と説き妙と説く、一塵法界を含み、一念十方

國譯聖一國師住東福禪寺語錄

勿れ、我れ汝に金を與へん、嬰兒見了りて眞金の想を生ぜん、便ち止んで啼かず云々。」
⑤面壁。普勸坐禪儀に曰く「少林の心印を傳ふる面壁九年」とあり。晉祖和尚は凡そ僧の來るを見る、即ち面壁すとあり、現今にても曹洞門下曉天の座禪には面壁す。
⑥警策。大瀉山は警策一篇を著はして學者を策進せしむ、今日禪門に用ふる木製の警策は、學者の睡覺を打し、或は怠墮を戒むるの法器なり。
⑦出息塵縁を假らず云々。西天二十七祖般若多羅尊者は、達磨大師の師なり、一日王室の供養に招かれ、讀經致さずして曰く、出息塵縁に渉らず、入息陰界に居せず、常に如是經を轉入す云々と出づ。
⑧西河の師子。會元十一に「汾陽照禪師上堂曰く、汾陽門

に遍しへ、故に古者の道く、「無邊の刹境、自佗毫端を隔てず、十世古今始終當念を離れず、禪上人紙を袖にして語を求む、筆に信せて老草す、一見の後丙丁に付せよ。

智目禪人に示す

佛祖以來、大凡人を接するに、三種の機あり、若し是れ第一機は更に方便なく、義理なく、話會し難し、若し此に於て直下に承當せば、庭前の柏樹子、麻三斤、一口吸盡西江水と更に差別なけん、若し是れ第二機は、只だ是れ問端を發起し、手に隨つて點破す、則ち臨濟の黃檗に問うて六十の烏藤を喫するが如し、若し是れ第三は、泥に入り水に入り、箇の注脚を下して人の眼目を瞎して胡種族を滅す、只だ是れ真正の衲子は、直に須らく撥卻して、活句に參じて死句に參せざるべし、目上人、人と爲り純實なり、若し能く活句上に薦得せば、祖佛の與に師と爲るに堪へん、老僧家風を惜まず、三種の機を示すと云ふ。

如上座に示す

佛佛手を授く唯だ佗にあらず、只だ是れ自己恩力の處、方木圓孔に投じ、土塊泥裏に洗ふ、祖祖相傳ふ、空谷聲に答ふ、南を呼んで北と作す、横三豎四、坐一走七、未だ語訛を免れず、若し又一氣未だ兆さざる以前、杳冥恍惚たるに向つて信得及するも、尙ほ第二頭にあり、何に況んや更に混沌已に分るるの時に於て獲得し去らば、第三機に落在せん、自ら眼を著け去つて、直に佛祖の理致機關を超ゆべし、所謂佛の理致を超え、荆棘林を過得し、祖の機關を越え、銀山鐵壁を透得して始めて向上の本分あることを知りて、坐を得て衣を披し、人の爲めに黏を解き縛を去らん、如上座、座下に在りて積んで年あり、而今郷に歸る、呼喚すれども回らず、羅籠すれども住まらず、赤脚にして歸り去る、故に筆に信せて書して之を送る。

覺實上座に示す

祖師の宗風、向上の一著、大丈夫の氣槩を具して那邊に承當し、隨處自在妙用無礙なり、金剛王寶劍を揮ふて語訛を坐斷し、殺活の杖子を用て是非を勦除し、棒喝時に隨うて坐一走七、是の故に黃面老師、三百餘會、四衆八部を集めて能く法王と爲りて、法に於て自在なり、碧眼の初祖、九年面壁、後學を提諭し、外諸縁を息めて内心喘ぐことなく、心障壁の如くにして以て道に入る可しと云ふ、此れ等は皆是れ始めに方便を設け、後に自ら證知せしむ、諸縁放下、萬事休息、是れ第一の方便なり、若

下西河の獅子あり、門に當つて踞坐す、但だ來者あれば即ち復た絞殺す云々。

①三種の機。學人の根機に上根と中根と下根との三種あり。

②庭前柏樹子。趙州に僧問ふ、「如何なるか祖師西來意、」門云く、「庭前の柏樹子。」

③麻三斤。洞山に僧問ふ、「如何なるか佛、」山曰く、「麻三斤。」

④一口吸盡。龐居士、馬祖に問ふ、「萬象と偈たらざるものは、何なるか佛、」山曰く、「汝が西江水を一口に吸盡せんを待ちて即ち答へん。」

⑤六十烏藤。六十の痛棒のこと、臨濟、黃檗の會下に打坐すること三年、師兄の睦州尊者の教を受け入室す、臨濟如何なるか佛法的々の大意を黃檗に問ふこと三度、三度又痛棒を受く。

⑥如上座。尙座とも書す、梵に悉替那と云ふ、上に更に人なきを上座と名く、阿毘達磨集異門足論に曰く、「上座とは生年の上座、世俗の上座法性の上座、と三種あり。」

⑦四衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

⑧八部。天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽。

此の方便に滞らば便ち不是、事已むことを得ず、老婆心、和泥合水、楔を以て楔を抜く、機を以て機を奪ふ、千變萬化、七縱八横なり、若し口頭に則を取り、言に随つて解を生じ、陰界に墮在せば、猶は方便を知らず、況や正宗をや、實上座、性を稟くる凡ならず、人と爲り純至なり、語を求めて警策とせんとす、故に書して之を與ふ。

禪人に示す

一頂額上脚跟下、切に須らく薦取すべし、此の中一條通天の大路あり、普賢の行願を立てず、文殊の機智を説かず、毗盧を把斷して凡聖迹絶す、然して後に大機大用觸處に現成せん、百草頭上に權と説き實と説く、聲色堆裏に照を立し用を立す、接手方便自由自在なり、若し明眼の人をして見せしめば、猶は半途に在り、也た是れ枷を擔ひ狀を過す、然も是の如くなりとも雖も、須らく接手方便あることを知るべし、一は坐禪方便、二は直示方便、坐禪とは大定なり、直示とは大慧なり、蓋し空劫以前威音那畔は師無うして自ら發す、此等の方便なし、達磨の示す所の潛付密證とは是れなり、空劫以後は、悟あり迷あり、問あり答あり、師あり資あり、皆是れ接手方便なり。佛祖出興して理致あり機關あり、向上あり向下あり、明頭來暗頭合、日面佛月面佛、手に夜明の符を執りて金剛劍を提取す、作家の眼目機に應ずるの鉗鎚、言詮を用ひず機境を用ひず、利

①坐禪。坐は漢語、禪は梵語なり、具に禪那と云ひ、正思惟と譯す。
②師資。師は授業師なり、資は弟子なり、資は取なり、師の教に従つて取りて之を行ふの義。

根上智は直下に透達す、謂つべし天の普く蓋ふが如く、地の普く擊ぐるに似たり、寬豁たること虚空の如く、遍照日月の如し、古人の云く「黃梅會中七百の高僧、皆是れ佛法を會せる底、只た虚行者一箇ありて佛法會せざる底」と、是れは此れ直示底の様子なり、若し亦坐禪の方便は、某人已に此に熟せり、老僧が舌頭を煩はさず、適々唇を袖にして語を求む、筆に信せて老草す。

又

空劫以前は師無うして自發し、佛祖以來は師に因つて打發す、所謂自發打發は皆是れ人に接するの方便なり、蓋し從上佛祖の相傳ふる自在妙用、皆是れ機語投契のみ、達磨大師海を渡り江を過ぎ、面壁端坐隻履獨歸す、又是れ機語投契邊の事なり。上人投契せんと欲せば、直に須らく生死の根株を誅し、賢聖の窠窟を破して淨裸裸赤洒洒、一物に依倚せずして始めて小分の相應あるべし、老僧與廢の說話、且く道へ、投契ありや投契なきや、若し能く檢點得出せば、謂ふこと莫れ、老僧汝が爲めに説かずと。

③黃梅。黃梅山にして、達磨より五傳の祖大滿弘忍禪師を指す。
④虚行者。姓盧氏なるが故に云ふ、黃梅の法嗣にして慧能大師禪師を指す。
⑤過江。楊子江。

藤承相道家に示す

此の段の大事は、自己の脚跟下を彰はす、淨裸裸赤灑々、沒可把、水上に葫蘆を放つが如し、佗を拘牽すること得ず、佗を惹絆すること得ず、云云、具眼の漢、大爐鞴を設けて、百煉千煅、一棒一喝、

七顛八倒、淨に入り穢に入り、礙せず改めず、一々歴試して方に這の入頭の處を得て、少しく親近の分あらば、縦ひ能く之れを得るも之れを守り難く、之れを守るも之れを行じ難し、須らく知るべし此の事、直に是れ決定の志を具して、千差萬別の處に向つて、主宰となることを得べし、此降の外、畢竟什麼をか作さん。禪定殿下、我を閑靜の處に訪ひ、或は顯密性相の原を尋ね、波のごとく騰り、嶽のごとく立ち、或は直指單提の妙を問ひ、瓶のごとく瀉ぎ雲のごとく興る、余二十年の學力を以て僅に能く其の量に充し、其の飲を恣にするのみ、恣廢に筆を迅にす、請ふ、自ら看取せよ。

偈頌

佛鑑老師の生日を賀す

纔に胞胎を出で十方に歩す、遠く來り海を斟りて香湯を獻す、嫌ふこと莫れ惡水霧頭に灌ぐことを、往昔の毒龍毒最も強し。

新命天王の智長老を賀す 別山

夙債未だ酬いす眞の鐵牛、身を横へ重を負うて廊市に入る、脚頭踏斷す六門關、限りなき清風歩趾に隨ふ。

新命定慧圻 長老を賀す 方庵

春空 春水蒼龍起る、雲衢に飛び上りて歩歩通す、風雨私無く隨處に施す、須らく知るべし四海一雷同。

蘭溪 筭を送る韻を和す

竹林無數龍孫出づ、隱約春深く獨り門を閉す、惠意溫和にして頭角を寄す、憐む可し天性恩を知らざることを。

① 偈頌。梵に伽陀、此處に孤起、又は玄妙と云ふ、重頌ならざるを孤起と云ひ、亦風頌と云ふ、西域には舊に偈と云ふ、又は偈他とも云ひて、伽陀を音訛したるなり。

② 佛鑑。無準禪師の賜號なり、禪師の行狀初に載す。

③ 別山。佛鑑禪師の法嗣にて天童山に住す。

④ 長老。凡そ道眼を具し、尊ぶべき徳ある者を號して長老と云ふ、西域に道高く臘長する須菩提等と呼んで云ふが如く云々。

⑤ 方庵。佛鑑禪師に嗣法す。

① 兀庵最明平 元帥を印するの韻を和す

大機大用大根の人、鼻孔遼天獨露身、凜凜たる威風園外に行る、五湖四海一天眞。

② 圓明藤 丞相の韻を和し奉る

台星知んぬ是れ本文星、槐門を交照して家業榮ゆ、輔弼匪躬紫極を扶け、權衡手に入りて蒼生を惠む、靈山の付屬固に能く記す、雙徑の宗風已に與に盟ふ、駟馬時時梵宇に臨む、林泉此れより清平を樂む。

藤の 丞相に示す

妙は佛祖不傳の處に在り、高く理致を超えて機關を去る、機關を去りて窠臼没し、水は是れ水山は是れ山。

又

五葉花開く無根の樹、一陣の香風天地寛し、天地寛し春萬國、家門盛え民物安し。

③ 術士月潭頌を求む

月潭底無うして人に逼つて寒し、本命元辰自ら護せず、淡薄の家風處

に随つて樂む、清貧の生計只だ吾れ安す、尤も憐む月魂の遙漢を照すことを、且喜すらくは溪聲遠灘を度ることを、切に忌む聲に隨ひ仍ほ色を逐ふことを、直に須らく北斗南に面して看るべし。

④ 天王を送る

處處の叢林妖性多し、謾に平地に於て干戈を起す、天王住山の斧を提起して、南北東西凱歌を奏す。

⑤ 子曇侍者か韻を次ぐ

絶學の道人 帝寰に入る、玩水と游山とに隨はず、佛祖を烹る鉗鎚の手を具して、知んぬ是れ時に應じて鐵關を破す。

⑥ 率庵を悼む

癡坐頽然として轉身を解す、鄧峰山畔變通新なり、千年の琥珀玉土に埋む、半夜珊瑚月人を照す。

⑦ 寧 知客を送る

從來道地は是れ蘇州、五馬の知音笑つて點頭す、十字街頭に 鋪席を開く、直に高價を須て軽く酬ゆこと莫れ。

① 陶溪。宋國の人、北條時頼公の請を受け、相州建長寺に住す、大覺禪師と賜號せらる。

② 兀庵。諱は普寧と云ふ、宋國の人、東福寺や建長寺に客席たり、爲めに衆僧集まる、後歸國するに北條時頼の使に送らる、諡して宗覺禪師と云ふ。

③ 元帥。書言故事に、大將を元帥と云ふとあり、此のときの將軍は宗尊親王にして、時頼は其の執權なり、故に元亨釋書には副元帥平の時頼と出づ。

④ 圓明。圓明寺殿、別に後一條殿とも云ふ、藤原道家公第三子にして一條家の祖なり、官には左大臣從一位攝政關白に昇進後出家して法名を行祥、又は行雄と云ふ、六十二歳にして薨去す。

⑤ 權衡入手。禮記に、權衡は其の平を取る、故に先王是を貴ぶ、文選の注に、衡は平なり、權は重なり、權に任じて物を均しくして輕重を平ぐとあり、今此處にては天下の政務を柄るの謂なり。

⑥ 藤丞相。圓明寺殿を指す。
⑦ 術士。宇梁に術は消業なり、又伎術なり、按ずるに本文の術士は占卜者を謂ふ。
⑧ 天王。別山禪師を指す。
⑨ 帝寰。帝都を云ふ。
⑩ 率庵。諱は梵琮、光佛照に嗣ぐ、即ち大覺禪師の孫なり。
⑪ 寧知客。寧は杭州の人、退耕能寧禪師を云ふ。

⑫ 知客。職名なり、賓客を接して來意を上方丈に、又は衆僧に報する役なり。

⑬ 開鋪席。出世開堂のこと、今此處にては蘇州府報因光孝寺を指す、是れ寧知客初開堂の地なり。

⑭ 蓬瀛。蓬も瀛も共に仙境なり。

堯知客を送る

當年臂を掉つて、蓬瀛に出づ、還丹を秘蓄して直に今に至る、定慧門中に一粒を出さば、何ぞ憂へん鐵を點じて金と成さざることぞ。

梅花を剪る

陰陽の土地を假りて生せず、心に得手に應じて剪裁し成す、暗香些兒許りを缺くと雖も、松筠と弟兄と作るに堪へたり。

僧を送る

秋空水の如く水空の如し、衲子茲の時活路通ず、直に孤峰々頂上に向つて、草庵盤結して家風を展べよ。

還丹。大藏法數五十九に還丹の圖あり。

佛祖贊

達磨

海に航し遠く來つて筋力を費す、梁王動せざること盤石の如し、長蘆を抹過して少林に入る、一花五葉甚だ狼藉。

又

草を折り江を渡りて人知らず、少林九年空しく面壁、隻履歸らず西竺、大虛抹過して東國に入る。

又

草に入りて人を求むる處、相逢ふ斷臂の客、看よ佗位に依る時、標格と爲すに足らず。

又

祖師西來、少林一歇、天下の衲僧、之が概を抜かず。魚籃

①贊。叢林盛事に曰く、「前聖佛祖を贊するの偈句并に白贊の語なり、各々吟式あり。」

②梁王。梁武帝のこと、俗に佛心天子と云ふ。

③寒山拾得。唐の高宗の代に、天台山に豐干禪師あり、偶々山中を經行して赤城に至る、道の側に數歳の一子あり、師之を携へ歸りて典座に付し、拾得と名づく、後に一貧子あり、寒巖より來る、寒山と云ふ、最も詩を能くす、常人に非ず、代宗の時に二人相供に寒巖に遇れ去れり、行く處を知らず、世に流布せる圖中、箒を持てるは寒山書卷を展べて立てるは拾得なり。

這箇の女人、魚を海濱に求む、籃を携へ拾ひ得て、綸を垂るることを用ひず。

寒山拾得

路頭に拾ひ得て族親なし、直下に空を指して半途に在り、眉毛を剔起して相見て笑ふ、寒山歸り去つて工夫没し。

達磨

祖師西來、一字を説かず、聲前の語句、紅爐雪を點す。

①達磨。西天の末葉にして東土の初祖なり。禪宗これを以つて第一祖と爲す。故に祖師西來と、一度嵩山に入りて又一字を説かず、慧可一人を得て安心す、慧可雪中に立ちて得法す、これあとの三句あり。

自贊

東山長老の請

老漢百醜千拙、舉動すれば輒ち勘過せんことを要す、看よ毗盧華藏海、幾許の風波をか鼓起す。

藏山長老の請

生前の面目、色に非ず心に非ず、手裏の竹篋、能縱能擒、龍淵の水を攪動して、波濤萬尋に揚る。

辨雅長老の請

萬象堆中半身を現す、當陽に驗盡す作家の人、機語相投する處を知らんと要せば、垂下の鼻頭萬鈞重し。

智 侃侍者の請

靦面全く捉ぐ栗棘蓬、應緣投契宗風を振ふ、等閑に噴嚏すれば乾坤動く、十世古今盡く透通。

任淵上座の請

老漢一生曲牀に坐す、烏藤拈起す沒商量、機前毫髮も存せざる處、個儻分明に獨り自ら彰る。

孝仙の請

國譯聖一國師住東福禪師語錄

手に無毛の拂子を把りて、寥寥たる宇宙に清風を起す、今を照し古を鑑む頂門の眼、天下悉く知る草本同じ。

三林長老の請

普門禪寺の長老、口に信せて、胡說亂道、誰か知らん葛藤を打するに慣れて、終に人の好む所に隨はず。

然奇山の請

吾儂一段の風、佛祖通じ難かるべし、端なく手を垂るる所、天下草木同じ。

顯正堂の請

盡大地これ般若の光、光未だ發せざるの時生佛なし、形容才に露はれ此の道を傳ふ、舌本瀾翻して口沸くが如し。

張四綱の請

久能の門下、法の人に與ふるなし、篋を握り座に據る、近前すれば便ち磧。明辨庵主の請

兼拂縁に應じて説き、神仙妙訣あり、佛祖無住の心、是れ途轍を守るにあらす。

又

本命元神教外の傳、臨機の投契那邊の先、知るべし竹篋手頭の主、問著すれば時に隨つて月天に上る。

國譯聖一國師住東福禪寺語錄 終

① 宇宙 淮南子十一に曰く、四方上下之を宇と云ひ、往古來今之を宙と云ふ。
② 草本同 無準師曰く、若し是れ經山ならば然らず草本天下同と佛鑑錄卷二に出づ。
③ 胡說亂道 胡亂と熟し、説道はとくともいふ也。反語にして意深し。
④ 般若。梵語「にらば」なにして智惠と譯す。
⑤ 此道。禪宗の命脈にして、是れ佛道をいふ也。

師範、東福堂頭長老に和南す、印上人來つて、書并に前の一書及び寶塔を收む、一々領得す、甚だ不忘を感ず、第だ相去る事阻遠、即答するに由無し、且つ知る崇福より東福に遷り、四名刹に住して、衆を安じ道を行する事を、誠に老懷を慰む、但だ恁麼に操守して、力めて此の道を弘め、一枝の佛法をして、日本に流布せしめば、眞に宗乘中の人たるに忝ぢざるなり、長老は禪教兼通す、又能く踐履す、殊勝ならざることを患へず、只だ貴むらくは始終一節、介然として改めざる耳、此れ老僧が望む所なり、餘は它祝無し、多々大法の爲に自愛せよ、一々ならず。

大宋徑山住持圓照老僧師範書して、

日本東福堂頭爾長老に復す。

師範和南して承天堂頭長老に手白す、向に會て書を收む、已に嘗て回答す。就て錦法衣堂頂有りて附去す、乃ち是れ從上來諸知識の傳ふ所の者なり、以て付授の妄ならざるを表はす、且知る、長老故國に還り、緣法殊勝にして、至る所、響きの如くに合す、更に宜しく此の道を以て力め行ふべし、吾祖の教をして、在々處々、熾然として興らしめよ、此れ至祝を爲すなり、便風聊か脊々の意を復す、未問、切に宜しく大法の爲め保愛すべし、餘は一々ならず。

師範和南して、

承天堂頭長老に手白す。

了惠頓首再拜、

東福堂上禪師法兄和尚侍者に上覆す、即日春事闌を告ぐ、恭く惟れば、尊候、萬福を相くること有り、了惠竊密、道福を以て住山す、王臣贊護、聲稱奕々として、遠夏に被ると、乃ち知る、先師の左券、全く老手に歸することを矣、欽羨々々、切に乞ふ、師門の爲め、益々珍護を加へ、以て眞風を永くせよ、不宣。

大宋寶祐乙卯三月二十五日

天章初祖比丘了惠頓首再拜。

了惠頓首再拜して、

建仁堂上聖一賢處禪師侍者に上覆す、即日仲夏之月、恭く惟れば、尊候動止、神龍冥相の祝を納め、了惠曩に大國の回船に因りて、嘗て尺書を布き、并に正續施經を蒙る石刻を以て附納す、相望

むこと萬里、几格に登徹するや否やを知ることを莫し、神足元空二兄の提唱の妙語を傳授するを見る毎に、凜然として老圓照の氣味有り、人をして毛骨を森聳たらしむ、中間且つ聞く錫を名利に移すと、恨むらくは親しく法會に臨むことを得ず、但だ能く斫額、東望する也、了惠茲に風便に因つて、字無かるべからず、但だ客邸物の芹倚を見る無し、復狀を需めて未だ問あらず、萬告大法の爲め、後學の爲め強ひて復せよ、不宣、了惠頓首再拜上覆。

右語錄國師年譜を以て、再刊助縁の餘資、重刻する者也。

元和六年庚申臘月下浣

見東福集雲叟守藤之れを記す。

惠日國師、楊岐一宗を振起し、雙徑の正脈を流傳す、提唱語錄、舊刻漫漶、重ねて釐整を加へ、刊行流通、南谷の一衆、各衣資を抽んで、板を常樂禪庵に置く、伏して願はくは佛種、世々に斷えず、光明幢を建て、祖印親傳して、人々無盡藏を開かんことを。

文政丁丑十月濟北劣孫令材識す

聖一國師住東福禪寺語錄序

佛唯說而已、不結集矣、結集者、諸子之事也、我慧日祖說法、可盈海藏焉、諸子之多、宛如蒼蠅焉、然皆早敷、化於四方、不違結集矣、有忠首座者、謂予曰、吾祖貫花、無綴緝者、歲已半百、更加數年、恐微言之絕乎、師有意哉、予曰、兄與予共貽厥也、我言結集者、諸子之事也、予豈敢乎、曰、結集者誰、曰、妙德大龜及慶喜也、曰、慶喜嗣阿誰、曰、嗣大龜、曰、寧非孫謀乎、曰、似則似矣、是則未是也、曰、若有似者、亦庶幾焉、予不得而拒、纂集竟告曰、今之所得者、蠹簡殘編也、豈能共收並畜乎、所謂仙官勅六丁、雷電下取將、流落人間者、太山一毫芒也耳矣、方今天下緹衣十襲、惠日手澤者多矣、兄者遍參人也、或江或湖、剽聞切問、糅此冊焉、元德三年二月初五日、三聖孽孫師鍊敬序。

聖一國師住東福禪寺語錄

三聖嗣孫 師 鍊 校纂

元旦上堂禪非意想立意乖宗道絕功勳建功失旨新年消息不動纖塵應節納祐慶無不宜若作佛法商量喚鐘作甕若作世諦流布平地喫交大眾還委悉麼孟春猶寒歸堂喫茶

無准忌拈香我昔行腳航海梯山拖泥帶水徧歷南方當時五髻峰頭不覺撞著這老師遭儂毒手無回避處眼上安眉蕩盡生涯直至如今無言可說無理可伸而今對衆盡底揭翻舉香云劫石有消日此恨幾時休

浴佛上堂悉達太子法身示現今日誕生淨飯王宮九龍吐水沐浴金軀地涌金蓮捧承其足普天匝地自矜伐無端開口獨稱尊具足大人相莊嚴施作微妙大佛事且作麼是大佛事良久云下座普請露柱燈籠同入如來香水海助這老子轉大法輪

結夏小參靈山密付少林單傳機機相投言言相契以大圓覺爲我伽藍身心安居平等性智九旬禁足三月護生守蠟人冰憐鵝護雪起大精進發大勇猛秉智慧劍一往直前有學無學一切皆殺殺一切已見山是山見水是水全體恁麼來全體恁麼去搥無許多路布葛藤正恁麼時呼作衲僧本分事得麼萬仞懸崖須撒手大千沙界現全身復舉德山示衆云老漢見處佛也無祖也無達磨大師是老臊胡十地菩薩是擔屎漢等妙二

覺是破戒凡夫、菩提涅槃、是繫驢橛、十二分教、是鬼神簿、拭瘡疣紙、四果三賢、初心十地、是守古塚鬼、自救不了、拈云、德山得逸群用、明辨古今、提振綱宗、誘掖後進、拈拄杖云、雖然如是、被老僧拄杖子穿卻鼻孔、直得無出氣處、衆中莫有出氣底麼、卓一下云、具眼者辨取。

結夏上堂、高超十地、不歷僧祇、物我一如、身心平等、不與萬法爲侶、不與千聖同途、全提佛祖大機、獨露人天正眼、直居孤峰頂上、禁足、卻向十字街頭垂手、殺活自在、擒縱縱橫、且道、還有應聖制分也無、良久云、日用無回互、當機有卷舒。

解夏小參、大機大用、自在縱橫、不帶千聖機關、不墮諸祖窠窟、淨裸裸絕滲漏、赤洒洒無覆藏、本地風光、本來面目、言發非聲、和言擊碎、色前不物、與物俱融、打開布袋口、擊碎鐵門關、提吹毛劍、南來北往、田地穩密、步步踏實、且道、如何是踏實地底一句、不喜蠶人水、何憐鵝護雪。

復舉文殊三處度夏、至自恣日、迦葉欲白槌擯出、纔舉槌、便見百千文殊、世尊問迦葉、汝欲擯那箇文殊、迦葉茫然、拈云、三箇老凍膿、一人圓陀陀地、一人曲彎彎地、一人黑漆漆地、子細點檢將來、一得一失。

解夏上堂、舉僧問雲門、初秋夏末、前程若有人問、未審對佗道什麼、門云、大衆退後、僧云、過在什麼處、門云、還我九十日飯錢來、拈云、這僧用劍刃上事、雲門具殺活手段、諸人還會麼、良久云、不如無事好、便下座。

開爐上堂、今朝應時節、東福開圍爐、三世諸佛、四聖六凡、情與無情、盡向火焰裏、共轉大法輪、有耳者聞、有眼者見、灰頭土面、袈裟蒙頭、照顧眉毛、歸炭裏坐、且道、有爲人處也無、若又不會、

問取丹霞和尚。

冬至小參、朕兆未分、虛空無背面、一氣已動、萬象自崢嶸、晷運推移、日南長至、向本分田地、撥轉向上機、一段家風、輝騰今古、釋迦彌勒、無路退身、臨濟德山、目瞪口呆、千里萬里、無片雲擬議、不來三十棒、正恁麼時、諸人還委麼、群陰消剝盡、來日是書雲。

復舉僧問疎山、如何是冬來事、山云、京師出大黃、拈云、疎山明立信旗、密排陣敵、不犯鋒鏑、收放自在、雖然如是、東福若有問冬來事、劈脊便棒、何故殺人刀、活人劍、具眼底辨取。

冬至上堂、寒暑變遷、一陽來復、百昌萌動、劫外開花、豎起拄杖云、老僧拄杖子長多少、良久云、一冬二冬、叉手當胷。

臘八上堂、黃面老子、正覺山前、謾觀明星、打失眼睛、從古至今、承虛接響、眼裏撒沙、漏逗不少、畢竟作麼生、各請上殿、炷香禮拜、宜著眼看黃面老子面皮厚多少、下座。

除夜小參、一機未露、毗盧元是凡夫、萬法縱然、普賢得其境界、徧界不曾隱、改故換新、東村王老、爆竹燒錢、驅神逐鬼、千聖拱手、天魔潛蹤、全體恁麼來、全體恁麼去、步步踏實地、句句透根源、通箇安排、應箇時節、拈拄杖卓一下云、還委麼、一聲雷發動、蟄戶一時開。

復舉僧問香林、如何是衲衣下事、林云、臘月火燒山、拈云、香林撥轉關棧、踏翻路頭、這僧耀古騰今、歸家穩坐、且道、如何是歸家一句、覷面若無宗正眼、回頭只見翠山巖。

上堂、十方佛土中、唯有一乘法、更喚作得禪道佛法麼、若言作得、打失一雙眼睛、若言不作得、千古下作人笑端、本色行腳人、須具行腳眼、始得、且道、如何是行腳眼、行到水窮處、坐看雲起。

時。

上堂，棒頭取證，落筆墮坑，喝下承當，承虛接響，向上向下，轉更顛預，說妙說玄，和泥合水，正恁麼時，行不動塵，語不動唇，直須到大休大歇，大安樂之場，若也不會，問取當來彌勒慈尊。

上堂，萬機不到，千聖不携，把斷要津，不通凡聖，雖然如是，不免放一線道，向第二義門，無言處演言，無相中現相，始終一貫，前後無差，恁麼告報，諸人還甘麼，三生六十劫。

上堂，本色衲僧家，須具行腳眼，若未具行腳眼，落二落三了也，且道，作麼是行腳眼，良久云，朝看東南，暮觀西北。

上堂，舉古德云，說得一丈，不如行取一尺，說得一尺，不如行取一寸，雖然如是，東福不然，說也說不得，行也行不得，何故得意忘言，猶揚家醜，寧可截舌，不犯國諱。

上堂，靈山獨付飲光，少室單傳可祖，黃梅半夜授衣，臨濟臨行付屬，東福門下，無密傳付屬底事，今日普爲諸人，直示這箇事，且道，與古人有優劣麼，各宜著眼看。

上堂，靈鷲峰前，白雲靄靄，少室巖畔，白雪皚皚，拈拄杖卓一下云，瞿曇說不盡處，祖師提不起底，山僧對衆，八字打開了也，諸人還見麼，又卓一卓下座。

上堂，舉乾峰示衆云，舉一不得，舉二，放過一著，落在第二，雲門出衆云，昨日有人從天台來，卻往徑山去，峰喚維那云，來日不得普請，拈云，乾峰無陰陽地，露箇消息，雲門袖裏藏金鎚，高持祖印，頭正尾正，始末相符，敢問大衆，有這般底麼，若無歸堂喫茶。

上堂，舉僧問九峰，如何是不遷義，峰云，東生明月，西落金烏，僧云，非師不委，峰云，理當即行，僧

禮拜，峰便打，僧云，仁義道中禮拜何咎，峰云，來處不明，須行嚴令，拈云，九峰以的奪機，嚴令當行，這僧向劍刃上，能辨曲直，互傾肝膽，各出毫芒，騰古出今，騎聲蓋色，大衆還委麼，試請辨別看。

上堂，第一句下薦得，佛祖乞命，第二句下薦得，人天膽落，第三句下薦得，虎口橫身，坐斷毗盧頂，不稟釋迦文，不帶聲色，不落見聞，東福不敢囊藏被蓋，八字打開了也，遂舉拂子云，還見麼，擲下云，分明記取。

上堂，動絃別曲，葉落知秋，提向上鉗鎚，開作家爐，德山棒無下手處，臨濟喝啓口不得，正恁麼時，如何通信去也，良久云，狢獠舌頭三千里，壺中日月自分明。

上堂，月生一，乾坤廓落，大方無外，月生二，師子奮迅，象王回旋，月生三，蟻螟眼裏，大鵬翻身，所以道，向上一路，千聖不傳，學者勞形，如猿捉影，拈拄杖卓一下云，有意氣時添意氣，不風流處也風流。

上堂，妙性圓明，離諸名相，本來無有世界衆生，因妄有生，因生有滅，生滅名妄，滅妄名真，喝一喝云，黃面老漢，當時若下得這一喝，免得許多漏逗，何故既是圓明離相，妄從何起，真從何生，若恁麼見得徹去，山河大地，萬象森羅，四聖六凡，情與無情，不消一捏，敢問大衆，卽今是什麼時節，舉拂子云，盧舍本身全體現，當機直下沒纖毫。

上堂，舉金峰示衆云，老僧二十年前有老婆心，二十年後無老婆心，時有僧出問，如何是二十年前有老婆心，峰云，問凡答凡，問聖答聖，僧云，如何是二十年後無老婆心，峰云，問凡不答凡，

問聖不答聖，拈云：金峰顯大機，發大用。這僧玉轉珠，回流通正眼。雖然如是，東福不然。當時有恁麼問，劈脊與一棒，何故達者先知，賢明早悟，久立珍重。

上堂：不是目前法，亦非心外機。直下絕承當，當陽無向背。提持祖印，荷負宗乘。觀面相呈，更無餘事。正恁麼時，作麼生撥開向上一竅，千聖齊立下風。

上堂：孤峰頂上眠雲，十字街頭垂手。全機大用，觸處見成。溢目清光，貫通今古。一塵含法界，一念遍十方。淨裸裸無遺，赤洒洒全露。出沒自在，不隔纖塵。雖然如是，更須揮金剛王寶劍，直截根源，當陽顯露。不者也周由，正恁麼時，不依倚一物，一句如何道。萬象之中，獨露身。百草頭邊，著著親。

法語

示空明上人

祖師直示，無殊方便。放下諸緣，休息萬事。晝三夜三，守看鼻端。纔涉境界差別之時，只舉話頭，不作佛法想，不作破除想，不用存心等解，不用情生疑殆。沒理路，沒滋味，如鐵饅頭，單刀直入，不涉異想。悠久歲月，自然恰如睡夢。如蓮華開，正當恁麼時，從前話頭，只是扣門瓦子，拋下那邊，卻看祖佛機關語句，皆是止小兒啼耳。向上一路，更不通一線。截斷凡聖要津，學者勞形。如猿捉月，可謂忘卻自身。向外馳求，何日可求得耶。安坐蒲團上，晝夜求成佛。厭卻生死欲證菩提，皆如捉月猿。若欲真實相為處，只是無心是道，亦非木石靈靈。常知了了分明，視聽尋常，更無委曲。空明上座，晝夜面壁，求語為警策，不惜家風，信筆書之。文永四年月日。

示智禪上人

祖師門下，直指人心。言說方便，特地乖張。不墮見聞，不從聲色。百草頭上縱橫，萬象堆裏坐臥。出息不假塵緣，入息不繫陰界。盡大地解脫門，摠利海真實法。通方作者，舉著知歸。初心晚學，云何湊泊。若未薦得，且向第二義門放一線道。無言處演言，無相中現相。如何是無言處演言，磨盤空裏走。如何是無相中現相，西河弄師子。日用應緣，差別境界時，不用破除想，不作玄妙會。沒理路，沒滋味，晝夜忘寢食。看此話，若未薦得，更說第三頭。說心說性，說玄說妙，一塵含法界，一念遍十方。故古者道無邊刹境，自他不隔毫端。十世古今，始終不離。當念禪上人袖紙。

求語信筆老草一見後付丙丁。

示智日禪人

佛祖以來大凡接人有三種機若是第一機更無方便沒義理難話會若於此直下承當則與庭前柏樹子麻三斤一口吸盡西江水更無差別若是第二機只是發起問端隨手點破則如臨濟問黃檗喫六十烏藤若是第三入泥入水下箇注腳時人眼目滅胡種族只是真正衲子直須撥卻參活句不參死句目上人為人純實若能活句上薦得堪與祖佛為師老僧不惜家風示三種機云。

示如上座

佛佛授手不唯佗只是自己恩力處方木投圓孔土塊洗泥裏祖祖相傳空谷答聲呼南作北橫三豎四坐一走七未免誦訛若又向一氣未兆以前杳冥恍惚信待及猶在第二頭何況更於混沌已分時獲得去落在第三機自著眼去直超佛祖理致機關所謂超佛理致過得荆棘林越祖機關透得銀山鐵壁始知有向上本分得坐披衣為人解黏去縛如上座在座下積有年而今歸鄉呼喚不回羅籠不住赤腳歸去故信筆書而送之。

示覺實上座

祖師宗風向上一著具大丈夫氣槩那邊承當隨處自在妙用無礙揮金剛王寶劍坐斷誦訛用殺活杖子勦除是非棒喝隨時坐一走七是故黃面老師三百餘會集四衆八部能為法王於法自在碧眼初祖九年面壁提論後學外息諸緣內心無喘心如墻壁可以入道此等皆是

始設方便後自證知諸緣放下萬事休息是第一方便也若滯此方便即不是事不得已老婆心和泥合水以杖拔楔以機奪機千變萬化七縱八橫若口頭取則隨言生解墮在陰界猶不知方便況正宗哉實上座稟性不凡為人純至求語警策故書與之。

示禪人

頂額上腳跟下切須薦取此中有一條通天大路不立普賢行願不說文殊機智把斷毗盧凡聖迹絕然後大機大用觸處現成百草頭上說權說實聲色堆裏立照立用接手方便自由自在若使明眼人見猶在半途也是擔枷過狀然雖如是須知有接手方便一坐禪方便二直示方便坐禪者大定也直示者大慧也蓋空劫以前威音那畔無師自發無此等方便達磨所示潛付密證是也空劫以後有悟有迷有問有答有師有資皆是接手方便也佛祖出興有理致有機關有向上有向下明頭來暗頭合日面佛月面佛手執夜明符提取金剛劍作家眼目應機鉗鎖不用言詮不用機境利根上智直下透達可謂如天普蓋似地普擎寬豁如虛空遍照如日月古人云黃梅會中七百高僧皆是會佛法底只有盧行者一箇不會佛法底此是直示底樣子也若亦坐禪方便某人已熟于此矣不煩老僧舌頭適袖紙求語信筆老草。

又

空劫以前無師自發佛祖以來因師打發所謂自發打發皆是接人方便也蓋從上佛祖相傳自在妙用皆是機語投契耳達磨大師渡海過江面壁端坐隻履獨歸又是機語投契邊事也上人欲投契直須誅生死根株破賢聖窠窟淨裸裸赤洒洒不依倚一物始有小分相應老僧

與麼說話且道有投契耶無投契耶若能檢點得出莫謂老僧爲汝不說

示藤丞相道家

此段大事彰自己腳跟下淨裸裸赤灑灑沒可把如水上放葫蘆拘牽它不得惹絆它不得云云具眼漢設大爐鞴百煉千煅一棒一喝七顛八倒入淨入穢不礙不改一一歷試方得這入頭處有少親近分縱能得之難守之守之難行之須知此事直是具決定志向千差萬別處得爲主宰降此之外畢竟作什麼參禪定毘下訪我於閑靜處或尋顯密性相之原波騰嶽立或問直指單提之妙瓶瀉雲興余以二十年學力僅能充其量恣其飲耳恁麼迅筆請自看取

偈頌

賀佛鑑老師生日

纔出胞胎步十方遠來掛海獻香湯莫嫌惡水慕頭灌往昔毒龍毒最強

賀新命天王智長老 別山

夙債未酬真鐵牛橫身負重入鄗市腳頭踏斷六門關無限清風隨步趾

賀新命定慧圻長老 方庵

春空春水起蒼龍飛上雲衢步步通風雨無私隨處施須知四海一雷同

和蘭溪送笋韻

竹林無數出龍孫隱約春深獨閉門惠意溫和寄頭角可憐天性不知恩

和兀庵印最明平元帥韻

大機大用大根人鼻孔遼天獨露身凜凜威風行闔外五湖四海一天真

奉和圓明藤丞相韻

台星知是本文星交照槐門家業榮輔弼匪躬扶紫極權衡入手惠蒼生靈山付屬固能記雙徑宗風已與盟駟馬時時臨梵宇林泉自此樂清平

示藤丞相

妙在佛祖不傳處高超理致去機關去機關兮沒窠臼水是水兮山是山

又

五葉花開無根樹，一陣香風天地寬。天地寬兮春萬國，家門盛兮民物安。

術士月潭求頌

月潭無底逼人寒，本命元辰不自謾。淡薄家風隨處樂，清貧生計只吾安。尤憐月魄照遙漢，且喜溪聲度遠灘。切忌隨聲仍逐色，直須北斗面南看。

送天王

處處叢林妖恠多，謾於平地起干戈。天王提起住山斧，南北東西奏凱歌。

次子曇侍者韵

絕學道人入帝寰，不隨玩水與游山。具烹佛祖錯鎚手，知是應時破鐵關。

悼率庵

癡坐頽然解轉身，鄮峰山畔變通新。千年琥珀玉埋土，半夜珊瑚月照人。

送寧知客

從來道地是蘇州，五馬知音笑點頭。十字街頭開鋪席，直須高價莫輕酬。

送堯知客

當年掉臂出蓬瀛，秘畜還丹直至今。定慧門中出一粒，何憂點鐵不成金。

剪梅花

不假陰陽土地生，得心應手剪裁成。暗香雖缺些兒許，堪與松筠作弟兄。

送僧

秋空如水水如空，褫子茲時活路通。直向孤峰峰頂上，草庵盤結展家風。

佛祖贊

達磨

航海遠來費筋力，梁王不動如磐石。抹過長蘆入少林，一花五葉甚狼藉。

又

折葦渡江人不知，少林九年空面壁。隻履不歸西竺乾，大虛抹過入東國。

又

入草求人處，相逢斷臂客。看佗依位時，不足為標格。

又

祖師西來，少林一歇，天下衲僧，不拔之概。

魚籃

這箇女人，求魚海濱，携籃拾得，不用垂綸。

寒山拾得

路頭拾得族親無，直下指空在半途。剔起眉毛相看笑，寒山歸去沒工夫。

達磨

祖師西來，一字不說，聲前語句，紅爐點雪。

自贊

東山長老請

老漢百醜千拙，舉動輒要勘過。看毗盧華藏海，鼓起幾許風波。

藏山長老請

生前面目，非色非心。手裏竹篋，能縱能擒。攪動龍淵水，波濤揚萬尋。

辨雅長老請

萬象堆中現半身，當陽驗盡作家人。要知機語相投處，垂下鼻頭重萬鈞。

智侃侍者請

觀面全提栗棘蓬，應緣投契振宗風。等閑噴嚏乾坤動，十世古今盡透通。

任淵上座請

老漢一生坐曲牀，烏藤拈起沒商量。機前毫髮不存處，個儻分明獨自彰。

孝仙請

手把無毛之拂子，寥寥宇宙起清風。照今鑑古頂門眼，天下悉知草本同。

三林長老請

普門禪寺長老，信口胡說亂道。誰知慣打葛藤，終不隨人所好。

然奇山請

吾儂一段風，佛祖可難通，無端垂手處，天下草木同。

顯正堂請

盡大地是般若光，光未發時無生佛，形容才露此道傳，舌本瀾翻口如沸。

張四綱請

久能門下，無法與人，握篋據座，近前便磬。

明辨庵主請

秉拂應緣說，神仙有妙訣，佛祖無性心，不是守途轍。

又

本命元神教外傳，臨機投契那邊先，須知竹篋手頭主，問著隨時月上天。

聖一國師住東福禪寺語錄終

師範和南東福堂頭長老，印上人來收書并前一書及寶塔，一一領得，甚感不忘，第相去阻遠，無由即答，且知自崇福遷東福，住四名刹，安衆行道，誠慰老懷，但恁麼操守，力弘此道，使一枝佛法流布於日本，真不忝爲宗乘中人也。長老禪教兼通，又能踐履，不患不殊勝，只貴始終一節，介然不改耳。此老僧所望，餘無它祝，多多爲大法自愛，不一。

大宋徑山住持圓照老僧師範書復日本東福堂頭爾長老。

師範和南手白承天堂頭長老，向會收書，已嘗回答，就有錦法衣堂頂附去，乃是從上來諸知識所傳者，以表付授不妄，且知長老還故國，緣法殊勝，所至響合，更宜以此道力行，使吾祖之教，在在處處，熾然而興，此爲至祝也。便風聊復眷眷之意，未間切宜爲大法保愛，餘不一。

師範和南手白承天堂頭長老。

了惠頓首再拜。

上覆東福堂上禪師法兄大和尚侍者，即日春事告闌，恭惟尊候有相萬福。了惠竊審以道福住山，王臣贊護，聲稱奕奕，遠被中夏，乃知先師左券，全歸老手矣。欽羨欽羨，切乞爲師門益加珍護，以永真風，不宣。

大宋寶祐乙卯三月二十五日。

天童初祖比丘了惠頓首再拜。

了惠頓首再拜。

上覆建仁堂上聖一賢屬禪師侍者。即日仲夏之月。恭惟尊候動止。納神龍冥相之祝。了惠曩因大國回舶。嘗布尺書。并以正續蒙施經石刻附納。相望萬里。莫知登徹几格否。每見神足元空二兄傳誦提唱妙語。凜然有老圓照氣味。使人毛骨森聳。中間且聞移錫名利。恨不得親臨法會。但能斫額東望也。了惠茲因風便。不可無字。但客邸無物。見芹倚需。腹狀未聞。萬告爲大法。爲後學強復。不宣。了惠頓首再拜上覆。

右語錄以國師年譜再刊助緣之餘資。重刻者也。

元和六年庚申臘月下浣

見東福集雲叟守藤記之。

惠曰國師。振起楊岐一宗。流傳雙徑正脈。提唱語錄。舊刻漫漶。重加釐整。刊行流通。南谷一衆。各抽衣資。置板于常樂禪庵。伏願佛種不斷。世世建光明幢。祖印親傳。人人開無盡藏。

文政丁丑十月

濟北劣孫令材識。

國譯一山國師語錄

解題

鎌倉時代に我が國に來朝したる支那の禪僧、其の數頗る多しと雖も、我が一山國師ほど上下の尊信を博したる者は稀ならん。師は初め法を頑極行彌に嗣いで、四明(今の浙江省鄞縣の南方にある山)の祖印寺に住し、轉じて慶元(今の浙江省甌海道慶元縣)の觀音寺に遷る。本朝の正安元年、來朝して鎌倉の建長寺に住す。同四年圓覺寺に轉じ、尋で建長寺、淨智寺に住す。正和二年京都の南禪寺を董す。本書一山國師語錄は乃ち斯の七會の語要を集めたるものにして、師一代の垂示言句は殆ど茲に網羅されたるものと言ふべし。而して其の編者は孰れも皆師の侍者等なり。其の内容は、以上七寺の住山語錄の外、小參、法語、拈古、頌古、偈頌、佛祖贊、自贊、小佛事及び師の行記等より成り、之に附するに、大元の靈石如芝禪師の序、古林清茂禪師の跋、師の同參德明東山の跋、中峯明本和尚の後序等を以てす。更に卷末に、後宇多院宸書の國師號記、宸書の御贊、宸書の札等を附す。以て本書の價值如何を知るに足るべし。

師は實に我が國禪宗二十四派中の一たる一山派の祖にして、楊岐宗曹源下に屬す。法幢を高く掲げて

道を扶桑に唱へ、大いに宗風を振ふ。上は王公より下は庶民に至るまで、その道を慕ひて麴の如くに其の座下に集れり。而して師の詞藻と禪風とは、乃ち本書到る所に表示せらる。就中、法語中の『龜山法皇に上る書』の如きは、最も其の禪風の盛美を發揮せる大文字にして、彼の二十四派中の一異彩と言ふべし。

猶ほ師の傳と來朝の使命などに關しては、卷末に附する東福の虎關禪師の筆になる『行記』に悉し、出づるを以て、今は之を再録せず。唯だ其れに洩れたるものを少しく記して、讀者の一察に供すべし。師は南宋の理宗皇帝、淳祐七年を以て生る。稍々長じて容止端嚴、氣貌秀發なり。律部を應眞寺に學び、台教を延慶寺に習ひ、精勤修練、喧涼を憚らず。已にして歎じて曰く、「三藏十二部教は浩繁に勝へず。苦ろに之を學ばんとせば、誠に沙を算ふるが如し、毫も益なし」と。即ち棄て去る。それより天童に上つて簡翁敬和尚に依つて禪要を咨ふ。元の初に至りて祖印寺に住すること十載、後、補陀山に遷る。大徳三年(我が正安元年)東渡して太宰府に寓す。副元帥平貞時、師を疑ひて游偵となし豆州に徙す。未だ幾もなくして疑釋け、尋で建長、圓覺、淨智、南禪などの諸大刹に住す。文保元年十月二十五日疾んで寂す。壽七十有一。後宇多太上皇、之を聞しめして嗟惜に堪へず、國師の號を賜ふ。語錄二卷あり、本書即ち是れなり。附法の弟子雪村梅友、石梁仁恭、無著良緣、無惑良欽、無相良眞、東林友丘等は咸一時の名衲たり。

師は又我が北畫の鼻祖と謂はる。師は素より丹青の道に秀づ。來朝後、法務の傍、屢々彩管を揮つて北畫の妙技を表はし、遂に其の術を傳ふ。是れ實に師の餘技に出づる處なりと雖も、後世我が美術史上に及ぼしたる影響、頗る大なるものあり。

後世、我が黄檗の高泉和尚、『東渡諸祖傳』を編んで師の傳を識し、其の終に贊して曰く、「哇衣の士、身を物外に置いて、佛法を操持すと雖も、而も君に忠あるの心、曷ぞ嘗て具へざらん。寧師當時、不請の友と爲りて、此の方に遊化して、陰かに王憲を翺く。坐滅の時、特に遺表を筆す。其の忠愛何如とかなすや。其の初め間諜を以て之を疑ふことは、蓋し察せざればなり焉」(原漢文)と。それは是れ師の眞面目を道破せる至言と謂ふべし。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄序

我が宗に語句なし、又一法の人に與ふるなし。若し一法の人に與ふる有らば、土も亦消し難し。古人與廢に、水泄せども通ぜずと。知らず、此の語此の録、何れ従りしてか解することあらん。未だ口を啓かず未だ筆を落さざる以前に向つて會得せば、方に我が一山和尚、頑翁不傳の秘を傳へ、道を扶桑に倡ふ。大用峻機、雷霆の空を撃ち、巨黍の的を破るが如く、王臣師とし仰ぎ、學者景のごとく従ひ、死生に洞徹して、了に凝滞なきことを見ん。所説雲のごとくに興り、水のごとくに涌き、所録棟に充ち牛に汗すと雖も、剩れりと爲す矣。一山余と生を台嶠に同じくし、夏を玉几に同じうして、講磨奮厲、道術相忘る。戡化以來、嗟悼して已まず、延祐庚申の冬、神足緣首座、録する所の七會の語を携へて、爲に示さる、披覽して以て還す。覺えず卷を拊つて言ふて曰く、「佛法の東漸、于に以て見る矣」と。禾城本覺如芝書す。

①土。土は一本には「田」とあり。
②巨。鉅に作る、良弓なり。
③玉几。青玉山を云ふ。
④延祐。元の第八主仁宗の年號、庚申は七年なり。
⑤如芝。字は靈石、虛堂愚に嗣ぐ。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄卷上

初住大元四明鰲峰山祖印禪寺語錄

侍者了眞編

師、至元甲申五月十八日入院す。三門を指し、左右を顧視して云く、
「八字打開了也、龍門客少なり、鬧市人多し。」

佛殿、「一坐具の地に、人人分有り、黃面の老漢知らず。」坐具を展べて
云く、「今日伊が爲に説破す。」

據室、「任公の釣、六鰲を一掣す、若し是れ破鰲盲龜ならば、咄、頭を縮
めて去れ。」

拈疏、「相濡し相煦す、義、雲天に薄る。語りて誦諷に到るに及んで、
又却つて肝膽楚越、信ぜずんば下文を聴取せよ。」

法座、「祖佛行いて到らざる處道ひ及ぼさざる處、新鰲峰歩を擧して踏

①山一。名は一寧、宗派系傳は、密庵咸傑一曹源一出生一凝絶道沖一頑極行彌一山一寧。元の第二主成宗皇帝、大師號并に江浙釋教總徒を授く、大徳二年來朝、我國の正安元年なり。

②語錄。禪宗に傳はる語録は生前滅後に拘らず、師の常談を以て宗旨を直説せらるるを侍者や小師共が聞くがまゝを筆録せしものなり、故に華藻を

著し、口を開いて道著せんと要す。何が故ぞ、別に一路子あり。遂に陞座す、祝聖罷つて。「問答録せず。」

提綱、「祖師の心印、古篆分明、端なく後來胡擔亂擔、眞を失し了れり。今日寧上座の手裏に在り、試に倒用せん、看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「錦縫全く開いて、朱點露れず、靈樞を劫外に運し、大化を寰中に敷く。直に得たり巨鰲動せず、三山常に太虚に聳え、萬國の來賓、帝祚永く億載に隆ならんことを。然りと雖も、只だ紋篆未だ形れざる已前の如きんば、又作麼生。」又卓一下して云く、「收。」

復た楊岐、慈明に問ふ、「幽鳥語喃喃」の公案を擧す。師拈じて云く、「是なることは則ち是なり、猛虎其の子を食はず、甚に因つてか慈明連喝兩喝し、楊岐便ち禮拜す。」

解夏上堂、禁足安居、尅期取證、何ぞ韓獹を繼いで獲ることを責むるに異ならん。我が者裏一切拘はること無し、其の自ら化するに任す。且つ秋初夏末、賞勞の事作麼生。臨濟雷奔の喝、德山雨點の棒。

開爐 遠く出でて歸り、兼ねて相訪ふことを謝する。上堂。「住山定

離る 禪門寶訓の序の注に「密に眞機を顯すを語云ひ、總て衆事を集むるを録云ふ」と出づ。

三門。山門の制、門に排列して三箇あり、故に謂ふ。

佛殿。西域には香殿云ふ、百丈及德山は佛殿を立てず、所以あり、文字禪白鹿山の章を見よ。

拈疏。疏は文體明辨に布なり。こあり、又正字通には條陳と出づ。

法座。法堂の須彌壇上にあリ、即ち演法の座を云ふ。

提綱。說法を提綱云ふ、即ち宗旨の大綱を提起して説く、又は提要云ふ、萬庵曰く、「古人の上堂に大法の綱要を提ぐ」是れなり。

解夏。又は解制云ふ、安居の制を解き出遊期に入る、之れ七月十六日後なり、勅修清

力無し、茫茫として外邊に走る。鼻孔を打失し了つて、一張の口を拈得す。

今日歸り來つて、火爐頭無賓主の話、試に諸人の與に擧す、看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「明眼人前に、漏逗少からず。」

冬至上堂、暑運推し移つて日南長至、三家村裏の爛牛屎、動地放光、十字街頭の坵堆。演大の法義何を以てか見得す。道ふことを見ずや、是法住法位。

元宵上堂、擧す、教中に道ふ、「見聞覺知是法公案」と。師拈じて云く、

「恁麼の說話、何ぞ油を將つて 皂を洗ふに異ならん、只だ節、元夕に逢ふが如きんば、是の處管絃月を沸し、燈火空を燒く。衲僧家、眼に到つては是れ色、耳に入つては聲を成す、畢竟是れ法か、法を離るるか。拄杖を拈じて卓一下して云く、「江南地暖かに、塞北天寒し。」

佛生日上堂、「天を指し地を指して、醜を擧止に露す。唯吾獨尊、傍若無人、二千年前放過へか

らず、二千年後放過不可。」下座。「大佛殿に詣り、更に與に驗過せん。」
上堂、翠巖芝和尚、衆に示して云く、「大家相聚りて莖蓋を喫するの公案を擧す。師拈じて云く、「大衆、直饒ひ喚んで一莖蓋と作さざるも、亦未だ地獄に入ること箭を射るが如きことを免れず。何か故

規に曰く、「解夏七月十四日の晩、念誦湯を煎じ、來日陞堂人事巡察、煎點正に結夏の儀と同じ云云」と出づ。

開爐上堂。十月一日に爐開きの式あり。

上堂。二種あり、法堂に演法の上堂と、僧堂に粥飯を喫するの上堂とあり、前者は六祖大師に初まりしも不詳なり、六祖大師及び南嶽の章を傳燈錄にて見よ。後者は德山托鉢上堂及び聯燈會要石梯の章等に問答あり。

皂。襪なり、うまやのれだ。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄 卷上
ど、武陵春色好し、塵世幾人か知る。」

祖
印
語
終

住大元慶元府寶陀觀音禪寺語錄

侍者
惟鳳
編

①山門、海濤澎湃、鐘鼓鏗鏘、是れ入理の門なること莫しや。」喝。

觀音殿、具足神通力、現身三十二、只だ今是れ什麼の身ぞ。」坐具を展べて云く、「衆眼瞞し難し。」

據室、拄杖を拈じて云く、「汝等諸人、此に來つて簇簇たり、立地に箇の甚麼をか覓じ。」杖を擡けて云く、「且く一著を放過せよ。」

法座、向上の一路、不傳不然、幸に自ら無事、各異端を説く。山僧一時

に坐斷し去る。」

提綱、「一向に與麼に去るも、煙水連天、一向に與麼に來るも、塵埃滿面。

直に得たり、去來象を以てせず、動靜心を以てせず、猶ほ是れ普請邊の事、

未だ常情を出でず。山僧昨日、十字街頭に、高く祖師の心印を提げ、世出世間、萬法一印に印定す。

直に是れ法法差なし、今朝白花巖前に、古佛の家風を敷揚し、聞思修より三摩地に入る、底を盡して揭翻す。便ち見る頭頭不昧、一十二面、鼻直く眼横に、三十二身、東倒西播することを。與麼に會得

①山門。山は城市に對して云ふ、城市は俗處なり、山門は真處なり、臨濟録に曰く、「師松を栽ゑて曰く、一は山門の與に境致さなし、一は後人の爲に標榜さ作さん。」

せば、皇恩佛恩、一時に報じ畢んぬ。良久して云く、「天人群生類、皆此の恩力を承く。」

復た擧す、雲門、衆に示して云く、「聞聲悟道、見色明心、觀世音菩薩、錢を將つて胡餅を買ふ。手を放下すれば、却つて是れ饅頭。」拂子を豎起して云く、「者箇は是れ色。」拂子を擧つて云く、「者箇は是れ聲、道作麼生か悟らん、心作麼生か明めん。」拂を後に擲つて云く、「錯つて定盤星を認めしむること莫れ。」

當晩、小參、「一喝賓主を分ち、照用一時に行ず。」喝一喝して云く、「那箇か是れ主、那箇か是れ賓、作麼生か照、作麼生か用。」拄杖を拈じて左邊に安じて云く、「者裏見得せば、賓なれば始終賓、主なれば則ち始終主。」拈じて右邊に向つて云く、「者裏見得せば、賓中に主あり、主中に賓あり。」拈じて中間に向つて云く、「者裏見得せば、賓主混融、照用歷落。」杖を靠けて云く、「舊處に安著せよ、動著することを得ざれ。」

復た擧す、高安本仁和尙、衆に示して云く、「尋常、聲前句後に向つて、人家の男女を鼓弄することを欲せず、何が故ぞ。要且つ聲は是れ聲にあらず、色は是れ色にあらず。」師頷して云く、「聲前句後纖塵を絶す、聲前句後に向つて論ずること莫れ。恠むべし高安多事の老、絲來り線去り精魂を弄ず。」

①雲門。初め睦州に參じて、門扉を閉却せらるるに及んで、脚を折りて省悟し、後、雪峰に參じて嗣法し、雲門宗を唱へらる、惜しい哉、日本には傳はらず、而れども大師の語録今に傳へらる、師は特に言句三昧を得て、妙唱奇絶なり。

②小參。祖庭事苑に「非時の說法之を小參と云ふ、舊説に曰く、「小參は不時に之を講ず、鼓を鳴すこと一通、其の規、大參より約す、故に小參と云ふ、參は交參の義なり、勅修清規に曰く、「凡そ衆を集め開示する、皆之を參と云ふ。」

教僧相訪ふことを謝する上堂、拄杖を拈じて卓一下して云く、「五須彌を擊碎して、人畜草芥甚れの處に向つてか著く。」又卓一下して云く、「四大海を攪翻して、魚龍蝦蟹何を以てか命となさん。山僧、與麼の提持、且く三乘十二分教の中、還つて者箇の消息有りや。」又卓一下して云く、「座間又江南の客あり、樽前に向つて鷓鴣を唱ふることに莫れ。」

上堂、春意融融、春風浩浩。野外の桃花、靈雲の己眼未だ開かざるを笑ひ、簷頭の雨滴、鏡清の物を逐ふて顛倒するを怪む。阿呵呵。會すや、十字街頭酒醉の人、元是れ東村の王大老。

佛涅槃上堂、「胸を摩し衆に告ぐ、鉛刀の刃は、豈に洪鐘を刺るべけんや。柳に雙趺を示す、強弩の末、魯縞を穿つこと能はず。是なることは則ち是なり、寶陀今日且く死馬醫と作る。」拂子を拈起して云く、「紫金光聚、白毫相輝く。從教あれ萬古業風吹くことを。」

上堂、「聲色全眞、見聞不昧。便ち與麼に去るも、大いに未だ眠らざるに先づ魔はれ、未だ飲まざるに先づ醉ふに似たり。拂子を豎起して云く、「者箇は是れ色。」拂を擧つて云く、「者箇は是れ聲。」擲下して云く、「且く錯つて怪むこと莫くんば好し。」

なるか是れ一線道を放たざる。州云く、「萬里崖州。」拈じて云く、「勇三軍に冠たり、氣萬夫に雄なることは、老睦州無きにあらず、只だ是れ未だ勅敵に逢はず、當時箇の佗の與麼に道ふを見て、但だ咳嗽一盤することあれば、者の老漢、身を隠すに地なきことを管取せん。」

上堂、「德山門に入れば便ち棒し、臨濟門に入れば便ち喝す。啞。六月熱せざれば、五穀結ばず。」上堂、玉宇秋澄み、金莖露冷かなり。老胡鼻孔を打失し、今に至つて收拾し上さず。衆中忽ち箇

の收拾し得るもの有らば、山僧伊が與に二十拄杖せん。何が故ぞ。功有る者は賞す。

中秋上堂、萬里秋空淨く、娟娟として桂月流る。寒輝列宿を沈め、皓魄潜蚪を動ず。因つて思ふ馬子父子、玩弄神變、光に隨ひ影を逐ふて羞を知らざることを。休みね休みね、既に然く鏡よりも明かなり、何ぞ用ひん鉤よりも曲れることを。

遠く出でて歸る上堂、「動に作相なし、靜に住相無し、潮滄溟に落ち、月青嶂を離る。忽ち箇の出で來つて、動靜雙べ忘ずる時如何と道ふもの有らば、良久して云く、「果然として一釣に便ち上る。」

開爐上堂、趙州火爐頭無資主の話の公案を擧して、拈じて云く、「趙州年老いて返つて小兒と成る、只だ灰を挑げ、火を弄せんと要す。争か免れん傍人の笑怪することを。然りと雖も此の曲只だ天上に

有るなるべし、人間能く幾回か聞くことを得ん。」

上堂、「風蕭蕭として木葉下る、滴水氷と成つて、飛霜野に徧し。」膝を拍つて云く、「見成の行貨、人の買ふ無し。」

佛成道のの上堂、擧す、世尊云く、「我れ一切衆生を見るに、如來の智慧徳相を具有す、但だ無明煩惱を以て證得せず。」衆を召して云く、「者の老漢没量の罪過有り、山僧許露せんことを欲せず。」下座。「大佛殿に詣して、同じく與に懺悔せん。」

元正上堂、「新鮮の語句、玄妙の機關、寶陀是れ全く無きにあらず、只だ是れ曾て拈出せず。今日三陽交泰、萬物咸く新なり。未だ免れず拈出して諸人に布施し去ることを。」拄杖を拈じて卓一下して下座。

上堂、雪峰・巖頭・欽山の三人、同じく河北に往き、臨濟を禮拜す。路に定上座に逢ふの公案を擧す。拈じて云く、「鷹、兔を搦め、鶴、鳩を捉ふ。

定上座 固に是れ行家の手段、只だ是れ臨濟の處に學得する底、未だ盡く用ふることは能はず。若し能く盡く用ひなば、者の雪峰・巖頭に和して、總に須らく觸體地に著くべし。」

德山。宣鑿と號し、又執金剛と字す、律藏に精通し、性相の諸經に通達す、天皇道悟の嗣龍潭和尚に法を嗣ぐ、壽八十六にして遷化せらる、勅して見性大師と諡せらる。

佛成道。禪林象器箋に曰く

「八相事略の章に佛上堂に五大院の安然五説を出す、(一)二月八日(因果經)、(二)四月八日(方等泥洹經)、(三)三月八日(西域記)、(四)三月十五日(西域記)、(五)八月八日。譯者按ずるに、佛祖統記。正宗記等に二月八日の説を採る、因果經を以て正しと爲す、然るに中華日本は古今十二月八日を用ふ、僧史略に之を會して曰く、「臘月は周の二月なり、故に十二月八日を佛成道と名せる乎。」

雪峰。諱は義存、泉州南安の人、世世佛を奉じ、生れ乍らにして輩茹を惡む、年十二にして慶玄律師に事へ、十七に

上堂、拄杖を拈じて云く、「山僧尋常、敢て諸人に孤負せず。」拄杖を拈じて下座、大衆一時に散じ去る。

上堂、擧す、雪峰和尚、衆に示して云く、「盡大地是れ解脱門、手を把つて拽けども伊れ入らず。」拈じて云く、「大小の雪峰、甚の死急をか著く、盡大地是れ解脱門、誰か門外に在る。」

上堂、拂子を拈じて云く、「即心即佛、遼天の俊鶴、非心非佛、皮を剥き骨を出す。不是心、不是佛、不是物。白日青天、神出鬼没、畢竟如何。」良久して云く、「今朝四月一。」

浴佛上堂、情と無情と本一眞、大千何れの地にか纖塵を著けん。朝來露濕ふ薔薇の錦、洗ひ出す毗盧の清淨身。

寶陀語終

住日本國相模州巨福山建長興國禪寺語錄

侍者崇喜編

師、正安元年十二月七日入院す。三門を指し、「火後門無し。」十方壁落なく、四面又門無し。彈指一下して云く、「者裏入得す、別は是れ乾坤。」據室、拄杖を拈じて、「者裏道ひ得るも也た打し、道ひ得ざるも也た打す。百練の金、更に須らく火に入るべし。」

山門疏、肘臂只だ内に曲るべくとも、家醜何ぞ須ひん外に揚ぐることを。既に然く遮掩し及ぼさず、從教あれ此の語大に行はるることを。

法座、頂顛の機、最初の句、立地に構得す、妨げず峭措なることを。「法座を指して云く、「啞、須らく我が上頭に向つて沙を拖き土を撒するを待つべし。」

陸座、拈香して、「此の香、至尊至貴、瑞たり祥たり、本一身にして以て群靈を化育す、根至妙にして萬物を出生す。恭しく爲に

①侍者、釋氏要覽に云く、「侍者は即ち長老の左右なり、」肇云く、「己を恭ひ命に順する給侍の者なり、」菩薩從兜率下生經に云く、「侍者八法を具す、一に信根堅固、二に其の心進を覓む、三に身に病なし、四に精進、五に念心を具す、六に心橋慢せず、七に能く定意を成す、八に聞智を具足す。」
②崇喜、見山、諱は崇喜、佛光國師の法嗣、南禪寺に住す。
③正安元年、建長十代となる、九代は桑田道海、十一代は西潤子曇。

今上皇帝聖躬 萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。恭しく願はくは、金輪永く御して中、天日月の明を掲げ、玉燭常に調へて大地山河の壽に同じからんことを。」

次に拈香して、「本根秀異、枝葉繁昌、膏澤を天潢に沛し、清陰を東國に布く。吏部親王征夷大將軍洎文武官僚の爲に、同じく祿算を増し奉る。伏して願はくは、乃ち王室を心として益維城の功を懋め、弘く佛乘を護して靈山の記を忘れざらんことを。」

次に拈香して、「靈根深固、問氣清明、恩蔭を四方に垂れ、芬芳を萬世に繼ぐ。大檀越相模太守の爲に祿算を増し奉る。伏して願はくは、道佛祖に同じく、深慈を以て黎元を拯濟し、徳乾坤に合ひ、至仁を以て社稷を鎮隆せんことを。」

次に拈香して、「此の香、些子の氣息なし、且つ地に炙し天に薫じて、前住大唐慶元府阿育王山廣利禪寺 頑極老和尚に供養して、用つて法乳の恩に醗いんことを要す。」

提綱、「法幢を建て、拄杖を拈じて一下して云く、「宗旨を立す。」又卓一下して云く、「法幢已に建て、宗旨已に立せば、極微塵刹海、只だ一毫端に在り、盡無量劫、悉く彈指頃に歸す。塵塵不昧、法法全

●萬歳。古人酒を飲めば必ず歳を上り、慶を稱して萬歳と云ふ、上下通じて慶賀の辭とす、唐の末に至るも尚ほ然り、其の後、専ら天子に限りて稱することとなり、又定めて朝制とせり。
●天潢。皇族をいふ。
●吏部親王。久明親王なり。
●相模太守。北條貞時公を指す時の執權なり。一山は貞時の請するところなり。
●頑極。諱は行彌、臨濟禪師より十七世にして即ち一山國師の本師なり、癡絶沖に嗣ぐ。

く彰る。帝網珠の如く交光相羅る。師子兒の如く遊行無畏、豈に去來の相有らんや。曾て何ぞ彼此の分あらん。便ち見る拈花付法、笑裏の刀鎗、面壁安心、口頭の人事、衣盂傳授、當仁を屈辱す。棒喝交馳、笑を作者に取る。自餘弓を張り箭を架し、主を列し賓を分つ。正に是れ空を鑿ち端を造す。胡を欺き漢を瞞ず、畢竟太平の時世、甚の干戈をか説く。所以に山僧、萬里西來、只變に素面相呈して、更に勞攘なし。然も是の如くなりと雖も、「卓一下して云く、「此の身心を將つて塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩を報ずと爲す。」

●干戈。干は盾、戈は矛にて、戦争の意に用ふと、詩經に出づ。
●首山。諱は省念、姓は狄氏、萊州の人なり、業を郡の南禪に受く、徧く叢席に遊び、遂に風穴の法を嗣ぐ、語録一卷あり。

復た擧す、首山和尚、衆に示して云く、「佛法は國王大臣有力の檀那に付囑す、人人燈燈相續いで今日に至る。且く道へ、者の其慶をか續ぐ、須らく是れ迦葉師兄にして始めて得べし。」拈じて云く、「首山和尚、靈山の付囑を發揚す、固に是れ光明、要且つ只だ是れ一期の方便なり。争か如かん今日大力量の人有りて、親しく記前を承けて、二千年後に向つて、日本國內に於て、此の一燈を續ぐに。直に得たり、今に輝き古に輝くことを。諸人還つて見るや、若し又見ずんば、山僧更に爲に點出せん。靈山の佛法王臣に付す、今日扶桑話又新なり。一道の恩光塵刹に徧し、東溟天曉けて金輪を涌す。」

當晚小參、問答罷んで乃ち云く、「古今の天地、古今の日月、古今の人倫、山は是れ山、水は是れ水、僧

は是れ僧、俗は是れ俗、是法住法位、世間相常住。端なく老胡西來、疆を分ち界を列ね、悟を説き迷を説く。一地裏の人を引き得て、東を喚んで西と作し、南を指して北と爲さしむ。殊に知らず、扶桑日輪、依然として東より出でて、大洋海水、一日兩潮なることを。是の故に山僧、未だ唐土を離れず、時時現前の龍象と交參す。身海東に到つて、歩歩圓通の境界を離れず、自然に東西異ならず、賓主歴然。便ち與麼に會するも、猶ほ是れ平常相見、且く出格の一句、作麼生か道はん。「拄杖を拈じて、卓一下して云く、「鶴は飛ぶ千尺の雪、龍は起る一潭の水。」

- ① 葉子。「さつす」さよむくせなり、文書のこご。
- ② 兩片皮。口なり。
- ③ 臘八。十二月八日なり、此の日を以て大聖釋尊は菩提樹下に於て、一見明星大悟せらる、故に今に至る、禪門は十二月一日より八日の鷄鳴に迄、尅期辨道の規を立つ。

復た擧す、僧、永明潛禪師に問ふ、「祖師西來、箇の什麼をか傳ふ。」潛云く、「箇の策子を傳ふ。」僧云く、「恁麼なるときは則ち心外に法有り。」潛云く、「心内に法無し。」拈じて云く、「好箇の策子、只だ是れ年代深遠、諸方策子裏の事を將つて錯つて傳へ了れり。今夜忽ち人有り、和尚西來して箇の什麼をか傳ふと問はば、只だ他に向つて道はん、箇の口訣を傳ふと。又和尚乍ち來つて言語通ぜず、如何が口訣を傳へ得んと問はば、瞎漢、我が兩片皮を鼓せんと要せば、什麼を作すにか堪へん。」

臘八上堂「諸佛時時出現、星河夜夜天に在り、剛ひて雪山成道と謂ふも、分明に誑惑の言と。只だ諸人晝日を見、夜星を見るが如きんば、還つて悟底の消息有りや也た無や。禪床を拍つて云く、「梅

花の香鼻を撲つことを得んと要せば、也た須らく徹骨一番寒なるべし。」

臘月半、公帖を受くる上堂、拄杖を拈じて云く、「得處分明、拈じ來つて便ち用ふ。」畫一畫して云く、「佛祖の命根を斷じ、卓一下して云く、「衲僧の鼻孔を穿つ。半合半開、全收全放、落落たる神珠影留めず、輝輝たる寶劍光初めて動く。便ち是れ福山爲人の處なること莫しや。」卓一下して、喝一喝、上堂「纔に正月一を見れば、又旬日を過し了れり、人事蠟毛多く、光陰劈箭疾し。無位の真人、汝が面門に在つて、時時出入す、還つて曾て證據すや也た未だしや。若し未だ證據せずんば、山僧汝が爲に點出せん。」

元宵上堂、拂子を豎つ、「只だ此の一燈、傳來已に久し、十虚を融接し、九有を照明す。即今雪月交輝き、星河竝に耀く。甚に因つてか瞎眼の師僧、只だ光影裏に向つて走る。」拂子を以て、一吹擲下して云く、「山僧伊が爲に吹滅了也。」手を伸べて云く、「暗中毛手を伸出す、還つて辨得すや。」良久して云く、「既に辨し得ず。」手を縮めて云く、「天寒且く藏めて懷袖にす。」

① 首座を謝する上堂「無絃と號す」擧す、黃檗、南泉に在つて首座と作る、一日鉢を捧げ、南泉の位に在つて坐す。南泉、堂に入つて見て乃ち云く、「長老甚麼の年中にか行道す。」

- ① 無位真人。「僧、臨濟に問ふ、赤肉團上に一無爲の真人あり、常に汝等諸人の面門より出入す、云云」臨濟語錄に出づ。
- ② 九有。三界九地、之を九有と云ふ。
- ③ 首座。第一座、禪頭、座元、首衆皆同じなり、蓋し大衆の首座たるより名く。

泉云く、「猶ほ是れ王老師が兒孫、下に在り去れ。藥遂に自位に歸つて坐す。くも停らず、一賓一主自ら分明。寥寥たる此の曲今誰か繼ぐ、琴無絃を奏して韻更に清し。」

因に「看經上堂、」藥山、僧の看經するを許さず、平白人に檢點せらる。福山、僧を普請して看經せしむ、特地に佗人を檢點す。道路各別にして、家を養ふこと一般なり。「拄杖を拈じて卓一下して云く、「箇裏縞素の眼を開かず、牛皮も端的に也た須らく穿つべし。」

因に「普請上堂、」微笑、拈花、安心、面壁、書偈、傳衣、陞堂、拈席、擊叉、打地、般土、拽石、打鼓、輦毬、搖鈴、舞笏、金圈を擲ち、栗棘を抛ち、棒喝交馳、電の撃つが如し。山僧冷地に看來れば、是れ普請邊の事なりと雖も、也た些子の奇特あり。且く道へ、甚の奇特か有る。「拄杖を拈じて卓一下して云く、「會すや、大家力を著けよ。」

因に江湖兄弟、頌を呈して挂搭を求むる上堂。擧す、古德、衆に示して云く、「南來の者も三十棒、北來の者も三十棒、然も是の如くなりと雖も、宗乘に當らず。」拈じて云く、「古德の一期、要津を把定す、若し後語なくんば、自ら出身の路無けん。」

●頌に云く、「互換の機暫

●頌。偈頌云ふ、梵には伽陀、又玄妙と譯す。

●看經。「禪家には讀經を云ふ」

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

●普請上堂。普く大衆を請じて

福山、線道を放開し、儼に容す身を轉じ氣を吐くことを。汝若し一句を道ひ得て、個儻分明ならば、

便ち明窓下に安排せん。然りと雖も、還つて宗乘の中の事に當得すや。「喝。

典座を謝する上堂、「栗棘蓬、鐵餞餉、人の取つて巧に安排する有らば、横吞堅咬するに一任す。忽

然として咽喉を塞斷せば、虚空の失笑することを引き得ん。且く道へ、箇の什麼をか笑ふ。」手を展べ

て云く、「了。」

浴佛上堂、幸に自ら清平の世界、何を用つてか造妖捏怪する。天を

指し地を指して尊と稱す、力を以て仁を假る者は霸王。福山、今日佗を

成禱す、香水洗ひ來つて幕面に唾す。

上堂、十五日已前は、外放しせず、十五日已後は、内放出せず、正當十

五日、出にあらざ入にあらざ、内に非ず外に非ず。釋迦彌勒惡口闍提、文殊普賢屠兒の魁膾。「良久し

て云く、「會すや、若し也た會せずんば、九十日中、須らく子細にすべし。」

上堂、擧す、古德、衆に示して云く、「結夏已に半月、水牯牛作麼生。」又「古德云く、「結夏已に半月、

寒山子作麼生。」拈じて云く、「水牯牛と寒山子と、頭角殊なりと雖も、鼻孔相似たり。結夏已に半月、

常露迥迥地、認著すれば依然として還つて不是。」

上堂、諸聖を求めず、己靈を重んぜず、進前路無く、退後憑ること無し。深淵に臨み薄氷を履ひ、

茶陵箇の村山主あり、驢に騎り橋を過ぎて一擲を喫す、錯つて山河を認めて眼睛と作す。良久して云く、「彩は觀家に奔る。」

上堂、擧す、應庵和尚偈有り、衆に示して云く、「金錫遊を罷めて留めて壁に靠く、草鞋乾晒して秋風を待つ。檀那長夏深く思省す、看よ是れ平生底の功か有る。眞實の行藏宜しく保惜すべし、虚頭の伎倆疾く消鎔せよ。老僧是れ多饒舌にあらず、諸人と氣味同じからんことを要す。」師云く、「五湖の龍象此に相從ふ、志を立てて應に須らく祖風を繼ぐべし、世事無窮宜しく自ら省すべし。玄關未だ透らず合に功を加ふべし、橋慵只だ精勤を用つて攝し、頑鈍唯だ猛烈を將つて鎔す。期九旬に滿つ、如し少驗あらば、身心の險は鐵圍と同じ。」

太守の請、法光寺の爲に佛日庵に就いて、千部法華經を慶懺する陸座。拈香して云く、「此の香枝葉全く無し、唯だ眞實のみ有つて、六銖鈔しと雖も、價直娑婆。法光寺杲公禪門の爲に覺路を資嚴し奉る。伏して願はくは、此の一乘を悟つて、即ち佛記を受け、此の餘慶を積んで、裕を後昆に垂れんことを。」

- ①鐵圍。「テツチ」を讀む、鐵圍山のこゝ、梵に斫迦羅、又は灼羯羅等と云ひ、輪山と譯す、彌勒、文殊、阿難等の大菩薩衆と讚教を結集せし地なり。
- ②法光寺。北條時宗の法諱なり。
- ③止啼黃葉。涅槃經第二十嬰兒品に曰く、「彼の嬰兒啼哭する時の如き、父母即ち楊樹の黃葉を以て之に語りて曰く、啼くこゝ勿れ、啼くこゝ勿れ、我れ汝に金を與へん」と、嬰兒見りて眞金の想を生ぜん、便ち止めて啼かず」と出づ。
- ④三周。法、譬、因を云ふ。
- ⑤七喻。火宅、窮子、藥草、化城、鬘珠、頂珠、醫子。
- ⑥五障龍女。五障とは輪王と云ふ

提綱に云く、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず。」拄杖を拈じて、卓一下して云く、「者裏根源に洞徹せば、便ち見る釋迦老子、四十九年、三百餘會、黃と説き黒と道ひ、東を指し西を劃し、半滿偏圓、性相事理、總に是れ止啼の黃葉なることを。明眼人前、一笑に直らず、端なく靈山會上に道ふ、箇の十方佛土中、唯一乘法、無二亦無三と。向上の一著を提持して、大事因縁を發明す、權實大小、悉く圓融することを得て、佛の智見に開示悟入せしむ。三周授記、七喻明玄、乃至逆を造る調達も亦善提を證し、五障の龍女、即ち成佛することを得。事妙ならずといふことなく、理圓ならずといふこと無し、檢點し將ち來れば、衲僧門下、略些子に較れり。故の我が法光寺、親しく此の時に於て、茲の妙義を聞き、大願力に乗じて、人間に示現し、至妙を一心に窮めて、十如を當念に了す。珍好大車等を以て諸子に賜ひ、化城寶所を以て群迷を誘進す、弘く大法を持して、藥上藥王の如く精進明達、淨藏淨眼の如し。所以に深仁厚澤、黎元に沾洽し、盛德豐功、今古に照耀す。化緣既に畢つて出沒自由、故に今孝子順孫、鴻業を嗣昌し、亦妙圓の法に依つて用つて追遠の情を伸ぶ。僧に命じて此の經を誦閱せしむ。圓滿千部、此の上善を以て、圓常を助證す。然りと雖も、諸人還つて法光寺、只だ今行履の處を知るや。道ふことを見ずや、是法住法位、世間相常住。卓一下す。

復た擧す、天台智者大師、大蘇山に於て法華經を誦す、「藥王本事品の是眞精進、是名眞法供養如來」といふところに至つて、豁然として大悟す。靈山の一會、儼然未散なることを見る。今日太守、僧に命じて此の經を披誦すること千部、法光寺の爲に冥福を資嚴す。宿熏忘ぜず、一問千悟せん。且く道へ、天台と是れ同か是れ別か、輒ち山偈を成して大衆に擧似す。靈山の一會未だ會て散ぜず、落落たる玄音妙蓮を演ぶ。己眼豁開して親しく見了る、青山綠水自ら依然。了に同互無く、適かに正偏を絶す。今古分明に目前に在り、瑞鹿峰頭良夜の月、清光長へに照して性天圓なり。

上堂、擧す、黄檗、衆に示して云く、「汝等諸人、盡く是れ啗酒糟の漢、與麼に行脚せば何れの處にか今日あらん。還つて大唐國裡に禪師無きことを知るや。」時に僧有り、出でて問うて云く、「只だ諸方徒を匡し衆を領するが如きんば、又作麼生。」檗云く、「禪無しとは道はず、只だ是れ師無し。」拈じて云く、「黄檗老漢龍韜豹略、油幢に宴坐して暗鳴叱吒、萬人氣索し、甚に因つてか者の僧に輕輕に一拶せられて、便ち見る手忙はしく脚亂るることを。且く道へ、利害什麼の處にか在る。」

典座を謝する上堂、「有漏は依離、無漏は木杓、小乗は錢貫、大乘は井

①天台智者大師。天台山の修禪寺に住す、荊州の人、陳氏云ひ、諱を智顛と云ふ、釋尊一代の聖教を判釋して五時八教を以てす。

②正偏。正位と偏位のこと、洞山の五位に詳かなり。

③禪師。二儀あり、一には天子有徳の禪僧を褒賞して徽號を賜ひ、二には凡ての禪僧を敬稱して云ふ、儀堂白工集に曰く、「禪師號は神秀を大通禪師と賜せしに初む、又本朝にては建長寺の蘭溪禪師に初む、

索。然も閑家具なりと雖も、應用著くるに處有り。且く道へ、誰か是れ善く用ふる者ぞ。」良久して云く、「瀉山淨瓶を擧し、普化鈴鐸を拈す。」

上堂、拄杖を拈じて、卓一下して云く、「徳山拈し出さず。」喝一喝して云く、「臨濟用ひ得ず、福山餘力を勞せず、且く機に中り、的に中ることを要す。」卓一下し、喝一喝して云く、「擲地の金聲瓦礫の如し。」

上堂、「今朝七月五、一雨梓暑を洗ふ、蟬聲古樹の頭、蛩韻青莎の下、達磨は只だ箇の不識を道ふ、老盧は只だ箇の不會を道ふ。是れ汝諸人、頭を聚めて商量し、意を恣にして妄想す。」膝を拍つて云く、「且く驢を認めて馬と作すこと莫れ。」

上堂、「一葉落ちて天下秋なり、一塵起つて大地收る。釋迦老子事を曉らず、只管に黄と説き黒と道ふ。達磨大師分に安ぜず、來つて赤縣神州に遊ぶ。」良久して、「將軍藍田の虎を射得して、細に看れば元來是れ石頭なることを。」

閏七月旦、檀那莊田を増給するを謝し并に雨を祈る上堂。「者の片田地、人人分有り、須らく契券分明なることを得べし。方に無明種を下し、

頓悟要門論に曰く、「客あり、問うて曰く、弟子未だ律師。

法師・禪師の何者か最勝なるを知らず、師曰く、夫れ禪師は其の樞要を撮つて直に心源を了じ、出沒卷舒、縱横物に應じ、成く事理に均うして頓に如來を見、生死の深根を抜き現前三昧を獲。若し安禪靜慮せずんば、道裡に到りて纒に忙然たるべし云云。」と出づ。

④典座。永平大清規に曰く、「夫れ典座の一職は衆僧の辨食を掌るものにして、俎を以て道心となす云云。」雪峰は篋籠木杓を以て歴參し、到る處、典座の職を勤む。

⑤瀉山淨瓶。淨瓶とは釋氏要覽に「梵には軍犀、此に瓶と云ふ、常に水を貯へ身に隨ひ以て手を淨む云云。」百丈一日、會下に向つて淨瓶を指して問うて曰く、「喚んで淨瓶と

三毒の果を結ぶべし、更に慈雲密布、甘澤普く洽ふことを得、根莖大小、悉く潤を蒙ることを得、然して後成熟、以て彼の飢虚を濟ふて、咸く飽足せしむべし。所以に古者に道く、心地諸種を含み、普雨悉く皆萌す、頓に花情を悟り已つて、菩提果自ら成ずと。福山與麼に道ふ、慚を知り媿を識る者有ること莫しや。如し無くんば、「拄杖を拈じて卓一下して云く、「三年一閏、五年再閏。」

副寺を謝する上堂、「一見便見、思算するに勞せず、兩箇五百、元是れ一貫。」良久して、「秋風秋雨長空に滿つ、落葉塔前紅片片。」

相訪ふを謝する上堂、擧す、慈明和尚、衆に示して云く、「颯颯たる涼風景、同人寂寥を訪ふ。茶を煮る山上の水、鼎に焼く洞中の樵。」拈じて云く、「大小の慈明、常住物を將つて、私己人情と作す、福山は即ち然らず。颯颯たる涼風景、同人寂寥を訪ふ、相看て兩つながら語無し、唯だ道情の高き有り。」

前住癡鈍和尚、訃音至る上堂、「昔年山中より來る、滿前是れ塵埃、去年山中より去る、曾て跣歩を移さず。去去實に去らず、來來實に來らず、萬里一天雲霧開く。辭世の偈に云く、「雲霧都べて卷く、萬里一天。」諸人者裏に向つて癡鈍和尚を見れば、直に是れ未だ見んと要すや。「拂子を豎てて云く、「些子無明の火、光を分つて九垓に徧し。」

上堂、「雨蕭蕭たり紅葉の下、鴈長空に叫び、蟲永夜に吟ず。觀音大士、渾身を賣却す、甚に因つてか人の價を酬ゆること少き。福山も也た端なく今日貴く買つて賤く賣るに似たり。」拄杖を卓して下座。

中秋、都寺を謝する上堂、「月朔月旦、月圓月半、甚に因つてか今宵人争ふて賞翫す。光境未だ會て忘ぜず、眞月何に由つてか見ん。見んと要すや。「拂子を以て圓相を打して云く、「是れ寒山一片の心にあらざれば、便ち是れ石窓の漏燈盞。」

重陽、書記を謝する上堂、逢ふことを欣ぶ佳節是れ重陽、籬落西風菊又黄なり。因つて惜しむらくは陶潛千載の後、半は煙草に和して秋光を老いしむ。山僧與麼に道ふ、忽ち箇の出で來つて、和尚、禪道佛法を説かず、却つて四六文章を説くと道ふもの有らば、晴漢儼豈に道ふことを見ずや、詩は會人に向つて吟すと。

作すことを得ず、喚んで甚か爲す。「華林上座曰く、「喚んで木椀をなす可からず」と、丈更に滄山典座に問ふ、山、淨瓶を覆倒して出で去る云云。「滄山警策に出づ。

●普化搖鈴錄。盤山寶積禪師に法を嗣ぐ、師常に鈴鐸を振ふて歌うて曰く、「明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、四方八面來や旋風打、虚空來や連架打」。後世鐸を改めて尺八に成す、今時の普化僧、一名虛無僧と云ふ之れなり。

●祈雨。勅修清規に曰く、「祈晴、祈雨、祈雪、遣蝗、禳日蝕、禳月蝕などの疏語あり、凡そ災異あれば、別ち祈らざらば云ふことなし」と。楞嚴回向に「風調雨順民康樂」と出づ。

●副寺。勅修清規に曰く、「古規に庫頭と云ふ、今諸寺にては櫃頭と云ふ、北方にては財帛と云ふ、即ち常住の錢帛米麥を掌りて出入時に隨つて厝に上す云云。」

●慈明。諱は楚圓、姓は李氏、金州の人なり、年二十二歳にして出家す、汾陽に法を嗣ぐ、語錄一卷あり。

●都寺。永平大清規に曰く、「古時は鑑寺のみ、近時都寺と稱するは即ち鑑寺のことなり。」即ち副寺は庫頭のことなり。

●書記。慈覺の龜鏡文に曰く、「衆僧の爲めに、翰墨を典る故に書狀あり、勅修清規に曰く、「書記は即ち古規の書狀なり、文翰を職業とす云云、禪苑清規に「山門の書疏を主執す」とあり。

書記、藏主を謝する上堂、一字畫を著けず、八字兩ノ無し。大藏と小藏者裏より流出す。明眼の衲僧辨別し難し。會すや、大唐國裏鼓を打てば、日本國裏に鉢を展ぶ。「藏主は唐人」

開爐上堂、「雪嶺六年、少林九年、死柴燄なく冷灰燃えず。建長今日別に方便を作す。拄杖を拈じ、撥一撥、吹一吹して云く、「汝等諸人、照顧せば面門を燦破せん。」卓して下座。

太守請ふ、地藏寶殿を慶讚し、五部大乘經を供養す。提綱、「正眼洞明、十虛無間、大機圓應、萬象俱に融ず。妙に聲色の先に超え、迥かに思議の表に出づ。即心即佛、塵塵刹刹、名機を絶す、非心非佛、焯焯煌煌、向背に非ず。此を以て諸法を建立し、此を以て群迷を開悟す。金剛王劍の如く、之を揮へば則ち魔外踪を潛め、獅子筋琴の如く、之を撫げれば則ち群音頓に絶す。所以に道ふ、大人、大見を具し、大智、大用を得、一毫端に寶王刹を現じ、微塵裏に坐して、大法輪を轉す。物物全く彰れ、頭頭味からず。茲の名刹を眷みるに、東州に雄冠たり。始め最明寺、基を創め、大覺師、法を開いてより、竺嶺の眞風再び振ひ、少林の五葉重ねておほゆ。曩し劫燒の餘に因り、未だ宏規の舊に復せず、大檀那太守、佛囑を忘れず、益願輪を運し、紺殿崇成、

設し、常に湯茶香燭を備へて延迎す云云。

①地藏。地藏本願經に出づ、主として六道の迷路に立ちて、苦衆生をして濟度す、故に六道能化の地藏尊とも云ふ、又凡ての願力を成就せしむ、故に願王尊とも云ふ、建長寺の大殿に千體地藏を安置す。

②竺嶺。天竺の靈鷲山なり。

③少林五葉。達磨大師傳法の偈に曰く、「吾れ本此の土に來りて、法を傳へて迷情を救ふ、一華五葉を開いて、結果自然に成す。」

像設嚴備、金碧焜耀、棟宇翬のごとく飛び、高脊空に横ふ。璇題月を納る、延いて地藏千身の妙相を奉じ、五部の大乘眞證を供養す。賢聖交參し、神龍翊衛し、皇圖を有永に固うし、至化を無窮に敷き、四生九有、咸く苦輪を脱し、萬姓六軍、同じく善域に躋り、長者の布金を笑つて、未だ奇特と爲す。況んや賢子の挿草、豈に是れ作家ならんや。直に見者聞者をして、悉く圓常を悟らしむ。此生他生、長に福報を臻さん。然も是の如くなりとも雖も、只だ功自ら功に非ず、道常の道に非ず。全く數量を超えて見聞に落ちざるが如きんば、畢竟如何が話會せん。妙徳空生齊しく稽首し、千萬億載恩光を仰ぐ。「復た偈を説いて曰く、「偉なる哉世に過量の人あり、乃ち能く過量の事を成就す。是れ積劫に於ても諸佛に事へ、親しく諸佛の授記を承け來つて、大願力を以て世間に生ず、威徳大人の相を示現して、佛祖向上の事を究明す。大心弘く護す諸佛乘、無爲の中に於て有爲を示す、無邊勝妙の事を建立し、寶殿を幻成して極めて嚴麗、璀璨たる光明心目を耀す。地藏大士恒に端居、金錫靈珠群品を度す、一身の中に於て千身を現じ、千身還つて一身に於て攝す。色に非ず相に非ず虚空に非ず、大に非ず小に非ず差別に非ず。光帝網の相交羅するが如く、重重涉入して廻互無し、亦知る五部の大乘典、無説無聞無所證、無聞無證の中に於て、無作の功德力を顯示し、普く正法を常に流行せしめ、救世護國悉く安寧、

④翬。雉子の一種なり。

⑤翊。翼と同じ「たすく」なり。

⑥賢子。予は漢書にある于定(ウテイ)國も、その父子公も共に賢明にして、定國は丞相となれり、その故事よりいふ。作家。禪門にては斯道に老熟せし人を呼ぶに用ふ、臨濟錄に「作家戰將」さ出づ。

名門福慶陪綿綿、德澤滂流區宇に徧く、壽岳穹崇禍海深し、永固基を拜して勳業を茂す。此を以て先世の魂を升濟し、勝樂土中佛位に登る。世出世間俱に了了、缺なく餘なく亦盡なし、只だ此の無盡亦無盡、三際に彌綸し十方に亘る。東大海水常に渺瀰、扶桑日輪恒に烜爛、我れ今讚揚亦是の如し、百千萬劫終極なからん。」

頭首の乗拂を謝する上堂、廣庭の風月夜遅遅たり、韶濩雲英迭に奏する時、萬象森羅齊しく耳を側つ、至音の端的誰か知ることを許す。

佛涅槃上堂、雙林樹下手胸を摩す、死眼睜開又脫空、生滅有無何を用つてか説かん、年年二月是れ春中。

上堂、乍ち暖乍ち寒、一晴一雨、花空庭に落ち、鶯綠樹に吟ず。毗盧の師、法身の主、知んぬ他は是れ真か是れ假か。眼を眩得し來れば、劍去つて久し矣。

頭首の乗拂を謝する上堂、説の時黙、默の時説、電を掣き雷を轟す、風を飄し雪を灑ぐ。舜若多神笑つて點頭、憍梵鉢提驚いて舌を吐く。禪興の無及和尙を謝する上堂、擧す、趙州、茶菓を訪ふ、拄杖を携へて法堂に於て東より西に過ぐ。莫云く、「甚麼をか做す。」州云く、「水を探る。」

莫云く、「我が者裏一滴も又無し、箇の其麼をか探る。」州、拄杖を靠けて便ち出づ。師云く、「一人は武を奮つて城を攻め、一人は關を開いて敵を延く。則ち勝敗を分たずと雖も、未だ免れず刀鎗徧地なることを。今日無及和尙到來、福山只だ是れ尋常の笑語、更に餘事なし。何が故ぞ、元是れ屋裏の人。」

新命淨妙、高峰和尙を謝する上堂、拄杖を拈して云く、「巴鼻あり巴鼻沒し、是れ尋常に非ず、亦差異に非ず。金烏夜半高峰に上り、泥牛を驚起して大地を耕さしむ。只だ今淨妙國中に向つて、深く、蒺藜を種ゑ去る、諸人後五日、東行西行、大いに須らく子細にすべし。」拄杖を卓して下座。

解夏上堂、「蠟人の水、鵝護の雪、竺嶺二千年、建長九十年、還つて諸譌の處有りや也た無や。」良久して、「瞿曇面皮黄なり、歸宗眼睛赤し。」開爐上堂、二千年前の火種、多くは是れ胡挑亂弄、福山香匙火筋、諸人切に忌む妄りに動ずることを。何が故ぞ、忽ち冷灰豆爆を撥著するが若き、照顧せば眼睛鼻孔を打失せん。

正旦上堂、一年三百六十日、今朝正に是れ正月一、一、二を生じ、二、三を生じ、三、萬物を生じ、萬物既に生じて時和し歳成る。蒲團靜に依つて餘事なし、永日寥寥太平を謝す。

頭首。佛家に東序西序あり、恰も朝廷の文武兩官の如し、中に就いて西序は正に頭首を指す、明極禪師曰く、「參請多く叢林の熟者を以て西序に歸せしめ、之を頭首と云ふ」あり。

乘拂。拂子を拈して説法するの式あり、之を云ふと勅修清規に出づ。

韶濩。韶はうるはしいの意にて、虞舜の樂を云ふ、濩はなげれるの意、布濩。

法身。天台では法身を山門派で「ほつしん」といひ、寺門派で「ほふしん」といふ。

舜若多神。祖庭事苑に主空事と譯す、楞嚴經に曰く、「舜若多神は身なくして觸を覺ゆ云云。」

憍梵鉢提。釋尊在世の五大弟子の一人なり。

高峰。顯日、佛光無學元に嗣ぐ。

蒺藜。菱(ひし)なり、鐵蒺藜などいひつて、近づき難きをいふ。

蠟人水。この解は前輯にあり之を略す。

譌。訛に同し。

歸宗。智常なり。

上堂、目を澄げば韶華是れ二旬、梅顛柳眼芳新を闘はしむ。君に勤む光陰の好きに負くこと莫れ、畢竟光陰人に負かず。

上堂、^① 冉冉として春光暮る、茫茫として煙草緑なり。各人永牯牛、溪山隨處に牧す。收放時の宜

しさを要し、水草飽足せんことを要し、蹄角分明ならんことを要し、性氣

純熟せんことを要す。苗稼を犯さしむること莫れ、^② 根觸を亂さしむる

こと莫れ、一朝鞭索忘じて更に驅逐するを勞せず。露地月明に臥す、請ふ

末後の句を續げ。

雨に因る上堂、纒に結制を見又五日を過ぐ、修證即ち無きにあらず、

染汗即ち得ず。何となれば、蒼頭滴滴、分明歴歴。

方丈得月樓成の上堂、^③ 毗耶詞を杜づ、風光輕く漏泄す。^④ 彌勒彈指、

門戶關防を缺く。福山我が諸人を勞して、茲の丈室を成す。六窓玲瓏、一

室虛白、簷楹水に近し、良宵偏に得たり月の先づ臨むことを、欄檻雲に連

り、青漢自ら疑ふ星の摘む可きことを。總に是れ現成の門戶、本地の風

光に非ずといふことなし。直に見者聞者をして、心開き目明かならしむる

も、只だ是れ別に一關有り、却つて諸人玄微盡くるに及ぶ處に向つて、撈

して透脱し、撈し得て透ら教めんと要す。福山却つて汝に棒を與へて喫せ

しむ、既に撈得透す、甚に因つてか却つて又棒を喫す。豈に道ふことを見

ずや、老僧笑つて指す猿の啼く處、更に靈踪の上方に在る有り。」「玄關上

方の二扁有り。』

東福 山叟和尚、訃音到る上堂、^⑤ 慧日峰前一機を露す、翻身撈到す五

須彌、照天の夜月光輝滿つ、廓爾として無依獨り歸る。此れ猶ほ是れ東福

山叟和尚、當面に人を謾する底の一著、若し是れ末後全提ならば、下座同

じく靈前に詣して分明に聽取せん。」「辭世の偈、照天夜月、無依獨り歸る」

の語有り。』

新舊 直歳を謝する上堂、古に道く、終日茫茫那事か妨げなきと。古

人與麼に道ふ、也た是れ耳を掩ふて鈴を偷むと。山僧三日圓覺を過ぎ、兩

日建長に來る。毎日茫茫、東奔西走、眼睛鼻孔一時に打失し了れり。如何

が箇の妨げなき底の道理を説かん。然りと雖も、東籬を折き西壁を補ふ、

前後各其の人あり、若し是れ那事ならば、自然に總に妨げ得ず。

圓覺に住して、建長を退く上堂、五載住山補ふ所無し、孤踪奈すべき閑雲に似たることを。一家

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄 卷上

指一下すれば、樓閣門開く、善財得入すれば、樓閣閉づ、百千萬億の樓閣を見れば、一の樓閣毎に一彌勒あり、並に一善財あり、而して前に在つて立つ。詳しくは舊譯華嚴教五十八に出づ。

⑤ 山叟。諱は慧雲、佛智禪師と謚す、聖一に嗣ぐ、正安二年七月九日寂す、正覺菴に塔す。

⑥ 慧日峰前。慧日山のこゝ、東福寺の山號なり。

⑦ 直歳。正字通に直は當なりと蓋し一歳中、幹事の職に當る故に云ふ、僧堂清規に曰く、「直歳は年中寺内の修理を掌る、門窓牆壁を修補し、動用の什物道具器具を修換し、山林の竹木田園の栽種を提擧す」とあり。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄 卷上
の桃李春色を同じうす、畢竟元彼此の分無し。

建 長 語 終

兼住相模州瑞鹿山圓覺興聖禪寺語錄

侍 者 仁 恭 編

師、^①正安四年十月十一日に於て入院す。山門を指して、「盡大地是れ圓覺の伽藍。」左右を顧視して云く、「爾既に入作するに門なし、今日爲に線路を通ず。」喝。

佛殿、光明藏中、眼眼厮覷る、坐立儼然、彼我異なるなし。「坐具を展べて云く、「何を妨げん自ら倒れ自ら起つことを。」

據室、汝が命を放ち、汝が氣を通ず。「拄杖を拈じて云く、「且く道へ者箇是れ甚麼ぞ、擬議不來ならば、「拄杖を以て左邊を過して云く、「且く一壁を過ぐ。」

拈帖、「把住放行。」帖を早起して云く、「只だ者の一著、正眼に看來れば兩重の公案、信ぜずんば下文を聴取せよ。」法座を指して、「從上若しくは佛若しくは祖、者裏に到つて歩を進むる處なく、口を啓くの分なし。山

① 仁恭。字は石梁、一山國師の俗姪、台州の人、一山と同船して來朝し、建仁寺の興雲庵を開基し、滅後に慈照慈覺禪師と諡す。
② 正安四年。圓覺七代となる、六代は西洲子曇、八代は無隱圓範なり。
③ 公案。公府の案牘に喩ふるなり、法の在る所にして王道の治亂實に係る、公とは賢聖、其の徴を同じ、天下其の途を一にするの至理なり、案は賢聖理を爲すことの正文なり、佛祖の機縁相契ひ時に隨ひ、縁に應じて宗綱開示を録す、

僧又作廢生。遂に驟歩して座に登る。

祝聖、拈香して云く、「此の一瓣の香、恭しく爲に、

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬歲を祝延したてまつる。陛下恭しく願はく

は、一人端拱、四海隆平、壽考萬年、子孫千億ならんことを。」

又拈香して云く、「此の香は征夷大將軍の爲にし奉る。伏して願はくは、

宋に祿算を増し、益功勳を懋め、雨露を蒼生に沛ぎ、藩垣を東國に固う

せんことを。」

又拈香して云く、「此の香は本寺大檀那の爲にし奉る。伏して願はくは、

壽山福海、增固増深、徳本道芽、愈堅く愈茂り、皆猷を有永に佐け、

佛法を無窮に隆にせんことを。」

提綱、「微笑に心を傳へ、夢中に夢を説く。三拜禮を得、頭上に頭を安

ず。則ち千載一時なりと雖も、其れ隻身兩役なることを奈せん。山僧粗差

恥を識る、端なく知つて故に犯す、今日只だ權時の施設を得去れり。慕に

拄杖を拈して云く、「無上法王に大陀羅尼門あり、名けて圓覺と爲す。一切

清淨、眞如菩提、涅槃及び波羅蜜を流出す。」一晝して云く、「住みね住み

之を公案と云ふ、中峯の山房

夜話に出づ。

宋。深固の意。

微笑傳心。世尊、靈山會上に

在つて華を拈じて衆に示す、

此のまじ業、皆默然たり、唯

だ迦葉尊者のみ破顔微笑す、

世尊の曰く、「吾れに正法眼

藏、涅槃妙心、實相無相、微

妙の法門、不立文字、教外別

傳あり、摩訶迦葉に付屬す」

と。五燈會元一卷に出づ。

三拜得髓。達磨、唐土の化縁

盡きて四天に歸らんすとす、時

に門人に命じて曰く、「時將に

至らんすとす、汝等各何ぞ所

得を言はざる、」時に道副、尼

總持、道育、各各所得を述ぶ、

祖曰く、「汝等我が皮肉骨を得

たり」と、最後に慧可、禮拜

して位に依つて立つ、祖曰く、

「汝我が髓を得たり、」五燈會

元卷一に出づ。

ね、道泰にして傳へず天子の令、時清うして唱ふることを休めよ太平の歌。」

擧す、乾峰和尚云く、「一を擧して二を擧することを得ず、一著を放過すれば第二に落在す。」雲門、

衆を出でて云く、「昨日人有り、天台より來つて、却つて徑山に往き去る。乾峰云く、「典座、來日普請

することを得ざれ」と。師云く、「一人は癡頑、一人は奸黠、驀箭に相逢ふ、巧を弄して拙と成す。山

僧或時は一を擧し、或時は二を擧す、總に事を妨げず。何となれば、自ら主人翁の在る有り。」

嘗晩小參、「正令全提、大地を荒却す、垢衣權に掛け曲げて今時の爲にす。」拄杖を拈して云く、「五位

君臣を列ね、三玄戈甲を展ふ。權實兼ね擧げ、照用同時。便ち見る賓中に

主あり、主中に賓あり、賓主混融し、賓主歴然たることを。」卓一下して云

く、「織塵元動せず、佛日正に高く懸く。」

法光寺の爲に上堂、「大道無門、三世十方常に麻徹、大方無外、色空明暗本全眞、直下に一念虛

融すれば、自然に塵塵超越す。」拄杖を拈して、卓一下して云く、「重關を劈碎し、」晝一晝して云く、「路

布を裁斷す、靈機妙轉、大用全く彰る。日月を胸中に懸け、乾坤を掌上に運す。群生茲を以て化育し、

海宇此を以て清寧。著著途に通じ、頭頭轍に合す。故に我が法光寺杲公禪門、願力に乗じ來つて全

、此の令を提ぐ。直に得たり、名四裔に喧しく、震八紘に震ひ、佛祖の淵源に了達し、向上の一著を

洞明し、出生入死に至つて、焜耀光輝することを。然りと雖も、此れ猶ほ是れ杲公禪門、功勳邊の

事、且く道へ功勳に墮せず、一句作麼生か道はん。良久して云く、「巨に十三華藏界を闡いて、身を藏すに跡なく海波を騰ぐ。」復た偈を説いて云く、「至化功成つて自ら知らず、翻身拶倒す五須彌、紫檀の樓閣黄金の闕、坐ながら見る龍華記前の時。」

①大檀那山に入りて請する上堂。黄檗、臨濟を打つこと三頓、蒿枝の拂ふが如く、窮坑滿ち難し。徳山、雪峰を打つこと一棒、桶底の脱するが如く、小器盈ち易し。「拄杖を拈じて云く、「此の棒、鹿峰が手裏に在らしめば、大いに土曠れ人稀なるに似たり。今日幸に銜鑑前に在るに遇ふ、未だ免れず拈出して、略威光を展べ去らんことを。」卓一下して喝一喝。

上堂。「丹楓葉墮ち、紫菊香残る。老胡明め破せず、獨り自ら西乾に返る。是れ汝諸人、取次に搏量し、頭を聚めて妄想す。」良久して云く、「驢年。」

東堂。西澗和尚を謝する上堂。諸佛強ひて出頭し、諸祖安に事を生ず。病痛一般なりと雖も、脈息亦異なること有り。瑞鹿峰前に逗倒し、自然に別に道理あり。任ひ是れ佛病祖病、一切衆上の心病。毛病萬病も、總に脱然として同じく大安樂の地に到らしむ。見るや、緑水青山自在の身、菩薩神通暫く遊戯す。

四頭首の乗拂を謝する上堂。「昔日臨濟・韶陽・汾陽・大陽各三句あり、宗要を發明す。瑞鹿却つて四

檀那。南海寄歸傳に曰く、「梵語に陀那鉢底と云ひ、譯して施主と云ふ、檀越とあるは正譯に非ず。」
東堂。象器箋に曰く、「當寺前住の人を東堂と云ふ、蓋し東は是れ主位なり、前住の人は是れ舊主、故に東堂に居す。」
四澗。諱は子曇、宋人なり、石帆衍に嗣ぐ、運庵三世、東來して建長等に住す、十一代なり、一山は十代なり。

句あり、今日諸人に舉似す。「拄杖を拈じて卓一下して云く、「第一句。」又卓して云く、「第二句。」又卓して云く、「第三句。」又卓して云く、「第四句。」一句、四句を具し、四句只だ一句、是れ唐言に非ず、亦梵語に非ず、自然に句句朝宗、機機相赴く。石火光中主賓を定め、百戰場中文武あり。「擲下して云く、「機を發することは須らく是れ千鈞の弩なるべし。」

臘八上堂。「六年荒草に冷坐し、飢を受け凍を受くること少からず。夜半夢驚き魔倒る、強ひて謂ふ見星悟道と。二千餘載今に至る、寐語人を惑すこと未だ了ぜず。鹿峰今日者の老子を喚び醒す看よ。」拄杖を拈じて卓一下して云く、「瞿曇瞿曇、金鳥翅を拍つて扶桑に耀く、那箇か知らざる天大いに曉くることを。」

上堂。「向上の一機、言前に薦得するも、已に第二に落つ。頂門の一竅、機先に拶透するも、腦後猶ほ一椎を缺く。與麼不與麼、拄杖を拈して云く、「直下七花八裂、東大海畔底の紅塵、富士山連天の白雪。」拄杖を卓して下座。

元旦上堂。「有爲偽なりと雖も、之を棄つるときは則ち道業成らず、無爲眞なりと雖も、之に著るときは慧性明かならず。灼然として一出入、半合半開、但だ願はくは、春風の齊しく力を著けて、一時に吹いて我が門に入り來ることを。」拄杖を卓して下座。

瞿曇。刹帝利種の姓なり、純淑、又は地最勝と譯す、又星の名なり、星に從つて立稱す、後代に至り、改稱して釋迦と云ふ、祖庭事苑に曰く、「梵語に瞿曇摩、又は瞿曇と云ふ、此に地勝と譯す、謂、天を除くの外、地に在る人、地山の最勝なればなり。」

上堂、「梅腮玉を散じ、柳眼青を垂る。春光漸く妍媚、物理自ら分明、諸人東行西行、左觀右觀、照顧せば鼻孔眼睛を打失せん。」左右を顧視して云く、「且喜すらくは無事なることを。」

新舊首座を謝する上堂、「綱を提ぐるときは則ち綱正しく、領を振ふときは則ち衣端し。所以に叢林の綱領、貴ぶらくは人を得るに在ることを。人を得るときは則ち宗風振ひ正令行はる。只だ黄檗、南泉の鉢位に坐し、陸州、臨濟の喫棒を賺すが如きは、是れ提綱か振領か。」良久して云く、「三尺の吹毛光膽を照す、萬人叢裏高標を奪ふ。」

上堂、「心を識得すれば山岳沈む、水、水を洗はず、金、金を博へず。端的の一回會て與應、從教あれ大地。知音を絶することを。拄杖を卓して下座。知客を謝する上堂、「賓中の主、虚空手を拍つて須彌舞ふ、主中の賓、桃紅李白共に芳春、主中の主、堯風舜日寰宇清し、賓中の賓、紅塵世路間人少なり。慕に拄杖を拈じて云く、「者箇は是れ圓覺が拄杖子、且く如何が是れ主、如何が是れ賓。」擲下して云く、「龍蛇は辨じ易く、衲子は謾じ難し。」臘八上堂、晝は日を見、夜は星を見る。雪山成道、口説憑る無し。半夜三更困じて未だ醒めず、打失す。娘生の雙眼睛。

①知音。語原に伯牙、琴を鼓すれば鐘子期其の妙音を知る、鐘子期死するに及びて其の妙音を知る者少し、故に琴を鼓せずとあり、之れより己が消息を知る人を知音、又は知己と云ふ。

②知客。勅修清規に曰く、「知客は職の名、賓客を典り、凡て官員、禮越、尊宿、名徳の士等、來山の節は香茶を拈じ、迎待時に隨つて行ひ、方丈に通達する所、賓客に關する、こは蕙殺此の職に當るの責なり。」

③娘生。娘生の面目さ本來の面目と同じ。

臘月望上堂、風頭稍硬く、煖處に商量せよ、平地端なく陥坑を掘る。天寒人寒、大家者裏に在り。自家の骨肉尚ほ此の如し。古人の家私、圓覺已に掃刮し了れり、圓覺が家私又作麼生。局局促促大寒酸、慚愧す人の眼を著けて看る無きことを。

元正上堂、「新年頭舊年尾、四序已に端を更む。三陽猶ほ未だ啓かず、是れ佛法にあらす、亦世諦に非ず、是れ因縁にあらず、亦自ら爾るに非ず。拂子を豎てて云く、「會得せば徧地の祥風、普天の和氣。」

上堂、景新春に入つて、萬物欣欣、野梅玉を飄し、庭艸茵を鋪く。風光限りなく好し、白日間人少なり。

上堂、「諸佛出世、水を擔つて河頭に賣る。祖師西來、土上に泥を加ふ。諸人軒昂の氣宇、特達の胸懷、第一疑猜を用ひざれ。慕に拄杖を拈じて卓一下して云く、「但だ雪の消え去ることを得て、自然に春到來。」

雪後上堂、一回虚空を粉碎し了る、大地明明に點埃を絶す。獨り峨眉山上の客のみ有つて、人の手を携へて高臺に上るなし。

上堂、「陸州の擔板漢、趙州の喫茶去、口、崖蜜の甜さが如く、心、黄連の苦さに似たり。所以に圓覺尋常、諸人に於て敢て絲毫も錯悞せず。」

①擔板漢。一方面を見て他方面を見ざる鈍漢を云ふ、傳灯錄

良久して云く、「虎を射て真ならず、徒に羽を没するに勞す。」

上堂、擾擾肉肉、晨雞暮鐘、水滄海に流れ、月高峰に上る。憶ひ得たり
瑞巖の老凍膿、時時只だ喚ぶ主人翁。

上堂、一笑法を付す、傾城傾國の妖、三拜髓を得、破業破家の嗣。此
の妖未だ息まず、此の恨窮り難し。今日何人能く屈を雪ぐ、風に臨んで
幾度か眉峰を蹙む。

中夏上堂、「世事肉肉として過ぎ、今朝又中夏、衲僧本參の事、大蟲水磨
を看る。諸譎有り縫罅無し、嵩山箇の破窻墮あり。」拄杖を卓して下座。

上堂、索索たる秋聲碧桐に墜つ、蕭蕭たる涼氣簾櫳に入る。體露金風の
句を明めんと擬して、又韶陽網子の中に墮す。

中秋上堂、「仲秋三五、桂影婆娑、人間天上、競つて光華を賞す。憐む
可し老長沙、小釋迦を踏倒す。蒼龍角を折り虎牙なし、笑倒す東村の李
大哥。禪牀を拍つて下座。」

上堂、和氏の璧瑕無し、隋侯の珠類を絶す。然りと雖も稀世の珍、得る
者は更に須らく撲碎すべし。何が故ぞ斯の如くなる。道ふことを見ずや、

匹夫罪なし、壁を懷いて其れ罪あり。

清西堂、東光寺の請を受け、瓊首座博多より來るを謝する上堂。擧す、

三聖、衆に示して云く、「我れ人に逢ふては即ち出でず、出づる時は便ち
人の爲にす。」興化云く、「我れ人に逢ふては即ち出で、出でては即ち人の
爲にせず。頤に云く、「兄は鈍鑊を携へて東邊に去り、弟は生鋤を放つて西
畔より來る。兄弟各人活計を成す、相逢ふて一笑兩眉開く。」

重陽上堂、「九日今朝是、東籬嫋菊黃なり、因つて思ふ陶靖節、寂寞と
して壺觴を待つ。殊に知らず露幽艶を凝し、風清香を拂ふことを。醉人限
り無き意、何ぞ必ずしも瓊漿を泛べん。膝を拍つて云く、「茫茫として多
くは是れ秋光を負ふ。」

長樂月船、和尚を謝し、并に知客を請ず、小師、上堂、「百丈喝
せられて耳聾す、冤憎會苦、臨濟蒿枝三頓、冷債還し難し。趙州水を探る
平地の風波、南泉背を撫して徒に多事を成す。則ち啐啄同時、箭鋒相拄ふ
と雖も、要且つ主賓禮缺き、父子情乖くことを。圓覺只だ見定に據る、且
つ要す恰恰相宜しからんことを。」拄杖を拈じて卓一下し云く、「客來つて茶

陳尊宿の章に曰く、「譯僧を見
て召して曰く、座主、其の
應諾す、師云く、擔板漢」
啜茶去。趙州、新到に問ふ、
「曾て此間に来るや、」曰く、
「曾て到る、」師曰く、「啜茶
去、」又僧に問ふ、僧曰く、「曾
て到らず、」師曰く、「啜茶去、」
五燈會元四卷に出づ。

瑞巖。台州にあり、諱は師彦、
閩の許氏の子なり、希原下六
世、巖頭に法を嗣ぐ、師常に
丹丘の瑞巖に居す、磐石に坐
して終日思の如し、自ら主人
公と喚ぶ、復た應諾して乃ち
曰く、「惺惺者、他後人の
受くること勿れ、五燈會元の
七卷に出づ。凍膿は氷結なり
とあれば、年寄りて色澤の失
せたるを云ふ、くされおやち
さいふの意。
一笑。迦葉なり、三拜は二祖
をいふ。

大哥。哥は兄なり。
西堂。象巽箋に曰く、「他山の
前住の人を西堂と云ふ、蓋し
西は是れ賓位、他山の退院の
人此の山に來る、此れ賓客な
り、故に西堂に處らしむ。」
三聖。鎮州三聖院慧然禪師、
法を臨濟に嗣ぐ。
興化。魏府の興化存獎禪師、
法を臨濟に嗣ぎ、廣濟禪師と
諡せらる。
瓊漿。美酒か。
長樂。上野國世良にあり、
榮西の法嗣榮朝和尚の開山、
關東一刹の一。今は天台宗。
和尙。又は和上と書す、梵に
は譯遮迦と云ふ、于闐國に和
尙と譯す、漢土には之を力生
と譯す、即ち師は弟子の功德
を生ぜしむる力を有するが故
に、師を力生と稱す、舍利弗
問經に曰く、「夫れ出家は其の
父母生死の家を捨てて法門中

の喫するなし、萬湯禮儀を備ふ。」

至上堂「葭管灰を飛し、新陽候に應ず。觀臺の書雲、以て休咎を卜す、圓覺、俗に順つて也た書せんことを要す。」拂子を以て、字を寫す勢を作して云く、「東西南北、赤白青黃、已に書し了れり、衆中氣候を識り休咎を別つ底あること莫しや。縱ひ有るも也た須らく勘過了して打すべし。忽ち若し箇の出で來つて、即今萬里雲なく、又箇の甚麼をか書すと道はば、拄杖を拈じて臂脊に一頓を與へん。何が故ぞ、豈に道ふことを見ずや、青天も也た須らく棒を喫すべし。」

明因西堂無絃和尚を謝する上堂。一曲の無絃古調清し、十三徽外韻冷、塵中是れ知音少なる可し、時に松風に和して石屏に倚る。

上堂、擧す、佛眼遠和尚の頌に云く、「一日日一時時、龍門老心自ら知る。」拈じて云く、「龍門和尚、誰偈則ち甚だ美なりと雖も、鹿山看來れば、情識裏に坐在す。鹿山も亦頌あり、云く、「一日日一時時、鹿山老衆中、若し箇の者裏に向つて一句を道ひ得て、個儻分明なる有らば、山僧半院を分つて伊に與へん。」

圓覺語終

再住巨福山建長興國禪寺語錄

侍者 聰一 編

① 兩班の 耆舊を謝する上堂。「普化、臨濟を 成禪し、珍重して下り去る。楊岐、慈明を補佐し、時に 慈語を出す。是れ皆 砥礪の質、豈に瑚璉の材たらんや。福山者裏、左眇するときは則ち氷のごとく清く玉のごとく潔く、右顧するときは則ち虎のごとく驤き龍のごとく馳せ、機鋒星電を閃し、號令風雷を鼓す。山僧贏ち得て放憨癡、閒に看る峰雲の自ら去來することを。然りと雖も便ち是れ福山爲人の處なること莫しや。」良久して云く、「妙舞廻雪の手に誇ること莫れ、三臺須らく是れ大家催すべし。」
② 鏡堂和尚の 遺書至る上堂。「甲子六十三、森羅萬象本同參、法の人の爲に説くなし、刀を打することは須らく分州の鐵なるべし。任運自ら去來す、南天台と北五台と、天上只だ一月、夜夜の清光常に皎潔。大衆、鏡堂老子、末後の全提、建長已に與に解注し了れり。只だ涅槃後大人の相あ

に入り、微妙の法を受く、蓋し師の力法身を生長し、功徳の財を出し、智恵の命を養ふ、功徳之れより大なるはなし、又和尚を沂誦と譯す、弟子年少にして師を離れず、常に近いて經を受けて誦するを以てなり。或は親教師と譯す。
③ 小師。沙門謙下の稱、又は弟子、師に對して自ら小師と呼ぶ。
④ 佛眼遠。五祖演に嗣ぐ、龍門に住す、宋の徽宗宣和二年寂す。
⑤ 個儻。才氣のすぐれて獨立すること。

① 聰一。聰一の字は喝岩、萬壽寺に住す、建長寺の葦航道然に嗣ぐ、葦航は大覺禪師の法嗣なり。
② 兩班。朝廷の制に文武の兩班あるが如く、禪林も又之に擬して兩班あり、又之を東序、西序と云ふ。
③ 耆舊。猶ほ老宿と云ふが如し、戒臘五十以上の人を尊稱して云ふ。
④ 成禪。禪は就こ同じ意なり、成就なり、事を成し遂ぐるをいふ。
⑤ 意語。意は愚なり、暗なり。

るが如きんば、諸人還つて見るや。若し也た未だ見ざれば、未だ免れず更に指出することを。「拄杖を卓すること一下して云く、「鏡を打破し來つて親しく見了る、團團舊に依つて乾坤に輝く。」

元宵上堂、「花柳春陰に媚び、歌管衢市に開し。」大衆を召して云く、「會すや、我見燈明佛、本光瑞如此。」拄杖を卓すること一下して下座。

新舊維那を謝する上堂、克賓、興化の爲に拈香、田夫、國政を論じ、法昌、北禪の帽子を還す。癡客主人に勸む、冷地に看來れば總に一笑するに堪へたり。福山が者裏、進むに禮を以てし、退くに義を以てす。清機掌を歴、風凜凜地。

上堂、「百丈、馬師の喝下に於て耳聾すること三日、臨濟、高安より回りに來つて攔腮一掌。盡く謂ふ是れ師資契合と。知らず是れ冤債相求むることを。諸人、百丈臨濟二大老、立地の處を知らんと要すや。」良久して、「一たび潘郎に従事卻せられて後、便ち解す人前に羞を識らざることを。」上堂、桃花は紅に李花は白し、色は是れ色にあらず、燕子語り黃鶯鳴く。聲は是れ聲にあらず、是れ色にあらず、是れ聲にあらず、是れ其甚麼ぞ。靈雲

① 碓。碓は石にして玉に似る、碓は石に次ぐ玉。

② 鏡堂。諱は覺圓、環溪一に嗣ぐ、無準三世、弘安二年佛光國師と共に日本に來る、建長間覺及び建仁等に住す、徳治元年九月二十六日寂す。

③ 遺書。勅修清規尊宿遷化の章に曰く、「官員、檀越、諸山法眷の遺書あり、即ち遺送すべし」とあり、一定の書式あり、今は略す。

④ 法昌。諱は倚遇、北禪の智賢に嗣ぐ、雲門五世。

⑤ 嵩山破窟墮。五祖下二世に嵩嶽安國師の法嗣に破窟墮和尚あり、嵩嶽に隱居す、山場に廟あり、殿中に一窟を安す。此の靈神、物の命を奪ふ事甚だし、師一日廟に入り、杖を以て窟を敲くこき三下して曰く、「咄、此の窟、只だ是れ泥瓦合成のみ、聖何れより來り

打失す雙眼睛、笑倒す 嵩山の破窟墮。

桃溪和尚の遺書至る上堂。「鹿峰憶へて擧す三玄の要、東漸歸り去つて閉に吟嘯、忽然として一轉して無生に入る、引き得たり虚空の口を開いて笑ふことを。芭蕉虚幻の體を見徹して、本に返り根に歸して自ら妙を得たり。此の意只だ今誰と共に論ぜん。海天目斷す千峰の曉。「辭世の頌、芭蕉虚幻の體」の語あり。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「選佛場開く。」卓して云く、「此を以て題と爲す、爾若し出格の句を道ひ得ば、爾に許す心空及第することを。」杖を靠けて下座。

上堂、結制已に五日を過ぐ、修證の事須らく猛烈なるべし。騰身慕に太虚を過ぐ、妨げず適然として獨脱なることを。若し只だ隊を逐ひ群に隨はば、更に又時に違ひ節を失せん。瞋眠瞋飯無明を肆にし、熱鐵牀に坐して熱鐵を呑む。

解夏上堂、「尅期取證、鬼窟裏に活計を作す。休夏自陳、且く夢中に夢を説くこと莫れ。此の秋初夏末に當つて、兄弟東に去り西に去る。前途忽ち人の本分の事を問ふもの有らば、未審し如何が祇對せん。」良久して云く、「馬あれば馬に騎り、馬無ければ歩行す。」

再住 建 長 語 終

靈何れにか去る、慙慙にして物命を烹宰す、又打つこと三下す、靈乃ち傾破墮落す、須臾にして一人あり、青衣袈裟、拜を師の前に設く、師云く、「是れ何人ぞ、」曰く、「我れ本此の廟の靈神なり、久しく業報を受け、今日師の説法に遇ふて此處を得脱す、會元の卷二に出づ。」

① 桃溪。諱は徳悟、蘭溪に嗣ぐ、圓覺四世。

住相模州金寶山淨智禪寺語錄

侍者、居中編

上堂、狗子佛性あり、堂に當つて挂起す秦時の鏡、狗子佛性無し、利劍拂開して天地静かなり。有佛性無佛性、拂子を摘下して云く、「急急如律令。」

至上堂、暑運推し移り、日南長至、燭氷河に起り、花碓背に生ず。是れ因縁にあらず、亦法爾に非ず、且く道へ是れ何の道理ぞ。拄杖を拈じて云く、「我れ今分明に爾に説向す。卓一下して下座。」

望日、頭首兼拂、新舊兩班、并に白雲、東明和尚を謝する上堂。「冬至前後、沙飛び石走る、三世の諸佛あることを知らず、狸奴白牯却つてあることを知る。象王回旋し、師子哮吼す、箇の折脚鐺子を提げ、且く要す大家手を出して、推せども進前せず、約すれども退後せざることを。因つて思ふ東土の、小釋迦、天宮夢を説いて自ら醜を呈し、白雲を引き得て笑口を

開かしむ。拄杖を卓して下座。

臘八上堂、岸容臘を待つて將に舒べんとする柳、山意寒を衝いて放かんと欲する梅。盡く謂ふ雪山覺道を成すと、誰か知らん瞌睡眼方に開くことを。

上堂、今朝七月、秋意凄切、露草蛩吟じ、風林葉脱つ。如來禪、祖師意、直下分明に一時に漏泄す。是れ汝諸人還つて神清く氣爽なることを覺ゆるや。其れ或は然らずんば、手を以て搖曳して云く、「不説不説。」

上堂、禪意に非ず、道功勳を絶す。路頭極まる所急に身を翻さんと要す。高安灘頭、尿牀の鬼、龍潭室裏、點燈の人。

上堂、百丈再び馬師に參じ、臨濟回つて黄檗を看る。飢鷹韃靼を脱し、猛虎翹角を挿む。慥暴生獐著くるに處なし。諸人飢ゑては飯を喫し、困じては瞌睡す、熱しては涼に乗じ、寒じては火に向ふ。輒ち邪に隨ひ惡を逐ふこと莫れ。然りと雖も、作者好し無病の藥を求むるに。

上堂、臘月二十五、競ふて雲門の曲を唱ふ。寶山格調新翻、且く時に隨ふて俗に習はず。拄杖を拈じて卓一下して云く、「白雪陽春和するもの稀な

①淨智寺。金寶山と號す、相模鎌倉山の内に在り、文永六年、北條師時の開基、開山は宋僧大休正念、鎌倉五山の第四に位す。
②居中。字は嵩山、南禪寺に住す、宋僧西圃子墨の法嗣なり。
③東明。諱に慧日、宋の人、直翁舉に嗣ぐ、日本延慶二年來る、時に歳三十八、相州の禪興に住する。七、八年、白雲庵に退く、建長等に住す。
④小釋迦。滎山禪師の法嗣仰山惠寂禪師を指す、師臥する次で、彌勒の内院に入る、衆堂の中、諸位皆足れり、惟だ第

二位空し、師遂に座に就く、一尊者あり、白起して曰く、「今第二座の説法に當る」と、師起つて白起して曰く、「摩訶衍の法は四苦を離れ百非を絶す、諦聽せよ諦聽せよ、衆皆散じ去る。夢見る、覺むるに及んで滄山に奉似す。五燈台元第九に出づ。
⑤高安。大愚を指す。
⑥尿牀の鬼。臨濟を指す。
⑦龍潭。崇信を指す。
⑧點燈の人。徳山をいふ。
⑨雲門の曲。僧、雲門に問ふ、「如何なるか雲門の一曲、」門云く、「臘月二十五。」
⑩克賓維那の公案。興化存獎禪師、一日克賓維那に謂つて曰く、「汝久しからずして唱導の師と爲らん、」賓曰く、「我れ道の保社に入らず、」師云く、「爾會し了つて入らざるか、會し了らずして入らざるか、」曰

り、斷絃須らく是れ驚膠の續なるべし。」

新舊維那を謝す。學す、興化、克賓維那を打する公案、頌に云く、「令賞罰を全らし、情恩怨を忘る、透頭徹尾、一刀兩段、梭陶壁に飛び夜雷奔り、魚禹門に躍つて春浪暖かなり。利害只だ今誰と共に明めん、出群は須らく是れ英靈の漢なるべし。」

結夏上堂、「一切處是れ圓覺の伽藍、一切心是れ平等性智、一切處留まらず、一切心住することなし。飢えては即ち食し、困じては即ち睡る。」禪林を拍つて云く、「瞎驢靈山の記を受けず。」

元宵上堂、拂子を擧げて云く、「此の燈鷲嶺首めて迦葉に傳ふ、少林謾に神光に付す。燈燈相傳へて今日に至る、檢點し將ち來れば一箇箇、總に是れ光影を弄ずる底、以て天下の師僧盡く光影裏に向つて頭出頭沒することを致す。若し是れ光未だ發せざる時の消息ならば、未だ一人も會得する有らず。只今會せんと要すや。」拂子を擧げて云く、「正月十五是れ元夕。」

解夏上堂、「修あり證あり、己靈を埋沒す、修なく證なく、先覺を屈辱す。寶山期已に滿つ、衆中超宗越格底あること莫しや。」左右を顧視して云く、「異獸頭角を藏し、靈禽羽毛を惜む。」

淨智語終

住在城瑞龍山太平興國南禪禪寺語錄

侍者志謹編

師、正和二年八月一日に入院す。三門を指して云く、「重關巨に闢けて、作者歸を同じうす、未歸底あること莫しや。」彈指一下して云く、「者裏一步を進む。」

佛殿、金剛王寶殿、敷座して坐す、「幸に自ら端嚴具足、端なく箇の漢に今の希有と道はれて、便ち見る七花八裂。」坐具を敷へて云く、「山僧今日伊が爲に蓋覆著。」

土地堂、「那一通。」香を以て爐を扣いて云く、「只だ者个、正を顯し邪を摧く、風凜凜地。」

祖師堂、「佛は是れ假名、祖云何が有らん。面面厮覷よ、泥猪疥狗。」據室、拄杖を拈じ、擧げて云く、「盡從上若しくは佛若しくは祖、天下師僧の性命、今日山僧が手裏に落在す。放行把住、一切時に臨む、甘はざ

く、「總に不恡麼、師便ち打つて云く、「克賓維那、法勝勝たず、罰錢饘飯を設けよ。」

①志謹。古泉と號す、後に東福寺に住す。

②正和二年。九十四代花園天皇の御宇。

③敷座而坐。金剛般若波羅密經法會因由分第一に曰く、「次第乞已還至本所飯食訖收衣鉢洗足已敷坐而坐」とあり。

④土地堂。土地神護法神の堂、佛殿の東邊に設く。象器筵に出づ。

⑤祖師堂。佛殿の西邊に設け、其の中に初祖達磨大師及び叢林開祖百丈大智禪師の像牌を安置して、西に向はしめ、而して其の本山の開祖及び其の

る底あること莫しや。〔靠けて云く、「吽吽。」〕勅黄を拈して、「者の一著子、殊勝中の殊勝、奇特中の奇特、且く道へ是れ箇の甚麼ぞ。見るや、法皇の大寶、九重より降る。」

山門の疏、鍋子の大小、杓柄の短長、山僧未だ門に入らざる時、已に一一見了す。今日甚に因つてか鉢盂に柄を添へ、渾沌耳を鑿る。信ぜずんば聽取せよ。」

諸山の疏、「壁炬輝きを分つ、鄰光之れ義、稍請講に渉る、肝膽即ち異なり。相罵ることは儼に饒す、背を接げ、相懸することは儼に饒す水を潑げ。道ふことを見ずや、爾に出でて爾に返る。」

法座を指して、「向上の一路滑に、壁立萬仞險なり。山僧今日得險、一時に坐断し去らんと要す。陸座、「問答録せず、提綱に云く、「幸に是れ太平世界、安然無事、端なく雪嶺六年の後、少林九載の餘、爾してより互に出頭し來る。艸木を拈出して亂に僧袋を呈す。陰陽を迷味し、晝を呼んで夜と作す、六十甲子を將つて打亂し了れり。山僧久しく不平を負ひて、今日出で來つて略整頓を爲さんと要す。人人をして道を知つて三百六旬、及び閏餘歳を成し、四時平分、一陰一陽、晝を分ち夜を分ち、時を違ひ候を失せざることを得ざらしめんことを要す。然りと雖も猶ほ是れ世俗變の事、只だ物義を傷らざるが如き一句、又作麼生。」良久して云く、「但だ見る皇風一片と成ることを、知らず何れの處か是れ封疆。」

當晚小參、入寺の始め、今夜諸人と聚集すること片時、既に彼彼心眼相照し、事一家に同じしす。更に敢て佛法の玄妙機關事理、^①濟北の三玄、^②洞山の五位を將つて、諸人に觸忤せず。又況んや衆中三人兩人、乃ち是れ舊時の道伴。所以に山僧此に來つて、一切但だ舊に仍らんことを要す。若し能く舊に仍らば、則ち妨げず我れ更に般若三昧を證得することを。内空外空、一切皆空、二十の空門、悉く皆證得す。妨げず諸の三昧を超えて、迥然として獨脱、與麼に道ふことを。衆中忽ち箇の出で來つて、善く柳下惠を學んで、終に其の跡を師とせずと道ふもの有らば、又且つ如何。只だ佗に向つて道はん、低聲低聲と、淨地上に狼藉藉すべからず。

復た擧す、僧、六祖に問ふ、「黄梅の衣鉢、甚麼人か得る」の公案。拈して云く、「大小の祖師、心肝五臟を搜出し了れり、只だ是れ識者に逢ふこと罕なり。山僧輒ち偈を成して曰く、「一曲の陽春玉徹を奏す、夜堂風細にして月華遲し、調高く絃絶えて知音少なり、誰か擬せん。黄金子期を鑄ることを」と。」

寺の開祖の像牌を安じ、東に向はしむと、林間録に出づ。勅黄。黄麻紙を用つて詔勅の文を寫すなり、勅修清規書記に曰く、「聖旨の勅黄を奉じて名山大刹に住持するものを云ふ。」

法皇。後宇多院天皇、大寶は天子の位をいふ。

諸山疏。本寺隣封の諸山新任持入寺の疎を製す、即ち篇を促すことを叙す。

濟北の三玄。臨濟録に云く、「一句語に須らく三玄門を具すべし、一玄門に須らく三要を具すべし、權あり用あり、汝等諸人作麼生か會せん」と云つて下座。

洞山の五位。正中偏、偏中正、正中來、兼中至、兼中到。詳しくは五位顯訣元字脚を見よ。

黄金鑄子期。伯牙琴を善くす、鐘子期之を聞いて其の妙音を嘆す云云。

次の日、龜山聖廟の爲に上堂。一人、大見を具し、大智、大用を得。一毫端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉ず。卷舒方外の乾坤を立て、縦横域中の日月を挂く。乃至伽藍を建造し、己事を悟明す。猶ほ是れ先皇自己運用底の事、只だ末後の大事光明輝燦たるが如きんば、且く道へ只今甚麼の處に在つてか行履せん。諸人還つて會すや、良久して云く、「巨に十三華藏界を闡いて、身を藏すに跡なく海波を騰ぐ。」

中秋、藏主并に維那を謝する上堂。「月月月半、月圓明、唯だ今宵のみ圓潔に陪するあり。世上人人争ふて賞翫す。盡く道ふ則明又還つて別なりと。只だ別處の如きんば又作麼生。見ずや馬箠箕父子賞翫の時、末後却つて道ふ、經は藏に歸し禪は海に歸す、唯だ喜願のみ有つて、獨り象外に超ゆと。良久して云く、「明明たる此の意、知んぬ誰か會せん、法戰場中作者知る。」

頑極和尚忌、拈香して曰く、「者箇の老凍膿、素來情義薄し、一味是を睹ず、頑と惡とを恣肆す。年老いて變じて魔と成る、我れ魔力に攝せられて、眼を開いて陷奔に落つ。屈あり雪ぐに處なし、如今已に喜ぶ、兩ながら分張するを。年年西に望めば恨尤も切なり、今日香を焼いて伊に供養す。」

① 龜山聖廟。南禪寺の山内南禪院にあり、龜山天皇御分骨所にして、天皇の尊影を奉安す。
② 馬箠箕。馬祖大師をいふ、父子云々は百丈と馬祖との公案、前に出づ。
③ 普願。南泉をいふ。
④ 頑極。諱は行彌、青王に住す、癡絶沖に嗣ぐ、沖は曹源道生に嗣ぐ、生は密菴傑に嗣ぐ。
⑤ 老凍膿。膿は腫血なり、虛堂錄鈔に「蓋し老人の面に浮垢あり、而して凍膿に似たり。」

且く道へ、是れ恩に醜ゆるか屈を雪ぐか。「燒香して云く、「道ふことを見ずや、劍を記して舟を刻み、棒を掉つて月を打す。」

上堂、一喝。三日耳聾することを得、厨に聚蠅の饑に乏し、三頓六十拄杖を喫す、囊に繫蟻の絲なし。直に得たり、戸破れ家残ひ、冤を懷ひて屈を負ふことを。祖禰了ぜざれば、殃兒孫に及ぶ。南禪を帶累して、今日窮厮煎じ、餓厮炒す。屈あり雪ぐに處分なし。然も是の如くなりと雖も、心人に負かざれば、面慚づる色なし、短長自ら間人の説くあり。

重陽上堂、今朝九月九、空山所有なし、紫萸の囊を帯びず、黃花の酒を飲まず。因つて憶ふ陶淵明、悠然として南山を見ることを。萬象森羅齊しく醜を出づ、何ぞ眉を攢めて便ち首を回すに似かん。

大衆、藏經を看るを謝する上堂。「三秋景殘はれて千林蕭瑟、回雁嘯、吟蟲嘖嘖。的的たり諸佛の玄言、明明たり西祖の消息。直下に會得せば正に是れ落葉を認めて黃金と作し、此を離れて別に求むるも、又珠珍を棄てて沙磧を尋ぬることを成す。者裏兩重鐵壁相似たり、須らく是れ一拶透して始めて得べし。且く道へ、拶透して後如何。」拄杖を卓して云

① 三日耳聾。百丈、馬祖に參す、侍立する次で、祖繩床角の拂子を日視す、師云く、「此の用に即するか此の用を離するに即するか此の用を離するか、祖曰く、「汝向後、兩片皮を開いて、何を以てか人の爲にせん、師、拂子を取つて豎起す、祖曰く、「此の用に即するか此の用に離するか、師拂子を舊處に掛く、祖威を振つて一喝す、師直に得たり三日耳聾するこゝを云々會元に

く、「鐵壁鐵壁。」

上堂、「仲冬嚴寒、泥團を凍破す、滴水滴凍、言端語端、黃面老漢、拈弄し出さず、金色の頭陀に、當面に冷笑せらる。二祖大師、落陷も知らず、缺齒老胡に一時に熱瞞せらる。與麼與麼、大難大難、南禪與麼に道ふ、別に見處あること莫しや。慕に拄杖を拈じて、卓一下して云く、「水落ちて幽石を露し、雲開いて遠山を列す。」

至上堂、「暑運推し移り、日南長至。共しく惟れば首座大衆、各各時に膺つて納祐、慶にして宜しからずといふことなし。惟だ南禪が拄杖子のみ有りて、舊に依つて、糲飯刺脚節、笑つて看る花は不萌の枝に綻ぶことを。拄杖を卓すること一下、便ち喝一喝して下座。

上堂、擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ雲門の一曲。」門、答へて云く、「臘月二十五。」僧云く、「唱ふる者如何。」門云く、「且緩緩。」拈じて云く、「者の僧、城を攻め、邑を擧するの心あり、雲門文韜武略俱に備る、者の僧未だ免れず、才に鋒を交へて便ち、退衲せらるることを。山僧今日他の一機を奪ひ、先一步を擧し去らんことを要す。復た頰して云く、「雲門の

●金色の頭陀。迦葉尊者を指す、金色佛祖統紀五卷の二、左に曰く、「嘗て久遠劫の時に於て毗婆尸佛、入涅槃の後、四衆塔を起つ、塔中の像の面上金色少しく缺壞あり、時に貧女あり、金珠を以て佛面を飾らんを請ふ、時に迦葉は鍍金師を爲りて既に補治を爲す、因つて共に願を發す、「願はくば我れ二人無姻の夫妻を爲らん」と、是の因縁に由つて九十一劫、身皆金色なり、後に梵天に生る、天壽盡きて中天摩竭陀國の婆羅門の家に生る、名けて迦葉波云ふ。」頭陀とは梵語持擻と譯す、煩惱の塵垢を抖擻するの謂なり、此の修行を頭陀行云ふ、十二頭陀とは一、但三衣、二、糞拂衣、三、塚間、四、樹下、五、露地、六、阿蘭若、七、隨坐、八、乞食、九、受食、十、不

一曲今古に超ゆ、箇の臘月二十五と道ふ、南禪今日先を擧さんとを要す。且た月圓にして正に戸に當ることを趣ふ。」

新舊兩班を謝する上堂、祖師の偈を擧して云く、「心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なり。流に隨つて性を認得すれば、喜もなく又憂もなし。與麼なるときは則ち佗に從つて覓むること莫れ、但だ己に向つて求めよ。是の如くなるときは、則ち一進一退、一去一留、左あり右あり、放あり收あり、妙用縱横自由を得たり。」良久して云く、「大抵は佗の肌骨の好きに還す、紅粉を揉らず也た風流。」

佛涅槃上堂、衆を召して云く、「無憂樹下、天を指し地を指して尊と稱す、娑羅樹間、手を以て胸を摩して衆に示す。三百會、賢を欺き聖を罔す、八十年鎖夢關空。南禪今日懇懃に効ふ、是れ死蛇なりと雖も、活弄せんと要す。」

首座を謝する上堂、「雪に値ふ。」衆を召して云く、「臨濟の喫棒を賺し、南泉の鉢位に坐す。一種の風流、十分の標致、佗家會て上頭の關を踏む。是れ當陽意氣を誇るにあらず、帝城の梅柳正に暄妍、添へ得たり六花の異瑞を呈することを。」

食餘味、十一、不博食、十二、坐不臥を云ふ。
●糲飯。主丈の色を云ふ、刺脚節は主丈の形をいふ。
●日緩緩。まあ御ゆるくりなさい。
●擧邑。とを討つなり。
●退衲。敗走と同じ。
●祖師の偈。西天二十二祖摩訶羅尊者傳法の偈なり、傳燈に出づ、祖師とは永平學道用心集の注に「行解相應する之を云ふ」と出づ。
●無憂樹下。佛陀は中天竺迦毘羅城藍毘尼園の中に降誕す。

上堂、三月皇都浩蕩たる春、桃花爛熳として、靈雲を笑ふ。眼睛打失して人の會するなし、暢殺す釣魚船上の人。

閏三月 旦上堂、「三月又三月、光景暗に相催す。箇の甚麼をか相催す、人の老死を催し來る。古者に道く、衲僧家高たる峰頂に立ち、深深たる海底に行くと。且く道へ、妙高峰頂高きこと多少ぞ、東大海水深きこと多少ぞ。諸人若し又頂に到り底に到り來らば、妨げず一切處、以て自由自在なるべし。若し又未だ然らずんば、十二時中也た須らく些の精彩を著くべし、更に瞎驢大隊を趣ふが若きんば、閻老子未だ爾を放さざること存らん。」拄杖を卓して下座。

①靈雲。靈雲志勤禪師、初め滎山に在つて因に桃花を見て悟道す、偈あり曰く、「三十年來劍客を尋ぬ、幾回か葉落ち又枝を抽んづ、桃華を一見してより後、直に如今に至るまで更に疑はず。」會元の四に出づ。

上堂、大衆を召して云く、「三春已に去り、九夏斯に臨む。園林花事退き、庭樹綠陰森なり。梁間に燕語り、枝上に蟬吟す。隴麥黃雲を翻し、田秧綠針を長ず。祖師意諸佛心、目前明歷歷、何ぞ自ら沈吟することを得ん。」拂子を撃つて下座。結制上堂、十方同聚會、凡聖同居、龍蛇混雜、箇箇學無爲、白日青天、眼を開いて夢を作す。此れは是れ選佛場、甚れの處よりか者の消息を得る。心空及第して歸る。也た是れ鬼家の活計、然も是の如くなりと雖も、南禪更に一句子あり、諸人の爲に說破す。一、進前することを得ず、二、落後することを得ず、三、無事甲裏に坐在するとを得ず。若し吾が言ふ所に依らば、則ち一切處に大自在を得ん。其れ或は未だ然らずんば、切に忌む牆に撞き壁に撞くことを。

頭首兼拂を謝する上堂。衆を召して云く、「諸佛說不到の處一句を説き、日月を奔忙し、祖師行不到の處一步を行ず、山河を翻倒す、說不倒行不倒、未だ免れず特地の波吒、只だ行到說倒の如きんば、又作麼生。」良久して云く、「少年曾て決す龍蛇の陣、老倒還つて聽く稚子の歌。」上堂、一夏已に半を過ぐ、那事辨未辨、男兒大丈夫、一刀に須らく兩段すべし。若し未だ辨せざれば、光陰箭よりも急なり、若し已に辨せば、十影の神駒海涯に立ち、五色の祥麟天岸に歩す。辨せんと欲して未だ辨せざる時如何。歴歴分明 君自ら看よ。

②波吒。波は波波奔走のこと、不安の意、吒は吒吒嘆息の意。③叢林。祖庭事苑に曰く、「梵語に貧婆那、此に叢林と云ふ、智度論に曰く、「多くの比丘、一所に和合す、大樹の叢生する如く、衆の和合するより來るなり。」今僧衆く相來り修行する所を云ふ。

新舊兩班を謝する上堂。「石、玉を藏すときは則ち山潤ひ、水、珠を藏すときは則ち川媚ひ、叢林正人を得るときは則ち綱紀を振興し、自然に雲のごとく合し響のごとく應ふ。双を事海に遊ばしむるに至つて、機に中り的に中らずといふこと靡し。乃至左右其の原に逢ひ、進退其の宜しきに合ふ。然りと雖も、諸人其の人を見んと要すや、乃ち左右を顧視して云く、「見るや、眼三角を生じ、頭五岳より峭し。」中秋上堂、河漢秋中月に輝き、十分の圓潔更に虧くることなし。南泉袖を拂ふの機尤も峻し、藥嶠雲を披き嘯いて自ら怡ふ。光境俱に忘す復た何物ぞ、七八を吐吞して更に誰をか疑ふ。此の宵大地

人皆望む、誰か薦む清光未發の時。

正和 乙卯四月十三日、再住、○ 敕黄を拈じて云く、「此れは是れ上皇、一毫端に於て、正法眼藏を拈出し傳持する底の一著子、諸人若し又未だ會せずば、更に維那を煩して衆の爲に重演せん。」

上堂、領破れ蹄穿つ一老牛、已に間散を甘つて林丘に臥す。端なく更に犁杷を牽かしむ、傍觀を引き得て笑ひ休せず。

乙卯。正和四年なり。

上堂、「一夏恰も半を過ぐ、本參の事何ぞ慢ぜん。懔懔たる癡禪和、外に向つて方便を覓む。殊に知らず大事本來成現することを。」拂子を撃つて云く、「耳に在つては聞と曰ひ、堅起して云く、「眼に在つては見と曰ひ、聞見歴然了了無間。」良久して云く、「聲前色後新羅の箭。」上堂、擧す、古著に道く、「萬法是れ心光、諸緣唯だ性曉、本迷悟の人なし、只だ要す今日了せんことを。」師、衆を召して云く、「古人與麼に道ふ、大いに靈龜尾を曳くに似たりと。山僧今日直截に時の人に擧示し去らん。」良久して云く、「玉を煨ふことは三日の火を經んことを要し、珠を採ることは須らく九重の淵に下るべし。」

二月旦上堂、「二月仲春、漸く暖に、處處花明かに柳娛し。梁間の紫燕呢喃、枝上の黃鸝睨眈。觀世音菩薩、諸人の爲に普門法を説く、諸人還つて見るや聞くや。歴歴妨げず、同じく金剛三昧を證することを。若し也た見ず聞かずば、」良久して云く、「山轉して路なきかと疑ひ、溪斜にして別に村あり。」
因に夜遁れて回る上堂。自ら効して云く、「閒を求めて夜遁る、詔して追回す、的的要津を把斷し來る。滿面の塵埃眞に笑ふべし、誰か憐む百念已に全く灰することを。」

南 禪 語 終

小參

結夏、門の入るべき無し、目前徑に重霄を透る。路を得て便ち行く、脚下泥深きこと三尺。所以に鰲峰が者裏、安居結制、只だ要す諸人分に随つて時を渡ることを。忽ち一箇の脚蹠ひ手跌ふことあらば、便ち雲龍の水を出で、金鳳の空を搏つが如し。圓覺の伽藍に住せず、平等性智を毀罵す、山僧只だ低聲に伊に向つて道ふ未在と。何が故ぞ、大海若し足ることを知らば、百川應に倒に流るべし。

冬至、「一法有にあらざ、天何ぞ高く地何ぞ厚き、萬法無にあらざ、白は是れ鶴、玄は是れ烏、寶陀與麼の告報、箇の出で來つて道ふもの有り、此の一陽來復、萬彙發生するに當つて、石筍條を抽んで、氷河爛を起す、畢竟是れ有か是れ無か。」良久して云く、「岸に到つて筏を尋ぬることを休めよ、家に歸つて途を問ふことを罷めよ。」

除夜、「今日明日、新年舊年、四時密に運り、萬化迭に還る。西舍東隣、窮を送り富を待つ。張公李老、鬼を祭り錢を焼く。唯だ禪和家ありて、閑蕩蕩地、縁に逢ひ境に遇ひて、眼鼻孔を見るが如きと一般なり。然りと雖も、甚に因つてか十箇の指頭、長あり短ある。寶陀箇の道ふ處あり、只だ恐る人の點首する無きことを。」良久して云く、「大盡三十日、小盡二十九。」

結夏、「禁足護生、胡孫露柱に繋ぐ、尅期取證、官鶴清池に下る。衲僧家一切處破除、一切處成就、鬧市裏放致賣峭、孤峰頭月に嘯き雲に眠る。若し是れ二千年前の舊路ならば、終に肯て容易に脚を下さず。然も是の如くなりと雖も、開眼も也た著、合眼も也た著。」拄杖を卓すること一下。

解夏、「晝食夜寢、瀉山薄處先づ穿つ、粟を植る倉を開く。大仰軒中黠を放つ、福山一夏空しく過して空しく過さず、曾て爾諸人を謾せず。一夏空しく過して空しく過さざるも、也た鶴は長く鳧は短し、棘は曲り松は直し。物は是れ定價、錢は是れ足陌。然りと雖も明日布袋頭開く。諸人東に去り西に去る。前途忽ち人ありて本分の事を問はば、未審し如何が箇の消息を露さん。」拂を撃つて云く、「牛角長きこと二寸、兎角長きこと三尺。」

除夜、「雪に因む。」要津を把定す、凜凜たる千峰に寒玉聳ゆ、線路を放開す、融融たる萬國祥光を動す。爾若し放開把定の處に向つて搏量せば、紛飛裏に輓じて、出身の路なし、放開把定の處に向はずして領會せば、冷地上に臥して甚の了時かあらん。直饒ひ虚空粉碎し、大地冰稜し、迥に塵を絶して、洞然として明白なるも、「拄杖を拈じて云く、「福山拄杖子、也た未だ肯て爾が過を放さざること有り。何が故ぞ。一年三百六十日、今宵正に是れ

結交頭。「拄杖を卓すること一下。」
結夏、「向上の一路、千聖不傳。」拄杖を拈じて、卓一下して云く、「者裏箇

①結交頭。頭は新年のこき、交は交替の義、結は結尾にして年の終りのこき、新年頭と交代する年の終りにして、大晦日則ち除夜なり。

の入頭を得、三世の諸佛、只だ脚跟下に在り、十方世界、只だ一針鋒に在り、甚の禁足護生とか説き、甚の尅期取證とか説かん。與麼與麼、水を退けて鱗を藏す、不然不然、雲を望んで樹に上る。」卓一下して云く、「三世の諸佛影迹を絶す。」卓一下して云く、「十方世界百雜碎、七縱八機、東倒西播、笑倒す明州の 慈布袋。」

◎慈。愚なり。

冬至、全く巴鼻なし、死水鯨龍を躍らす、別に生涯あり、虚空孔竅を開く。等しく是れ通天の活路、多少の人が脚高く脚低き。則ち自己の家郷なりと雖も、也た爾が親行親倒せんことを要す。是なることは則ち固に是、其れ奈せん我が此の一衆、總に軒昂の氣宇、洒落の風標を具し、妙、環中に契ひ、智、象外に遊ぶ、終に此の機境に墮せざることを。然りと雖も、冬至寒食一百五、前頭大いに雪の在るあり。

結夏、「直下に承當するも、鐵圍是れ險にあらず、別に解會を求むるも、弱水未だ遙なりとせず。若し也た眼戸に挂けず、意玄に停めざるも、影響の流、又持論し難し。所以に福山尋常、敢て諸人に錯誤すること一絲毫許りもせざることは、蓋し冬寒く夏熱く、東土一同、夜暗く晝明かなることは、西天に異ならざるが爲なり。是なることは即ち是なり、只だ那の蘭陀寺の如きんば、明日幾人有りてか結制せん。」拄杖を拈じ、卓一下して喝一喝。

冬至、徳山の棒、皮下に血なき底痛からず、臨濟の喝、耳根聰なき底聞かず。若し也た痛を知得し、聞を聰得せば、正に是れ沙尾頭を曝し、蘆根鬪を鍛ぐ。衲僧家、上攀仰なく、下已躬を絶す。玄機を未兆に戢め、冥運を即化に藏す。騰騰任運、蕩蕩拘なし、豈に寒暑の變遷に屬せんや、甚の陰陽消長をか管せん。饒ひ伊れ是の如くなるも、福山也た未だ爾を許さざることあり。何が故ぞ。一冬二冬又手當智。

解夏、僧問ふ、「棒頭に薦得するも未だ是れ作家にあらず、喝下に承當するも猶ほ鈍漢となす。此の二途を去つて、乞ふ師方便せよ。」師云く、「退後退後。」僧云く、「謂つべし、是れ蘆花兩岸の雪、江水一天の秋と。」師云く、「事を聴くこと真ならざれば、鐘を喚んで甕となす。」僧云く、「記得す、僧、古徳に問ふ、「正恁麼に來る時如何。」云く、「金剛鐵券を鑄る」と、意旨如何。」師云く、「帽を買ふに頭を相す。」僧云く、「一向に恁麼に去る時如何。」云く、「道士倒に驢に騎る。」又作麼生。」師云く、「席を像つて令を打す。」僧云く、「恁麼、不恁麼の時如何。」師云く、「甜瓜は蒂に徹して甜し。」僧云く、「恁麼、卻つて恁麼の時如何。」師云く、「苦瓠は根に連つて苦し。」僧云く、「總に不恁麼の時如何。」師云く、「百雜碎。」僧云く、「只だ一夏已に過ぎて布袋頭開くが如きんば、親切の一句如何が垂示せん。」師云く、「石鏡を懸くるを勞せず、天曉けて自ら鶏鳴。」僧云く、「與麼なる時は即ち柳標横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去る。」師云く、「脚跟下好し三十を與ふるに。」乃ち云く、「三世の諸佛あることを知らず、眞、偽を掩はず、狸奴白牯卻つて有ることを知る。曲、直を藏さず、來由ありて準的なし。恁麼も也た得たり、

不恧麼も也た得たり、恧麼不恧麼總に得ず。座盤に和して一掲に掲翻す。便ち見る、地、八維を絶し、天、四壁なきことを。拄杖頭邊、此土西天、艸鞋跟底、閣浮檀特。然りと雖も、此れ猶ほ是れ衲僧、尋常の遊戯、只だ九十日の内、諸人所修所證の如きんば、親切底の事作麼生。喝一喝して、「我れは荒草裏に行き、汝は又深村に入る。」

除夜、「臘は更籌を逐ふて盡き、春は斗柄に隨つて回る。寒暄一夜隔り、客鬢兩年催す。與麼與麼、滴水滴凍、徹骨の寒威、不與麼不與麼、春幽谷に回つて和氣熙熙たり。與麼不與麼。」拄杖を拈じて云く、「大いなる哉乾元新歳の曆、天然の奇格去年の梅。」卓一下。

冬至、「畫榜堂前、灰を篩ひ鬼を厭ふ、菓卓を撥退して、陣を突き旗を争ふ。豈に知らんや、朕兆未分已前、一毫も了に差互なきことを。衲僧家、智、象外に遊び、妙、環中に契ふ、時に隨つて寒暑任運、西東騫到渾べて伎倆なし。窮まるときは即ち變じ、變するときは即ち通ず。水の水に入るが如く、空の空を藏すに似たり。」拄杖を拈じて云く、「從前の汗馬人の識るなし、卻つて重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。」

解夏、擧す、僧、趙州に問ふ、「承はり聞く、和尚親しく南泉に見ゆと、是なりや否や。」州云く、「鎮州に蘿蔔頭を出す。」師云く、「蘿蔔親しく曾て鎮州より出づ、門前千古路悠悠、朝朝暮暮人來去す、幾箇か親しく曾て地頭に到る。」

小參終

法語

龜山法皇に上る

佛祖の大事、明白徑截、相を離れ名を離れて、唯だ大智願を貴ぶ。大力量の人、纖塵未動已前に於て、猛に精彩を著く。一提に提得して便ち見る古今に輝赫し、天地を照耀するを。大にしては九有に梯杭し、四生に津濟たり、小にしては語黙動靜、俯仰折旋、左右原に逢ひ、遠近的に中らずといふとなし。所謂大人、大見を具し、大智、大用を得ることは是れなり。若し也た智願微に、力量小なるときは、情塵に循ひ世網に纏はられて、勇んで自ら決裂すること能はず。夫の探集を務め、見知を衒ひ、詞辯を逞し、精魂を弄し、頓に自ら休歇すること能はざることは、皆當面に蹉過するものなり。故に達磨大師、梁皇に對して、只だ箇の「不識と道ふ、無業唯だ云ふ、莫妄想と。後來或は又を擧げ、地を打し、指を豎て、拂を豎て、棒を行じ、喝を行じて、種々慈を垂る。觀面提持するに

①龜山法皇。人皇九十九代、後二條院嘉元三年九月十五日崩御。

②不識。梁武帝、達磨大師に問ふ、「如何なるか聖諦第一義。」磨云く、「廓然無聖。」帝曰く、「朕に對するものは誰ぞ。」磨曰く、「不識。」

③無業。汾州無業國師曰く、凡そ請問あれば只だ莫妄想と答ふ。

④擧叉。南岳下四世、五台山秘魔窟和尚、常に一の木叉を持して、僧の來つて禮拜するを見、即ち頭を叉却して曰く、「那箇の魔魅か汝を出家せしむ、那箇の魔魅か汝をして行

非ずといふことなし、人の直下に便ち領せんことを要す。豈に肯て二に落ち三に落ちんや。仰ぎ惟みれば、陛下、記を靈山に受け、海宇を統御して、累劫の熏習、信を宗乘に篤うす。茲に問を賜ふことを蒙て、誠に菲薄を媿づ。謾に管見を以て槩陳すること右の如し。

天縱の聖、悟は師に由らず、正眼豁開し、全機獨脱するときは、則ち一切處一切時、聖子を導養し、天下を光宅し、日に萬機に應じ、物を開き務を成すに至る。本有光明の妙用、佛祖向上の一若に非ずといふことなし。外此れ別に求めば、則ち所謂道に非ず矣。

相州太守に示す

即心即佛の一轉語、眞に是れ渾鋼鑄就す。如今此の旨を明めんと欲せば、但だ正信を存し、心、決定を具し、志、應酬事物、折旋俯仰、行住坐臥、飲食起居、一切處一切時に於て、常常提撕し、反覆究觀し、常に身心をして虚豁ならしめば、正念現前し、久久の間に、必然として心體廓然たらん。雲開いて日明かに、塵盡きて鏡明かなるが如く、直下に疑滞な

脚せしむ、道ひ得るも又又下に死せしめ、道ひ得ざるも又又下に死せしめん、速に道へ速に道へ、云云。」

打地。忻州打地和尙、江西に旨を領じて常に其の名を晦ます、凡そ學者問を致さば、唯だ棒を以て地を打つて之を示す、時に之を打地和尙云ふ、一日僧に棒を藏却せらる、然して後問を致す、師但だ其の口を張る。

堅指。俱胝和尙、凡そ所問あれば一指を堅つ、師臨終、衆に謂つて曰く、「我れ天龍の一指頭の禪を得て、一生受用不盡。」即ち一指を堅てて逝す。

豎拂。青原因に石頭に參す、師問ふ、「甚れの所より来る。」石曰く、「曹溪より来る。」師、拂子を豎起す。

行棒。徳山、凡そ僧の門に入るあれば便ち棒す。

即心即佛。馬祖因に大梅に問ふ、「如何なるか是れ佛。」祖曰く、「即心即佛。」

るべし。況んや此の心本來明妙、蓋し無始無明、妄想執著に由る、所以に昏蔽なり。若し一旦洞徹するときは、則ち諸佛と無二無別ならん。從上の佛祖、世に出興して種種化誘し、衆生をして此の心を明了ならしむるに過ぎざるのみ。但だ學道の人、根に利鈍あり、縁に淺深あり。上根利智の若きは、一聞千悟、家堂を穩鎮して、更に何の事か有らん。中下の機の如きは、當に勉めて自ら修習すべし。仰山和尙の所謂、若し安禪靜慮せずんば、者裏に到つて、總に須らく茫然たるべしと、是れなり。然も安禪の時、必ず二障あり、一に謂ふ、昏沈睡眠、二に謂ふ、雜想變亂。此の障起る時、只だ箇の即心即佛を提げて、便ち一竅に截斷す可し、又心を將つて湊泊すべからず、意を用つて搏量すべからず、緩にすべからず急にすべからず、又自ら疑慮を生ずべからず。我が塵俗の身心、如何が便ち是れ佛と言はん、又預め憂ふべからず、此の心如何が便ち明了を得ん。才に此の念あれば、便ち障道を成す、但だ請ふ此の如く功を用ひば、忽然として築著磕著せん。直下に桶子底の脱するが如く一番せば、妨げず是れ箇の了事の大丈夫なることを。古人云く、但だ肯て辨ぜよ、必ず相賺さざれと。

雲州禪門慧徧に示す

一心無事なれば萬境生ぜず、心境虚融せば聖凡何ぞあらん。聖凡情盡き、體露眞常、體虚空の如眞常本寂、三界の出づべきなく、菩提の求むべきなし。一道空平、迥然として獨脱、之を寶王三

味と謂ひ、亦大總持門と名く。祖師門下之を金剛王寶劍と謂ふ、之を得る者其れ善く護持せよ。喝。

義則侍者に示す

則侍者、母の訃を以て至り、別れを言ふて里に還る。紙を袖にして語を
覓む。余が曰く、「汝、侍所に居ること一年、旦暮相従ふ。豈に知らざらん
や、山僧元語句なきことを。今乃ち之を求めば、是れ我れを知らざるなり。」
之を叩くこと愈力む、因つて虚空を借りて口と爲して、以て之に問ふ。「汝
會て漸源、道吾の侍者と爲り、因つて同じく往いて弔慰す。生死の話を擧
して、道吾、拳頭を用ふる底の消息を聞くや否や。」則云く、「某甲粗知る、
只だ是れ敢て造次ならず。」余が曰く、「大丈夫、虎鬚を捋づ、也た是れ尋常、
今既に未だ能はず、且く去つて、北堂元會て死せざる底の面目を見得して
分曉ならば、妨げず再來一著を慥暴せしむることを、山僧那時又別に區處
を作さん。」

良眞首座に示す

絲毫の係念、三塗の業因、譬爾として情生すれば萬劫の羈鎖、直に絲毫
淨盡、一念不生なることを得るも、未だ是れ衲僧行履の處にあらず。衲僧

生死話を擧す。潭州漸源仲興
禪師、道吾の會下に在つて侍
者となる、一日吾に侍して檀
越家に往いて弔慰す、師、棺
を撫して曰く、「生耶死耶、吾
曰く、「生さも道はじ死さも道
はじ、師云く、「其麼さしてか
道はざる、吾曰く、「道はじ道
はじ、師歸つて中路に至つて、
師云く、「和尚今日須らく某甲
が爲に道へ、若し道はずんば
和尚を打し去らん、吾曰く、
「打つ、こは打つに任す、道ふ
こは即ち道はじ、師便ち吾
を打つ、院に歸つて曰く、「汝
宜しく此を離れて去るべし、
恐らくは知事知ることを得ば
不便ならん、師乃ち禮辭して
村落に離れて三年を経、後大
悟す云云、五燈曾元五に出づ。

家、一法を取らず、一法を捨てず、眼裏に見、耳裏に聞く。若し智眼明かならずんば、區宇に墮在せ
ん。者裏能く道理なき處に向つて、放心捨命、一回再甦せば、起き來つて心眼清寒、隨處に自在なら
ん。若し也た稍遅回に涉らば、便ち石火中に向つて參取せよ。咄。

法語終

拈古

梁の武帝、達磨大師に問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」磨云く、「廓然無聖。」帝云く、「朕に對する者は誰ぞ。」磨云く、「不識。」

大小の祖師、力を盡して道ひ得ず、未だ麻繩紙裏することを免れず。僧、谷隱慈照禪師に問ふ、「如何なるか是れ道。」照云く、「臘月二十日。」

是なることは則ち是、王言絲の如く、其の出づること綸の如し。若し不言を以て化し、無爲にして治めば、之を輓ずること即ち遠し。

僧、雲門大師に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」圓悟拈じて云く、「天寧は即ち然らず、如何なるか是れ諸佛出身の處と問ふものあらば、只だ佗に向つて道はん、薰風自南來、殿閣生微涼と。」大慧聞き得て豁然として悟る。

掣電の機懸河の辯は、佗の跛脚の阿師、包齒の老漢に還す。若し是れ諸佛出身の處ならば、直に是れ天地遠遠。只だ大慧の如きんば、甚に因つてか悟り去る。道ふことを見ずや、物見て主眼卓

①拈古。即ち拈提と同じ、古則を拈弄することなり、東山外集に曰く、「建祖禪人、東山に拈古を問ふ、山曰く、拈古の法は他なし、只だ眼正しくして古人に出づる手段ある事を要す、若し又古人の田地に到るのみならば、亦他底を動ずることを得ず云云。」

堅す。

②藥山和尚、雲巖・道吾と同じく遊山する次で、樹二株を見る、一は枯れ一は榮ゆ。山遂に問

ふ、「榮者が是か枯者が是か。」雲巖云く、「榮者は。」山云く、「灼然として一切意、光明燦爛として去らん。」又道吾に問ふ、吾云く、「枯者は。」山云く、「一切處、枯淡にし去らん。」高沙彌忽ち到る、遂に高に問ふ、高云く、「榮

者は從佗あれ自ら榮え、枯者は從佗あれ自ら枯る。」山云く、「不是不是。」樂は其れ知んぬ可し、始めて作るときに翁如たり、縦すときに純如たり、

微如たり、經如たり、以て成ることを。

僧、風穴和尚に問ふ、「語黙、離微に涉る、如何が不犯を通ぜん。」穴云く、「常に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」雪竇和尚云く、「曾て人

の雪竇に問ふもの有らば、只だ佗に對して道はん、劈腹剜心と。又作麼生。復た云く、「風に因つて火を吹く、別に是れ一家、籠を傷つけ龜を怒すこと

は、必ず應に主あるべし。」

勇、賁育の如く、智、良平の如し。二大老固に是れ作家の手段、若し離微を犯さざることを要せば、也た恐らくは未在。且く作麼生か不犯を得ん、明日來れ汝に向つて道はん。

③藥山。澧州藥山性儼禪師、法を青原下二世石頭に嗣ぐ、五燈會元卷五に詳にあり。
④雲巖。潭州雲巖曇晟禪師を云ふ、百丈に參する、二十二年、機縁契はず、終に藥山に行きて嗣法す。
⑤道吾。潭州道吾宗智禪師、法を藥山に嗣ぐ。
⑥高沙彌。藥山禪師に嗣法す。
⑦賁育。孟賁、夏育の二人、共に古の勇者なり、戰國策にも、「烏獲之力而死、賁育之車死」とあり。
⑧良平。漢の張良、陳平、共に漢の謀臣なり。

臨濟、徳山に侍立する次で、山云く、「老僧今日困ず。」濟云く、「老漢寐語、作麼生。」山、棒を拈せんと擬す、濟便ち禪牀を掀倒す。

諸人會すや、二老漢、小を争ふて大を失す。

僧、投子和尙に問ふ、「如何なるか是れ十身調御。」投子、禪牀を下つて立つ。

投子老人、僧に一間せられて、直に得たり身を起し地に立つことを。若し是れ十身調御ならば、

大いに齧を持して海を酌み、草を折つて空を量るに似たり。

文殊、三處に夏を度る、迦葉白椎して文殊を擲出せんと欲す。方に椎を拈ずる次で、乃ち百千の文

殊を見る、椎擧ぐることを能はず。世尊云く、「迦葉、汝那箇の文殊をか擲せんと擬す。」迦葉對なし。

一朝權手に在り、令行ずる時を看取せよ。迦葉未だ曾て椎を擧せず、黃面の老漢、文殊大士、已

に俱に擲出したる。甚麼の那箇を擲せんと擬すとか説かん。然も是の如くなりと雖も、法を盡

せば民なし。且く一著を放過せよ。

拈古終

頌古

洞山 麻三斤

鐵蒺藜 榫當面に擲つ、忽忙として首を回せば已に遲遲。春光眼に滿ちて花笑を含み、東君に問著

すれば總に知らず。

瑞巖 主人翁

自ら呼び自ら應ふ來由あり、傍觀を引き得て笑ひ休せず。盡く謂ふ莊周

胡蝶を夢むと、誰か知らん胡蝶莊周を夢みること。

心不是佛、智不是道

年去り年來りて舊又新、雪消し風暖にして自ら春を回す。蓬頭垢面時

に隨つて過ぐ、佛祖從來人を度せず。

日面佛 月面佛

羞らくは菱花に對して鬢雲を整ふことを、玉顏二八正に春に嬌ぶ。風に傷られて咳嗽す尋常の事、

卻つて虚勞と作つて人に説向す。

①麻三斤。洞山和尙、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」山曰く、「麻三斤。」
②主人翁。瑞巖和尙、常に盤石の上に坐して自ら主人公と呼び、自ら應諾して惺惺著云々、前に已に掲ぐ。

●國師三たび侍者を喚ぶ

門外の羊腸世路危し、綢繆寧ろ免れんや家私を語ることを。然も毫髪も留隱なしと雖も、肝膽楚越の時を防ぎ難し。

●玄・紹二上座、烏白に參す

電火裏白刃縦横、石火中紅旗閃爍。人をして長く李將軍を憶はしむ、一箭雙鵰手に随つて落つ。

●萬法と侶たらず、是れ何物ぞ

一口に吸盡す西江水、四海五湖皇化の裏。官酒を喫了つて官街に臥す、起き來つて箇の邏邏哩を唱ふ。

●大家相聚りて莖蓋を喫す

大家相聚りて莖蓋を喫す、路は門前にあり自ら迷ふこと莫れ。臺榭綠陰人寂寂、風光は元是れ武陵溪。

●萬里寸草なし、門を出づれば便ち是れ草

孤鶴冷翹す松頂の風、片雲忽ち過ぐ大虚空、衲僧の動止渾べて無碍、肯て它家荒草の中に落ちんや。

●風頭稍硬し、且く暖處に歸つて商量せよ

玉帳沈沈として巧に籌を運す、安南塞北全く收めんと要す。當時若し英雄の漢あらば、鼓を奮ひ旗を争ふて未だ肯て休せず。

●居一切時、不起妄念

千峰雨過ぎて寒翠を瞻る、萬木霜餘落紅を見る。飲啄縁に随つて時節を過す、誰か知らん身は太平の中に在ることを。

●婆子、趙州の筭を偷む

蒼龍頭上角を撈折す、猛虎口中牙を抜得す。是れ渠儂が意氣を張るにあらず、相逢ひ正に遇ふ惡冤家。

●京師に大黃を出す

古本方書世に行ふの醫、臭腐を將つて神奇と作すに慣ふ。生を回し死を起す些兒の妙、盧扁耆婆未だ知ることを得ず。

頌 古終

●國師三喚。六祖大師の法嗣慧中國師、三度侍者を呼び、侍者三度應諾す、國師云く、「將に請へり、吾れ汝に辜負することな、元來却つて是れ汝吾れに辜負す」。●不與萬法。龐居士、馬祖に參す、一日問うて曰く「萬法を侶たらざるものはれ什麼人ぞ、祖曰く「汝が一口に西江水を吸盡せんことを待つて、即ち汝に向つて曰はん、「士言下に玄旨を領す」。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄卷下

偈頌

古源

一川虛漾漾、流注知んぬ、幾劫塵をか經ん。桃小紅を破つて春岸に著く、曾て路に秦人に接する無かるべし。

儉上人の郷に還るを送る

特さくち地こんてう今朝又程を問ふ、扶桑未だ必ずしも東溟とうめいに在らず。南朝四百八十寺、那いづれの處か春山草青からざる。

梅峰

大庾嶺頭根種別なり、氷肌玉骨自ら天真。曉來孤頂雪深き處、五葉一花天地の春。

畢世面壁 扁

蒙頭一柄餘年を送る、百煉の精金色轉あせた鮮あざかなり。卻かへつて是れ老胡元會せず、人の雙臂さうひを誤あやまつて完

全ならず。

夢庵

一枕の羅窓萬境閒なり、槐宮は元人寰げんじんくわんに異ならず。若し門壁もんへきに於て、心字しんじを書せば、又黃梁未熟じやくあひだの間にあり。

雪中、均侍者の京に歸るを送る

漫空衰衰として六花新なり、短策肩に横よこへて遠く津を問ふ。一色明邊歩いっしきみやうへんあゆみを移し得たり、東風桃李浴城の春。

險崖

峭峻せうしゆんたる一方窺ふことを得ず、紛紛ふんふん研額けんかくして但ただだ空しく回かへる。上頭じやうとう更に孤危こきの處あり、手を撒さして渠かが親したしく到來たらいせんことを要えうす。

準侍者じゆんじしやを送る

眼光がんくわう遙はるかに海色かいしきに映えいじて碧みどりなり、短策たんさく秋を陵しのいで又東またひがしに向ふ。若し諸方しよほうに對たいして來歷らいれきを話かたらば、言ふこと莫なれ相見しやうけん途中ちゆうちゆうに在りと。

師齊しせい禪人ぜんにん、師しを省せいするを送る

見けんは師しと齊せいしうして師德しとくを滅めんず、紛紛ふんふんたる佛祖ぶつそ是れ何人なんびとぞ。行行かうかう高く踏ふむ毗盧びろの頂いたで、花柳かりゅう洛陽らくやう三月

①心字。昔し一老僧あり、庵の門上に心の字を書し、窓上にも心の字を書し、壁上にも又心の字を書す。

①古源。桃花源のこころ詠じたもの。

の春。

密室

六窓深く閉ぢて豈に開くべけんや、佛眼未だ窺はず亦自ら迷ふ。既に是れ曾て水泄を通ぜず、曾郎謾に道ふ爛れて泥の如しと。

寒潭

直下窺ふ時深きこと萬丈、冷水氷地瀾を生ぜず。霜天夜廻にして月壁を沈む、未だ許さず蒼龍の此に屈蟠することを。

南山

碧羅浮に聳ゆ更に那邊、空に倚る孤峻躋攀を絶す。霏霏たる密霧玄豹を隠す、眼を著けて誰か曾て一斑を見ん。

雪心

紛飛盡くる處 自ら明白、内外中間謾に求むること莫れ。夜半腰に齊しうして人見えす、三星聯り照して月鉤の如し。

字堂

濃研香墨霜毫を蘸、揮洒軒に當つて意氣豪なり。一點空中八法に誇る、睦州の門戸未だ高しと

せず。

古樵

斧鈍く柯消して春を記せず、一肩の枯燥重きこと千鈞。笑ふ他の當日嶺南の猿、低價門に沿ふて人に 掬與す。

鐵船

六州の頑と鈍とを收拾して、潑天の爐鞴巧に鎔し成す。時に乗じて含靈を運濟し去る、華亭月明を載するに似かず。

無相

九十七種元有に非ず、誰か言ふ千百億分身と。更に色後聲前に於て覓めば、舜若多神笑轉た新なり。

石門

巖崖の險しき處 重關を立つ、確は實に須らく知るべし入作の難きことを。一撈東西兩扇と成る、莓苔路滑にして雨初めて乾く。

少林

面壁人歸つて歲月移る、叢叢の寒樹半ば枝無し。霜に凋む萬葉血よずも紅なり、又是れ魂驚く斷臂の時。

雨夜の作

一秋長に是れ雨淋零、點滴空塔夜夜の聲。三十餘年江海の夢、博山煙斷えて一燈明かなり。

雪夜の作

寒は添ふ少室齊腰の恨、凍は結ぶ鰲山客路の情。一夜窓を打して聲浙瀝、又間事に因つて無明を長ず。

紅白梅

然翁禾上の韻を和す

花五葉に開いて韶光に媚ぶ、艶質同じと雖も卻つて粧異なり。是れ枝南北に分つ後なる可し、搽坯抹粉馨香を鬪す。

四時般若

品物陽和

暖風晴日山川媚ぶ、細雨輕煙草木薰ず。活意明明委せざるが如し、桃花羞ぢ見ん老靈雲。

園林清暑

殿閣薰風日正に長し、綠槐紅藕林塘に徧し。言ふこと莫れ人世炎蒸甚だしと、馳求を歇得すれば心自ら涼し。

萬里清光

爽籟蕭蕭として玉宇寬し、桂花芬馥として月輪圓なり。韶陽體露金風の句、知んぬ是れ何人か擧し得て全し。

千峰寒色

雪霽れて層巒争ふて玉を聳す、曉風高く拂ふて凍雲開く。瑤英滿樹天香遠し、一夜清寒骨に徹し來る。

獨脫無依

萬物既に唯だ我れ、^①倏然として只だ自由。宗乘竟に何か有る、佛祖是れ怨讎。天は闊し孤雲の晚、風は高し一鶚の秋。寥寥として閒に目を送る、

①倏然。疾きことなり。

②慈濟庵。庵は昔年京師粟田口、華頂山下にあり、三河阿闍梨の開創地なり。

隨流得妙

手に信せて拈じ來つて用ふ、當機著著親し。烏藤夜鼠を驅り、白拂窓塵を拂ふ。池靜にして魚の樂しむを知り、松疎にして鶴の身を見る。絲毫も曾て問てず、眼を開けば迷人あり。

正和丙辰立春の日

太上皇、^③慈濟庵に幸したまふ。謾に野語を成し、上奏すと云ふ。

庵を結んで聊か爲に衰殘を養ふ、敢て望まんなや。皇明の野音を顧みること。陋巷の士民寶仗を

瞻、近鄰の兒女、堯顔を覲る。和融せる陽煦寒谷に生じ、赫奕たる衣冠掩關に耀く。睿恩を感荷して三祝して願ふ、福は東海に同じく壽は南山。

御製和 卽席

河東を瞻覲して此の庵に到る、載めて陽にして雪盡く路邊の菅、參禪夜に向つて間坐を訪ひ、慈濟春を迎へて老顔に謁す。花色水聲意地に通じ、臘梅寒樹、悉く機關、靈光今照して天外従す、新月始めて昇る牆上の山。

陽明里前博陸甲第

異邦の珍玩妙莊嚴、花柳春に逢ふて滿院芳し。法元來内外に非ず、更に何れの處に於てか西方を覓む。

銀青光祿大夫有忠卿、立春の韻

盤に堆き青菜佳節に醗ゆ、漸く見る南枝小梅拆くことを。名卿に坐對して兩つながら語なし、唯だ華髮を將つて高才に伴ふ。

十牛の圖に和す、并に序

十牛の圖は、古宿途轍なき中の途轍なり。若し此の事を論せば、眉毛を脰上して、早く已に蹉過す、況んや淺深次第の異なるをや。然れども聖を去ること逾遠くして、法、危末に當る。

根性優劣多く、機用遲速あり、又一槩に之を定むべからず。故に未だ免れず曲設多方、以て之を誘掖することを。此の圖の作れることは是耶。此の微旨を究め、各各安樂休歇の地に至つて、以て自利利人すべし。此の圖後來世に布く、諸老頌する者、和する者頗る多し。今山僧揣らず、貂を諸老の後に續ぐ。覽者諷に一笑を發せよと云ふのみ。

尋牛

本形跡の求尋すべきなし、雲樹蒼蒼として煙艸深し。脚下然も岐路別なりと雖も、巖前の枯木自ら龍吟。

見跡

艸窠裏に走る路何ぞ多き、只だ此の蹄跡是なること莫き麼。脚力窮る邊重ねて歩を進む、昂昂たる頭角佗に逢はんと要す。

見牛

風暖なり幽禽枝上の聲、雨餘の原艸色尤も青し。者の回已に渠が頭面を覲る、戴氏が毫端も寫し成らず。

得牛

鼻孔遼天渠を拽轉す、今より狂逸の性須らく除くべし。雪山の香艸煙に和して細し、且く要す驅り

御製。後宇多院天皇なり。
河東。鴨川の東南禪寺の境内。
陽明。近衛公第なり、博陸は攝政をいふ。こゝには近衛家平公を指す、公は正和二年七月間白に任じ、同四年九月二十一日罷む。
銀青。銀色香綬の約、漢代に光祿大夫の佩びたるもの。光祿大夫は宮殿禁門の事を掌る職。和名春宮大夫、有忠は六條家の三代なり。

蹄跡。牛馬の足あと。
戴。戴嵩、牛の畫の名人。

來つて此に向つて居せんことを。

牧牛

時に随つて水艸渠が身を活す、純淨何ぞ曾て一塵を染めん。苗稼自然に混じ犯さず、收來放去却つて人に由る。

騎牛還家

羸牛已に純にして却つて家に回る、樹下の柴門暮霞を啓く。放教あれ駒駒として欄裏に臥す、靜に看る新月の簷牙に挂るを。

忘牛存人

簾笠茲れより山に入らず、鞭繩抛却して一身間なり。更に穀舂の牽拽に勞するなし、羸ち得て謳歌す翠靄の間。

人牛俱忘

一念空する時萬境空す、重重の關隔豁然として通ず。東西南北了に跡なし、只だ此の虛玄正宗に合ふ。

返本還源

既然無作何の功か有る、眼見て盲の如く聽いて聾に似たり。澗水漉として藍色の碧なるが如く、山

花開いて錦機の紅なるに似なり。

入廊垂手

毛皮を換却して歩を轉じ來る、鳥背と魚腮とに依稀たり。通身固に是れ泥水に混す、我が此の宗門大いに開かんことを要す。

山中四威儀

大体和尙の韻に和す

山中の行、艸鞋跟斷えて脚頭輕し。閒情を縦にす、眼裏の風光耳裏の聲。悠然として心跡既に雙清、歩歩是れ證明に非ずといふことなし。

山中の住、間踪只だ孤雲の寓するに似たり。門前の路、艸没し苦荒みて渾べて顧みず。客到れば灰を撥つて半芋を分つ、懶殘特地に鹽醋に傷らる。

山中の坐、六門用ひず重關を鎖すとを。誰か我れに似たり、獨り雲峰の千葉。朶に對す。雪夜若し人臂の墮するなくんば、面壁の胡僧懣懣を成さん。

山中の臥、松根石榻平かにして座の如し。造作に非ず、黒甜境裏乾坤大なり。只だ齋公の者箇を知るあり、齋店當年曾て説破す。

偈頌終

① 大休。諱は正念、宋僧にして東來す、石溪月に嗣ぐ、松源三世、鎌倉淨智寺開山、圓覺二世、建長三世。

② 懶殘。俗に芋懶瓊といふ。

③ 朶。「えた」なり。

④ 齋公。巖頭の諱は全齋なり。

贊佛祖

出山の相

門裏に身を出すことは易く、身裏に門を出づることは難し。六年折合なし、北斗南に面つて看る。

頭陀の相

錫を持し盃を擎げ去つて分衛、七佛の儀式豈に是の如くならんや。増金の面皮特地に黄なり、人を瞞ずる手脚全く敗露。

觀音大士

大圓鏡に立つて、如來藏を空す。動靜の相生せず、音聞性俱に淨し、斷崖流水頭を低れて聽く。海上に蓮舟を踏み、俯視す水中の月。一滴楊枝の雨、清涼塵刹に徧し、是れ普門の境なることなしや。咄。

補陀巖上の人、現身三十二。我れと同じく東溟を涉り、三摩地を離れず。

文殊大士

女子の定を出し、維摩の默に對す。吒憇の金毛、更に須らく返擲すべし。

普賢大士

如是經を轉じ、五濁の迷を開く。截流の香象、猶ほ淤泥に溺る。

達磨大師

風飄飄として衣を吹き、一葦に航して之を安んず。教化別傳兮法なし、梁に遊び魏を歴て兮奚をか爲す。

①形埒。「あかきには」の「こ」と、梁の朝廷をいふ。

十萬迢迢として遼漠を渡る、卻つて梁皇に對して醜惡を呈す。既に平地に波瀾を起してより、知らず袈裟角を打濕することを。

西來行路錯、御に對して口を開く錯。長江風浪轟し、少林花木落つ、更に言ふ傳法迷情を救ふと。

錯錯。

①形埒語を出して天聽に忤ふ、國を去つて身一葉の輕さが如し。揚子の大江東に去る水、今に至るまで風激す怒濤の聲。

布袋和尚

露曾坦腹、醜を舉止に弄す。一般に是れ小兒の戲なりと雖も、兜率陀天を打失する底。滯貨貨售らず、等人人來らず。慈坐布袋に靠る、笑口誰が爲にか開く。

寶誌和尚

杖刀尺を挑げて塵中に走る、善竊如何が脚手を露さん。良いかな十二面觀音、生は鷹巢に在り。 鷹巢は龍阜。

魚籃

色を以て盲聾を誑す、誰か知らん伎已に窮ることを。籃中活底なし、徧界腥風を扇ぐ。

馬郎婦

雲鬢亂れて縦横、悲みは深し一寸の情。金沙灘上の月、長く照す誦經の

聲。

寒拾

澗泉墨を研いて苔石を汗す、斷壁詩を題して鮮紋を雜ふ。好句依然とし

て顯すことを得ず、峩眉山の月五臺の雲。

缸子和尙

數曲の漁歌和する者稀なり、華亭江上自ら透進。舟を艤し手を袖にす風林の下、冷俐の閑梨未到

の時。

玄沙和尙

雨笠煙蓑一釣篷、蘆花深き處從容を得たり。螺臺江景窮りなき樂み、路を借つて如何が雪峰に

上らん。

猪頭和尙

古佛應現すと雖も、敗缺殊に少からず。滋味苦だ多きことなく、粗澹飽を得易し。時の人を引き得

て、口を開いて笑はしむ。

蜆子和尙

三文の撈波、東撈西撈。咄。者の窮鬼、蝦を以て目と爲す。

政黄牛

午夜頻に呼ぶ熟炙の時、人に可なる風味誰か知ることを許す。朝來牛背新句を得たり、驚起す溪頭

の白鷺鷥。

郁山主

溪橋一擲兩眉横ふ、瓦礫拈じ來つて夜光と作す。脚下今に至るまで浮逼逼、寒驢間に跨つて斜陽を

踏む。

朝陽

間處些の工夫を著く、急時須らく受用を得べし。敗壞を以て敗壞を補ふ、金烏曉に東より涌く。

對月

言言月を標するの指、句句啼を止むるの黄葉。了義と不了義と、玉兔夜西に従つて没す。

亮座主

虚空に講經を聞き、西山に入つて冷坐す。首を回せば若石空し、熊措大を疑殺す。

智覺禪師

大法の盟主、衆生の導師。向上の事を以て、法眼の宗派を起す。無礙の智を以て、佛祖の玄微を發す。落落たる慈舟苦海に横はり、輝輝たる宗鏡群迷を燦す。定身淨域に歸り、冥帝慈儀を禮す。光明千古、西湖の水、宗旨の發揮盡くる時なし。

密庵和尚

行脚錯つて人に逢ふ、投機の語未だ親しからず。却つて正法眼を將つて、喚んで破沙盆と作す。雷を轟し電を制す、乾を旋し坤を轉す。東山正續の統を大いにして、濟北瞎驢の群を空しうす。箇箇巴鼻なきことは、只だ渠儂が腦門なきが爲なり。

癡絶祖翁

蜀を離れて已に列祖の業を領す、南に到つて深く曹源の毒に中る。但だ窮相一雙の手をみして、諸方に向つて妙に搜抉するに慣ふ。法性海寛うして波瀾闊し、一生妙に轉ず風雷の舌。始め秀水より

陵雲に至つて、五十餘年巨孽を興す。當機妙用翳睛の法、破沙盆に觸れて恣に除滅す。嬰兒行を行じて少缺なし、一片の身心鐵よりも堅し。王臣多く居す弟子の列、老い去つて爲人尤も直截。我れ慚づ府昧の餘烈に嗣ぐことを、西の方玉山を望めば心屢折く。

頑極先師

憶ふ昔伊に逢ふ鄂嶺の頭、端なく我れと冤讎を結ぶ。今朝海上重ねて相見、彼此遮り難し滿面の羞。

蘭溪和尚

英長老の請

南詢西蜀を離れ、傳法東國に來る。濟北の濤瀾を鼓し、無明の惡毒を肆にす。龜毛握に在り兮、佛祖畏避す。頂門四照兮、人天悅服す。是れを此土禪宗の初祖と謂ふ。故に教旨之に諡して大覺と曰ふ、宗風自ら英賢の續くあり。

千光法師

氣貌清靜、德行虛奇、西に游んで黃龍下の尊宿、老虛室の旨を得たり。東に歸つて扶桑の盛時、兩代帝者の師と爲る。宏に三處の道場を開き、遠く千古の清規を貽す。其の平生潛行密行、眞に末世光明の勝幢なり。其の祖意教意に融通する、乃ち東方法道の著

- ① 陵雲。徑山の凌雲峯か。
- ② 頑極。明州青玉山の住持なり。
- ③ 無明。諱は慧性、松源岳に嗣ぐ、蘭溪の師なり。
- ④ 千光。榮西禪師、建仁開山なり、黃龍派の虛庵徹に嗣ぐ。
- ⑤ 兩代。土御門・順徳の二帝。
- ⑥ 三處。博多聖福、鎌倉壽福、京建仁の三なり。
- ⑦ 著龜。「うらなひ」「めぎきぐさ」稱じて模範、又は龜鑑などに用ふる語なり、「後學の著龜」と虚堂錄の九にあり。

龜なり。

無學和尚

風神清峻、氣宇宏豁、北碕の波瀾を跳出して、龍淵の鱗鬣を奮迅す。四十年宋土慈を放にし、七八載扶桑點を肆にす。出格の機を提げ、鎖口訣を用ふ。佛眼無門を覩はんと欲す、衲子雪ぎ難きの恨あり。龜毛の拂子手に信せて揮ふ、海岳掀翻して雷電掣す。臨濟の一宗、楊岐の正續、渠に陵滅せらる。別別、耿光千古塵刹を照す。

虛舟和尚

矍鑠たる精神、沈深たる器量、路を借つて青山に入る。無得の得を得、祖肩祖道を荷ふ。難行の行を行じ、冷泉の水榭底瀾を翻し、古龍の淵滔天浪を起す。四十年令吳越に行はれ、數萬里名海上に飛ぶ。夫れ是れを楊岐の直下、松源の的孫、虛舟和尚と謂ふ。

大休和尚

心絃よりも直にして、性火よりも急なり。天池の滴水を以て、東海の濤瀾を助翻す。楞嚴三昧を守つて、平時の功課を勤修す。三四處爲人全提、一平生清坐不臥。佛法の身心微なりと雖も、大いに

師僧の殃禍と作る。末後瑞鹿峯前、焯然として因を收め果を結ぶ。本形相の描貌すべきなし、今虚空を把つて強ひて彩畫す。龜谷山前、六を藏する處、傳芳を續ぐに英賢の者あり。

西澗和尚

小師正開の請

高明の氣節、清朗の容儀、太白の的嗣、冷泉の孫枝。唐土に在つて已に兩ひ鋪席を開き、扶桑に來つて重ねて爐鎚を運らす。大用の處佛祖を存せず、妙唱の時離微を犯さず。此れを大通の眞と謂はゞ、是れ錯つて渠を認む。大通の眞に非ずと謂はゞ、是れ伊を蹉過す。竹篋横に揮ふ處、又見る花の五葉を開く時。

鏡堂和尚

壯年蜀を離れ走つて唐に遊ぶ、藤杖芒鞋四方に徧し。太白峰前聳老に逢ふ、卻つて毒氣を傳へて扶桑に向ふ。

無關和尚

嬌嬌たる龍驤、眈眈たる虎視、聖一師の窮活計、蕩盡無餘、徐師叔の無口刀、用ひ得て正に快なり。三尺の竹篋横に揮ふ、大地風飛び雷厲し。是れを凌霄の的孫、南屏の家嗣と謂ふ。巍巍たる王臣の師、的的たる衲僧の殃害、

- ① 無學。祖元佛光國師、圓覺の開山、無準範に嗣ぐ。
- ② 北碕。居簡、佛照光に嗣ぐ、大惠三世なり。
- ③ 龍淵。徑山の方丈の銘なり、無準範禪師をいふ。
- ④ 虛舟。普度、竺三元妙道に嗣ぐ、道は横川瑛に嗣ぐ、瑛は滅翁禮に嗣ぐ、禮は松源岳に嗣ぐ、源は密庵傑に嗣ぐ。
- ⑤ 大休。諱は正念、救益佛源禪師、石溪心月の法嗣。
- ⑥ 天池。石溪禪師の塔局なり。

- ⑦ 藏六庵。大休の塔所、鐵倉絶谷にあり。
- ⑧ 西澗。子曇、石帆行に嗣ぐ、太白は天童をいふ、石帆の住するところ、冷泉は靈隱の名所なり、松源岳をいふ、曇は衍に嗣ぐ、衍は運庵岩に嗣ぐ、岩は岳に嗣ぐ、日本にては建長十一世、圓覺六世なり、滅後に大通禪師と諡す。
- ⑨ 鏡堂。圓は環溪一に嗣ぐ、一は無準範に嗣ぐ、建長に住す、七世なり、聳老は環溪をいふ。
- ⑩ 無關。字は普門、聖一爾に嗣ぐ、南禪寺開山、元亨釋書六に傳あり。
- ⑪ 慧日。東福寺の山號。

だ已ます。

葦航和尚

法中の傑、僧中の英、大覺の妙用を得て、濟北の法城を立つ。東州名山
廣く佛事を作す、巨福瑞鹿大いに嘉聲を振ふ。檀那の徳を欽する所、衲子
の誠を傾くる所、又其れ妙圓の智、耆頤の齡なり。又丹青に備ふべからざ
る者なり。

藏山和尚

雲心玉格實に瓌奇、披削先づ聖一師に依る。年少游方大覺に參じ、福山
多衆綱維を振ふ。十載徧く唐土に參ず、徑塢と思溪とを勘破す。一帆晚歲
郷國に回る、宗風四處力めて提持す。王臣悉く欽敬を生ず。緇素依歸
せずと云ふことなし。七十六年末後の句、八海枯れ九山崩る。無生の曲調
人の知ること少なり。

桃溪和尚

英明の氣宇、清朗の眉目、大覺の的生、無明の餘毒。西游して道を問ひ、知識に遇ふて名高く位高
し。東歸して山に住す、玄風を西國東國に播す。檀信歸崇、禪徒悅服す。小杉田に隠れ、兩ひ瑞鹿を

戸るに至つて、末後游戲去來す。直に是れ光明照燭、只だ箇の描貌し將ち來つて、永く人天の軌
則と爲る。

覺心和尙

無門喝下便宜に落つ、生涯を蕩盡して自ら知らず。赤手歸り來つて活業
を成す、東山五葉横枝を盛にす。御に對する時天顏喜悅し、全提の處衲
子眉を攢ひ。九十二年游戲するのみ、鷲峰千古碧巍巍たり。

高峰和尚

圓照叟の孫、無學翁の嗣、本色を以て住山し、眞慈を以て應世す。文武
火再び東方に輝く、鎖口訣重ねて此の地を挫ぐ。話は行はる巨福峯前、老
いて憩ふ金寶山内、更に東山の暗號あり、人争ふて擧揚す。又中峯の沙盆
を提げて、手に信せて撲碎す。夫れ是れを眞の濟北直下の子孫と謂ふ、扶
桑國大いに別傳の宗旨を振ふ者なり。

規庵和尚

春空の雲、秋水の月、舒卷高間、光明澄潔なり。法道の龜鑑、僧中の
奇傑、早く龍江老子に依る。割草の機に契ふて、便ち超方の志を具す、後佛光佛心に待す。棒喝下妙に

葦航。道然、建長六世、圓覺
五世に住す、大覺に嗣ぐ、信
州の人、正安三年十二月六日
寂す、濟北は虎關師鍊をいふ。
藏山。順空、聖一に嗣ぐ、宋
に入りて石林叢に依る、徑塢
は徑山辭世の偈に云く、「無生
一曲、調入三指端、九山崩倒、
八海枯乾。」延慶元年五月九日
寂す、壽七十六、瓌は「うるは
しきたま」なり。
桃溪。徳悟、大覺に嗣ぐ、圓
覺四世なり。

覺心。字は心地、後醍醐天皇、
法燈圓明國師と諡す、入宋し
て無門佛眼禪師に嗣ぐ、虛堂
にも參ず、御は龜山上皇、法
要を問ひ給ふを云ふ。永仁六
年十月十三日寂す、壽九十二
なり、鷲峰は紀伊の由良興國
寺の山號なり。
高峰。顯日、後嵯峨天皇の皇
子、佛光無學元に嗣ぐ、圓照
は無準をいふ、巨福は建長の
山號、金寶は淨智の山號なり、
建長寺の山内正統庵に御塔あ
り、佛國應供廣濟國師と諡す。
規庵。祖圓、南禪第二世、南
院國師と諡す、信州の人、佛光
に嗣ぐ、年五十三にて寂す、
正和二年四月二日歸雲院に培
す。

鎖口訣に稱ふ、妙密の鉗鎚を以て諸方の柄子を煅煉す。眞實の道を以て、福龜山上皇に契合す。二十餘年、其の設施を大いにし、荒棘の林を化して、一方の巨利と爲す。功成つて居らず、時至つて便ち行く。末後の全提、尤も奇絶と爲す。些子徑山の文武火、今日扶桑傲氣に烈し。

孔子

學萬世の爲に師とせられ、道一貫に由つて傳ふ。也た知る三千の高弟、尙ほ六籍の陳言に泥むことを。

老子

天地に先んじて生あり、玄妙を極めて傳なし。關尹喜に遇得せずば、誰か五千言を授く可き。

巢父洗耳

萬乘君に於て一羽輕し、憐む可し利を逃れて名を逃れざることを。崖泉自ら洗ふ是非の耳、千古潺湲として恨聲を瀉ぐ。

仲父飲牛

義讓清逃各涯あり、徒に聞見を將つて天和を汗す。松根石上一たび首を回せば、穀練として朝來渴正に多し。

和靖先生

盡夜凍つて苔枝瘦す、童子寒飢して鶴夢長し。句は目前にあつて吟じ到らず、愁を凝し鼻を擁して匡牀に隠る。

樂天居士

鳥窠已に往いて韶光老ゆ、平生の功名一夢非なり。八節の清灘新に鑿り了つて、吟じて懸瀑を看て苔巖に坐す。

本朝名徳の贊

上宮太子

漢地の南嶽、累世善道を修持す。扶桑の東宮、願に乗じて正教を弘通す。前身後身、一夢兩覺。救世悲心滄海に似たり、萬古の慈光蓬島に滿つ。

上宮太子

不來の相にして來り、不見の相にして見す。臥底立底、觀體對現す。既に已に彌が病痛を知り得たり、何ぞ必ずしも更に手を出して面を露さん。更に言ふ傳法迷情を救ふと、如何が英靈の漢を瞞し得ん

弘法大師

普賢の願海に遊び、佛祖の印明を傳ふ。五筆謾に遊戲す、一法群情を度す。杵を高峰に飛して松翠

①匡牀、れんごのこまなり。
②鳥窠、道林國一酒飲に嗣ぐ、牛頭十一世、樂天之に間法す。
③救世、太子傳に曰く、一敬禮救世觀世音、傳三灯東方粟散王。

老ゆ、定身遺化儼として生けるが如し。

最明寺

英明の盛徳を以て、丕に皇猷を賛く、菩提の小心を以て、佛法を興隆す。世間出世間、一一俱に超越し、靈機密運妙窮りなし、千古の恩光塵刹を照す。

最勝園寺

天生英明東國の主、四十年間民の父母。威惠兼ね行ふ六十州、功成つて還つて率陀に向つて去る。

①最明寺。北條時頼なり。
②最勝園寺。北條貞時なり、時宗の子、相模太郎と稱す。

佛祖贊終

自讚

慧日誣長老の請

心は止水の如く、貌は枯松の若し。佛法不會、宗說豈に通ぜんや。短拙を懷藏して、赤窮を賣弄す。合に唐土に死すべきに、錯つて海東に来る。曲景に踞して塵尾を揮ひ、知見を衒ふて盲聾を誑す。謾に敢て風を呵し雨を罵る。能く鳳を打し龍を羅せず。會作家ありて放過せず、却つて五彩を將つて眞容を繪く。

保福猷長老の請

高坐に踞坐して、白塵尾を揮ふ。佛法の傳持すべき無し、世事料理すること能はず。必ず惡業縁あり、遠く扶桑の地に来つて、四五處住山、一些の能事なく、一處、方に通ぜず。鼻孔能く氣を出す、汝今強ひて吾が眞を貌らんと要す。萬古の微猷只だ箇の是れ。

良眞首座の請

眼眈眈として鼓槌に似たり。頭兀兀として木杓の如し、既に是れ禪なく道なし、何を用つてか海を

①慧日誣。古泉と號す。
②猷長老。古岩と號す、信州の慈雲寺、播州の法雲寺に住す。
③良眞。元相と號す。

逾之漢を越ゆ。良哉眞正の爲人、三尺の龜毛手に信じて揮ふ。烏藤冷靠す禪牀角。

良舜維那の請

傳持佛法なし、應用意智没し。但だ能く飢えては飯を喫し、渴しては水を飲む。端なく名元君に徹して金襴を賜ふ、官職妙慈弘濟と號す。迢迢として送過す東大海、年來老病百堪ふることなし。人前全體を露すことを欲せず。〔半身〕

性淳道人の請

木石の體質、雲水の精神、佛祖を陵辱し、平人を屈抑す。心を説き性を談ずることを解せず、深が朴に返り淳に還らんことを要す。龜毛手に在ることを得ば、方に能く佗の眞を識得せん。

禪人の請

西來法の傳持すべきなし、合に深雲に向つて遁れて時を過すべし。強ひて胡牀に據つて禪病を掃ふ、佗の佛祖を累して暗に眉を攢む。

尼明皓の請

有にして本空、動にして常に靜、江南水上の閒雲、滄海東邊影を布く。有る時は格外に宗を明め、只だ聲前に喚領せんことを要す。龜毛握にありて縱横に任す、勘破す末山の頂を露さざること。

尼明皓の請

唐土老を終へず、海東に驅到せらる。貌陋にして意氣高し、年多くして福德少し。釋迦の嚙囉を嫌ひ、達磨の潦倒を笑ふ。爲人の一句子、目前明皓皓。

又

貌枯れて柴の如く、心頑にして鐵に似たり。明明法の人に教ふるなし、只だ嗔拳熱喝あり。石上花を栽えんと要す、火中偏に繁を釣る。只だ此れ玄機を付す、軽く漏泄することを得ず。

雲巖居士の請

藤牀に據つて塵尾を揮ふ、禪の談すべきなく、法の示すべきなし、一味放憨癡。剛ひて道ふ唐土の五嶽山に非ず、扶桑の大海水に非ず、此の無意智の老僧に似たりと。雲巖描貌を要す、佗知らず何の意ぞ。

白讚終

雲巖居士。俗名は小串範秀、曹源集、少林談を作る。太清宗渭和尚の祖父なり。

良舜。日峯を號す。

小佛事

葦航和尚の秉炬 臘八

「雪嶺今朝成道、葦航此の日茶毗、今古了に二致なし、信に知る達者歸を同じうすることを。某人、東國の閉生、大覺の嫡嗣、一生義を尙ぶ。忠孝志節を以て師門を補贊す。數處の住山、本色の鉗錘を以て學者を煅煉す。王侯の敬慕する所、士庶の歸依する所、年八十有三を逾えて、老景庵居自ら佚す。時節既に至つて、手を撒して便ち行く、全く色象の先に超ゆ。誰か謂ふ空花亂墜すと。」辭世の偈、「生死の海を蕩過して、何ぞ妨げん一葦波に航することを。然りと雖も諸人若し者裏に向つて此の老子を見んと要せば、直に是れ未在。且く道へ甚れの處に向つてか見得せん。」火把を提起して云く、「伊に饒す急に機先の眼を著けよ、疾燄過風第二壽。」

壑典座の火

「有漏の箒篋、無漏の木杓、用過して了れり、甚れの處に向つてか著く。雲は山に歸り、水は壑に歸る。」火把を擲つて云く、「烈燄容さず蚊蚋の泊まることを。」

合首座 入骨 雪中の送に値ふ

①入骨。入塔に同じ、遺骨を塔中に收むること。

「香煙起る處便ち與塵に去る、大地氷稜合し、千山雪絮を飛す。便ち與塵に去る、太だ本據なし。」骨を撫して云く、「蒼龍骨を蛻する時、澄潭の裏に在らず。」

癡鈍和尚 入祖堂

動靜心を以てせず、古來都べて跡を絶す。斯の如き癡鈍の者、佛祖も又識らず。某人、半世水雲の身、一生氷蘖の質、誤つて蘭溪の滴水に沾ひ、生涯を喪盡す。再び無明の一燈を續いで四極に光揚す。兩處に正令を提持して、一毫肯て顧惜せず。直に得たり淨裸裸、赤洒洒、清寥寥、白的的。興來つて雲山に歸隱す、佛眼も也た窺ふことを得ず。時來つて路を得て便ち行く、萬里一天の秋色、既に位次の安排すべきなし。此に到つて知らず誰か委悉することを。某人、水牯從來共に一欄、鼻繩拽き斷ゆ東西に觸るること。

西澗和尚入祖堂

「去年元去らず、今年亦來ることなし。不來と不去と、南岳と天台と。故の我が前任當山大通禪師西澗和尚、松源の直下、石帆の嫡生。唐土に在るときは則ち天台南岳、妙に玄要を提ぐ、日東に來るときは則ち瑞鹿巨福、大いに宗綱を振ふ。面皮を翻轉する處、佛祖驚避し、機鋒を提起する時、衲子を拈す。功成つて居らず、身を翻して便ち行く。直に得たり、聖君風を欽びたまふことを。謚號を

賜ふて大通と曰ふ、本位次なし、豈に遮藏すべけんや。即今此の老蹲坐の處を見んと要すや。牌を呈起して云く、「鐵眼銅睛窺ふことを得ず、瞎驢隊裏共に徜徉。」

則首座、請を受けて淨居に住す、衣を授く。

雞足峰前、黃梅夜半、寸絲挂けず。一場の熱亂、人天の與に軌則と爲らんと欲せば、作家我れに堂中の簡を還せ。

尾藤金吾衣を授く 性常と名く

此の事本來授受なし、言ふこと莫れ授受本來無しと。鷲峰昔日迦葉に傳へ、梅嶺當年老盧に付す。一片做り成す宜しく自ら看るへし、袒肩擔負して相孚すことを要す。更に知る法性常に清淨なることを、世上堂堂たり大丈夫。

孚。信なり、めぐみたくすく意。

小佛事終

行記

師諱は一山、一山と號す、大宋國台州臨海縣、胡氏の子なり。齟齬にして村塾に入る、吾伊琅琅たり、郷先生其の敏悟なることを稱す。無等の融禪師、郡の浮山の鴻福寺に住す、主藏の者月靈江は、師の俗叔なり。怙恃其の塵累の姿なきことを察して、月を介して等に投ず、等、撫念を加ふ。三年にして月、四明の太白山に在り、使を遣して師を取つて、普光寺の處謙に與へて、法華等の諸經を習はしむ。二歳を踰えて得度す。間城中の應眞律寺に如いて開遮を聽く、延慶教寺に天台の教觀を學ぶ。杭州の集慶院の文節法師、台譽あるとを聞いて、足に躡して之に依る。已にして義學の支離を嫌ふ、棄てて歸つて月に就いて所疑を質す。時に月、天童の板首たり、堂頭は簡翁の敬なり。月、主者に讓る、師便ち之に謁す。翁、師の台教に粹なることを知つて、問うて曰く、「一心三觀、何を以つてか體となす。」師即ち一笑す。翁參堂を許す。坐究すること二暮、月、定海の資聖寺に瑞世す、師、道義を講じて隨つて往く。年を越えて、月、靈峰に移る、又之に隨ふ。久しからずし

①一山。宋の淳祐七年に生る、我が寶治元年なり。
②吾伊。讀書の聲、琅琅は鈴のやうになるこゝろをいふ。
③簡翁。居敬、癡絶沖に嗣ぐ。
④瑞世。最初の出世を云ふ。
⑤鄭山。青玉山をいふ。
⑥藏叟。善珍、妙峰之善に嗣ぐ、善は佛照光に嗣ぐ、大惠四世なり。
⑦東叟。大川普濟に嗣ぐ、濟

て辭して 鄧山に上つて珍 藏叟に依る、叟、淨慈の詔に應ず、交代は
 愷東叟なり。愷、師の妙英なるを見て主客に侍せしむ、愷罷めて照 寂
 窓繼ぐ、暮年に寺火く、意又 南屏に遷る。頑極の彌來つて主の位に據る、
 窓の燼餘を受けて、早く輪奐を復す。師以爲らく、一居四主我れ分なし、
 今此の老和尚、化權を 斬まず、又我が幸なり。意を傾けて親炙、從容醅
 醋す。我れに一法の人に與ふる無しといふに至つて、忽然として冥契す。
 翌歳に授くるに大藏の關鑰を以てす。印を解いて友人の明自誠を拉して、
 天台雁蕩の間に雲游す。錫を肩にして來り歸り、適一 環溪天童に踞す、衲
 子輻湊す、法社甚だ盛なり。師、挂錫を求む、溪拒まず、幾ならずして寺
 祝融に奪はる。是れに因つて又育王に回つて瑛横川に附く。川逝く、祥巧
 庵來る、庵逝く、沅 清溪來る、皆座下に居す。師已に諸老に參觀す、淵
 默雷轟く。太元の革命に逮んで法を昌國の祖印寺に闡く。至元甲申、仲夏中八なり。據室に曰く、
 「任公の 釣 六鰲を一掣す。若し是れ跛贅盲龜ならば、咄、頭を縮めて去れ。衲子掌を抵つて善と稱
 す。瓣香、頑極に供ず、所得を識るとなり。一住十載、佛殿外門を新にし、又衣資を捨てて、湖田圃
 地を買つて寺産を添ふ。寶陀の智 愚溪、維桑の舊あり、往來款密なり。一日語つて曰く、「我れ老

は浙翁球に嗣ぐ、球は佛照光
 に嗣ぐ、大惠五世なり。
 ⑤寂窓、有照、枯禪鏡に嗣ぐ、
 鏡は密庵傑に嗣ぐ。
 ⑥南屏、淨慈なり。
 ⑦新、吝なり。
 ⑧環溪、無準の法嗣なり。
 ⑨清溪、丁沅、枯禪鏡に嗣ぐ。
 ⑩至元甲申、時に一山の年三十
 八歳なり。
 ⑪愚溪、如智、偃溪田に嗣ぐ、
 大惠五世なり。
 ⑫維桑、詩經に「維桑維梓」と、
 古は墻の下に桑、梓を栽す
 る所以に云ふ、故郷の意な
 り。

いて衆を領するに倦む、我が兄を煩して可ならんか。」師耳を掩ふ、智潛に使を僧官に馳せて、讓賢の
 志を道ふ。府帖遂に至る、已むことを得ずして遷る。補陀の地、海岸の靈區、師の道價、勝域と並
 び騰る、六たび歳序を更ふ。一日 謂く、「巖洞に忽ち圓光を現す、聖像光中に隱映す。」師、感喜し
 て作禮す、須臾にして即ち没す。大徳二年の夏、我が商舶、明州に薄る、大元國主、初め我れを狙
 窺するの心あり、故に 辛巳、戰艦數、十萬に盈つ。然も風濤一夕破蕩狼狽す。是を以て我が國の神
 靈を恐るれども、 羸志未だ歇まず、屢奇筭を畫す。此の方の佛乘に傾郷
 するが爲に、有道の衲子を聘して、勸誘して以て附庸と爲んと欲す。愚溪
 既に其の任に當る、然も老病にして未だ發するに違あらず。偶 商 航の至
 るを聞いて、先策を成さんと欲して、俊髻を遴選す、臺評師に湊る。即ち
 慰使阿答刺相公に勅して、一省郎及び慶元府の判官、僧錄司知書、昌國
 州の知州、僧正司、知書等五十餘人を遣して寺に入る。宣慰使手書及び僧
 錄司の官書を出して曰く、「皇帝聖旨、省府に下して師に金襴の衣及び妙慈弘濟大師の號を賜ふ。溟波
 に泛んで、日本に到つて二國の好を通ぜよ。乃ち衣帖を以て師に付して輒語慰勞す、師道る可からざ
 ると思ふて之を受く。明日に一の行官、師を將ゐて府に到る、府官僧官皆在り、細に 通好の事を
 説き、而して元朝の信書一通を付す。又官吏五人を差して侍衛せしむ、蓋し師の逃匿に備ふるなり。

①謂、一本には「謂は恐らくは
 謁か」とあり。
 ②大徳二年、元の成宗の年號、
 我伏見天皇永仁六年に當る。
 ③辛巳、元の至元十八年、本邦
 の後字多院弘安四年。
 ④羸、餘なり。
 ⑤通好、和好なり。

尋いで燕參政公來る、國主の詔旨及び省部の文書を持して、宣讀了つて、急に舟に登らんとを請ふ。寶陀に歸つて宿ること一日、行官吏、三船を差して劇に送つて日本の船に附す。是に於てか風浪鼓蕩して、橋折れ舵摧く。修補僅に成る。進み馳すること三四日、高麗の絶徼に到る。又速奔すること一日、濤山浪嶽の間に没して、飄簸して博多に著く、本朝正安元年なり。舶主、書を以て元帥府に白す。府議して曰く、「敵國の命使命活せず。」或人の曰く、「使命活せず、然れども僧儀を奈何せん。先づ豆州の修禪寺に編置すべし。」或人の曰く、「宋僧の我が土に入る、多く道術を扱むなり。傳へ聞く、寧公は元國の望士なりと。其れ重寄を受くると又知んぬ可し、而も又抑逼に出でたり。且つ夫れ沙門は福田なり、有道の士は萬物に心なし、元國に在つては元の福なり、我が國に在つては我が福なり、豈に必ずしも區區として子卿が節を慕はんや。若し長く窮裔に朽ちなば、吾が土、比丘に郷ふの素に非ず。茲に因つて追ふて相陽に赴かしむ。而も猶ほ僻處に居す、未だ府寺に入らず。東方の緇白、初め師の錮居を聞いて大いに盡す。其の來るに及んで、奔波禮謁して只だ後れんことを恐る、山内の寓舍門外市の如し。十二月七日、福山の大道場を主る、叢規肅如として萬納鑽仰す。府主其の提唱を耳いて、中塗の稽帶を悔ゆ。會曇西澗、鹿山の事を謝す、府命、師をして之を權せしむ。兩山一矩にして衆望翼如たり。已にして建長を辭し、獨り圓覺の席を正すこと又四歲。偶昏眩の疾を以て

●正安元年。我國の後伏見天皇御宇なり、大元は成宗大徳三年、この前年、心地覺心寂す。●盡。傷むの意なり。

●壽藏に退居す。府帖再び建長を領せしむ、病魔荐りに孽して退休保養す。府命鹿峯の壽塔其の地狹隘なるを以て、巨福の右掖の杉谷に移す、庵成つて玉雲と名く。蓋し癡絶祖の其の塔庵、玉山と號す、頑極考の雲西、竝に取つて焉に扁く、本を忘れずとなり。老拳長杓儼然として自怡す、然も且望の禮賓、福鹿の主人に邁えたり。何も無うして、又起つて淨智寺を領する者四涼燠。正和二年、圓規庵、龍山に寂す。龍山は宮寺、望み輦轂に高し、初め建治太上皇、師の德譽を聞いて 覲見未だ由あらず。是に於てか元帥府に敕して、師を召して南禪の缺を補せしむ。師老いて羈旅に艱る、而も詔旨府命、逼つて辭するを容さず、來つて山務を領す。太上皇、海に山に入りて道を問ふ、摺紳の儔、戶外に蹙頞す。輦下の道俗、叢社の人あることを喜ぶ。然も老病侵し尋いで槌拂に懶し、數表を上つて院の事を解く。太上皇、眷遇復た渥くして允さず、故を以て一再潛に去つて、其の越州に通るるや、宸書慰諭して回ることを促す。文保元年の秋、恙際彌留して十月に益々革なり。太上皇、寺に幸して龜山の廟塔に躡して、時時に疾を問ふ。二十四曉、手染の遺表に曰く、「某、頓首、法皇陛下、聖駕本山に幸す、寔に緇門の觀光なり。某、不幸にして疾に臥すこと數日、百體擧すれども不仁なり、再び龍顔を瞻望すること能はず、大變持至つて、幼質將に摧けんとす。借して忠情を摠べて、無生三昧に入るのみ。年月日臣僧某頓首。」表を廟塔に獻

●壽藏。生前に定むる自分の塔所、玉雲菴。●淨智寺。鎌倉五山の四。●建治太上皇。後宇多天皇なり。●元帥府。鎌倉幕府なり。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄 卷下

ず。又偈を書して曰く、「一世に横行して、佛祖の氣を飲む、箭既に弦を離る、虚空地に落つ。筆を置いて化す、壽七十一。」太上皇、表を得て蒼皇として寢室に幸す、跣坐儼然として宛も生けるが如し。君臣嗟悼す。太上皇、便ち宸奎の贈國師の號を賜ふ。老師直示の的旨に報ゆといふの句あり。又僕射源有房公「時に門下侍郎」に宣して、文を作つて之を祭らしむ。又敕して龜廟の側に一塔を削りて、法雨の額を書して之を賜ふ。又其の像を賛して曰く、「宋地萬人の傑、本朝の一國師」と。其れ人主の爲に崇ばるゝこと此の如し。門弟子、塔を玉雲に分つ。師の性、慈和にして涯岸なし。近世道柄を執る者、嚴莊威重以て法助と爲し、且つ杷鞭とす也。師は一榻に孤坐して、通調を須ひず、新到遠來、出入問なく、人參請に便なり。禪策の中索隱なし、僅に事苑のみ、往々に漫に雌黃を下すこと多し、江湖之を思ふ。師の至つて闕疑を理するに及んで、然も言語通ぜず、乃ち舩牘に課す。隻字片句、朝諮暮詢、師の道韻柔婉にして、翰を執つて之に醜ゆ。教乘諸部、儒道百家、稗官小説、鄉談俚語、出入泛濫、輒ち數幅を累ぬ、是を以て學者博古に推す。又魯公の屋漏の法を善し、紙帛を攜へて掃寫を乞ふ者、鐵圍或は折く可し。其の七會の語、棟に充ち牛に汗す、未亡の前、手づから修刪を加ふ。今只だ數十紙、其の徒海を跨る者、齎して元土に入る、彼の地の衲子、玩味嗟服す。故に芝靈石、茂古林、本中峯、一時の名宿、各跋尾に證して議を容れず。余、師の門に遊ぶこと十數祀、請ふ所の益鮮からず。龍阜に

① 大手筆。大元の趙孟頫(子昂)、爲一山寧公贊す、「截彼南山、一仰之極、嵩嶽之寧、由流砥石、補陀孤絕、東海茫茫、

在るに覃んで、又密邇に境す、故に師の事を知ること熟せり。諸孤、師の自書の行録を抱き來つて曰く、「宋地の事は此に見えたり、入朝以來皆略す、況んや末後の榮遇、師の常に言ふべきに非ず。公の親しく見る者、乞ふ焉を足せ。」余が曰く、「竊に聞く、元遊の士、師の行實を彼の地の大手筆に索むと、盡ぞ需めざる。」對へて曰く、「遠く聞いて文略するは、曷ぞ近く見て質備はるに若かん。」余辭すること能はず。元亨元年雲節の日、濟北庵居の沙門、虎關師鍊謹んで記す。

紫雲垂錫、承天子之龍光、巨浪浮杯、顯使星之皇皇、聲聞華夷、名振扶桑、泰山之重、東瀛之長。鄰交徵書、初篇の一を引いて、五山編年史料にあり。
② 虎關。東山照に嗣ぐ、聖一三世なり、東福に住す、海藏院に塔す。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄卷下 終

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄附錄

後宇多太上法皇宸書國師號

朕、曾て師の道風を聞いて、一たび徳儀を覲んと思欲す。頃年詔を下し請じ來つて、先皇の聖跡南禪に補す。遂に夙志に酬ゆることを獲たり。神交り道契ふて、頓に法味を増して、中に得ることあり矣。師告ぐるに衰暮を以てして、屢歸休を乞ふ。朕、祖道の徽運を嘆じて、固く留止すること今茲に五載、法體違和、疾至つて彌留す。期に臨んで別を告げ、寂を本山に唱ふ。末後の全提、靈明天眞、所謂無心の道人、大法の主盟なるものなり。稱するに國師を以てす。老師直示の的旨に報じ、鶯嶺付屬の金言を旌さんと欲すと爾云ふ。

文保元年十月二十五日

一山國師門徒等

同帝宸書贊

内充而爲二道機、外發而爲二徳儀、

①宸書贊。師の肖像の宸贊なり。

本朝一國師。

元應元年初冬二十五日

芝山老叟書す

竹筥横揮兮威風動三沙界、金欄斜搭兮慈雲覆二坤維、拓二開人天區域、培二破佛祖藩籬、宋地萬人傑、

同帝宸書札

親しく書して特に南禪の長老一山禪師に告ぐ。

朕、師の道價を聞くこと久し矣、所以に詔を關東に下して、官差を以て請來す。一たび會晤することを得て、宛も司南の車を獲るが如し。徳を慕ひ風を欽じて、三たび青黄を閱す。而して聞く、退席に心ありて、數數行装を理すと。去年親しく寶刹に詣して、爲に之を勾す。近ごろ亦行李を打拚すと、書以て慰諭す。公、乃し蒲輪を屈して、來つて 朕が意に諾許す。

②書札。天皇の御親書腹なり。拚。競に同じ。

料らざりき暗裏に城を出でて、遠く山川を渉らんとは矣。若し回り來つて再び相見することを得ば、必ず自使に隨ひ、病を庵中に養ひて、懷蓮の古風を追ふことを許さん。何ぞ更に東關に歸ることを須ひん矣。直鏡ひ南禪の東堂に燕居して、小師等をして元の如く安著せしむとも、何の不可あらん、寧ろ又魔賊の擾すことあらんや。大都そ 公長く此の方を化し、廣く四衆の縁を結ぶとさんば、則ち 朕が願ふ所の者也。宜ろしく快く歸來すべし、千萬切に面話を要す。不

備。

五月六日
一山禪師

洞中隱叟書

應制祭文

源有房公

維れ大日本國、文保改元十月二十七日、特進前御史大夫源有房に勅して、昭に一山國師大和尚の尊靈に告して曰く、摩騰漢に來りて、顯宗欽を致し、初祖梁に入りて、武帝襟を紆す、至道を増崇すること、古乃今を稽ふるに、先皇の梵刹、揀んで保任を託し、靈山の附屬、眷命偕はず、克く明に克く哲に、法を問ひ心を問ひ、爾の徳を麟鳳にし、爾の音を金玉にす。祖域に光輝し、緇林に榮敷す。千載迥に期す、功と化と參ることを。倏ち眞に歸して、幻質を留めず、茲の偉人を隕して、良弼を亡ぶが若し、思慕馨くること罔し、死生一の如し。國師を賜諡す、名を以て實に副ふ、聖衷孔だ昭なり。青天白日、賻して香を奠せしむ。靈饗必ずし、尙はくは享けよ。

●洞中。仙洞御所なり。
●有房公。久我家の分家、六條家の二代なり、後醍醐天皇の元應元年六月、内大臣從一位となる、同年七月二日薨す、年六十九。

大師號宣命 「大元國成宗皇帝」

中書左丞 行 浙東道の宣慰使記事、寶陀堂上一山總統大師、今奉る、省筭有燕右丞、宣命を賣し擧げて、寧一山に妙慈弘濟大師江浙釋教の總統を授け、又錦欄の袈裟、鈔一百定を賜ふ。行に隨ふ伴常五名、段子表并に 詔書を賣し擧げ、慶元に前來し、起つて倭船を發せしむ。今本路并に僧録司をして、官に委して詣請達するが如し。一山總統、行かんとするに就いて、行に隨ふ伴常五名、即ち便ち城に到つて、飲んで 宣命を受く。賞賜理會、倭船 勾當更に別に來つて此を附せず、意を愚溪長老に致す。爲に禱る、併せ希はくば法照せよ。不備。

五月二十有一日修

寶陀堂上一山總統大師

●勾當。公事を勾當すこと、任務をさりあつかふを云ふ、後にある伴當もほゞ同じきものなり。
●緣首座。字は無著、西禪に住す、一山の法嗣なり。

中峰の破沙盆、三傳して癡絶に至り、更に二傳して、一山に至る。其の金聲玉振、黃鐘大呂の音の若く、能く人を瘖鬱聾聵に起すこと多し矣。故に 外國王臣尊禮して之を師とす。此れ豈に朽ちたる索を操りて、奔輪を馭するものと、日と同じうして語らんや。予、師を至元戊寅に識り、藏鑰を玉几に掌る時、今四十二年矣。●緣首座、此の録を持して、爲に示さる。其の顯發呈露を觀るに、東山の法門を開いて之を見れば、即ち心死し路絶し、人をして降嘆して已まざ

らしむ。因つて其の後に題すと云ふ。

延祐七年夏五二十日

鄱陽永福住山 清茂書す

慶元路育王弟 德明、一山法兄の禪録を拜觀す。道に南北無く、人に古今あり。大唐日本七坐勝棲、提唱語意、人の意表に出づ。龍象を走らしめて、翳睛の妙を得たり。端に尊んで一國の師と爲すべし。予、與に同條に生じて、與に同條に死せず、末後の句を覚めんと要せば、分明に只だ者れ是れ。歳次二庚申三月望日、無異堂に書す。德明東山。

去年爾が郷裏に一兄弟あり、曾て一山和尚臨終の事實を將つて、此に到る。并に國王親契國師號を賜ふの詔章來る。我れ曾て見了る、佗也た語録の跋を求めんと要す。我れ生平與に語録に跋し、録字を萃せず、佗去年亦乞ふ、大都ね生に爾曾て他に相見すや也た不やといふことを知らず。曾て一山和尚、道眼精明、學問深遠、況んや身、一國の師と爲る。要必ずしも別に跋序を求めざれ。既に一兩處茲を了ふることあり、亦多く求めざれ。幻者一例曾て

①清茂。字は古林、横川瑛に嗣ぐ、竺仙・月林・石室の師なり、松源三世。
②德明。字は東生、師も同參なり、育王に住す。
③親契。一本には親望に作る。
④來。一本には第に作る。第は但の字に同じ。
⑤錄。一本には多の字に作る。
⑥生。一本には主に作る。
⑦不。一本には否に作る。
⑧語要。一本には行要に作る。
⑨別。一本には則に作る。

人の與に題跋せず。

是の心何を用つてか名を安せん、至寶酬價を容れず。西庭柏侍者、乃師一山和尚垂示の語要を出して、跋語を求む。予、禪道佛法に於て、素より未だ解せざる所なり。故を以て、生平敢て妄に一字を尊宿の語中に加へず、恐らくは價を酬ゆるの誚を大方に貽さんや。柏領首して卷を掩ふ焉。

幼住 明本

①明本。明本を一に擧に作る、誤なり。明本字は中峯、高峯妙に嗣ぐ、傍するに幼住を以てす、或は船居、或は菴居す、元の英宗、至治三年八月十四日寂す、年六十一。

國譯一山國師妙慈弘濟大師語錄附錄 終

一山國師妙慈弘濟大師語錄序

我宗無語句、亦無一法與人、若有一法與人、土亦難消、古人與麼、水泄不通、不知此語此錄、何從而有解、向未啓口、未落筆以前、會得、方見我。一山和尚傳、頑翁不傳之秘、倡道扶桑、大用峻機、若雷霆擊空、巨黍破的、王臣師仰、學者景從、洞徹死生、了無凝滯、雖所說雲興水涌、所錄充棟汗牛、不爲剩矣。一山與余生同台嶠、夏同玉几、講磨奮厲、道術相忘、戢化以來、嗟悼不已、延祐庚申冬、神足緣首座、携所錄七會語、爲示披覽、以還、不覺拊卷而言曰、佛法東漸、于以見矣。

禾城本覺如芝書。

便禮拜。

解夏上堂，禁足安居，尅期取證，何異繼韓獪而責獲，我者裏一切無拘，任其自化，且秋初夏末，賞勞事作麼生，臨濟雷奔喝，德山雨點棒。

開爐，遠出歸兼謝，相訪上堂，住山無定力，茫茫外邊走，打失了鼻孔，拈得一張口，今日歸來，火爐頭無賓主話，試與諸人舉看，拈拄杖，卓一下云，明眼人前，漏逗不少。

冬至上堂，暑運推移，日南長至，三家村裏爛牛屎，動地放光，十字街頭坵圾堆，演大法義，何以見得，不見道，是法住法位。

元宵上堂，舉教中道，見聞覺知是法公案，師拈云，恁麼說話，何異將油洗皂，只如節逢元夕，是處管絃沸，月燈火燒空，衲僧家，入眼是色，入耳成聲，畢竟是法耶，離法耶，拈拄杖，卓一下云，江南地暖，塞北天寒。

佛生日上堂，指天指地，露醜舉止，唯吾獨尊，倘若無人，二千年前，不可放過，二千年後，放過不可，下座，詣大佛殿，更與驗過。

上堂，舉翠巖芝和尚示衆云，大家相聚，喫葷齋，公案，師拈云，大眾直饒不喚作一葷齋，亦未免入地獄，如箭射，何故，武陵春色好，塵世幾人知。

祖印語終

一山國師妙慈弘濟大師語錄卷上

初住大元四明鰲峰山祖印禪寺語錄

侍者 了 真編

師於至元甲申五月十八日入院，指三門，顧視左右云，八字打開了也，龍門客少，鬧市人多，佛殿一坐具地，人人有分，黃面老漢不知，展坐具云，今日爲伊說破。

據室任公之釣，一掣六鰲，若是跛鰲盲龜，咄，縮頭去。

拈疏相濡相煦，義薄雲天，及乎話到諸譎，又卻肝膽楚越，不信聽取下文。

法座，祖佛行不到處，道不及處，新鰲峰要舉步踏著，開口道著，何故，別有一路子，遂陞座，祝聖罷，問答不錄。

提綱，祖師心印，古篆分明，無端後來，胡擔亂擔，失真了也，今日在寧上座，手裏試倒用看，拈拄杖，卓一下云，錦縫全開，朱點不露，運靈樞於劫外，敷大化於寰中，直得巨鰲不動，三山常聳於太虛，萬國來賓，帝祚永隆，於億載，雖然，全如紋篆未形，已前，又作麼生，又卓一下云，收。

復舉楊岐問慈明，幽鳥語喃喃，公案，師拈云，是則是，猛虎不食其子，因甚，慈明連喝兩喝，楊岐